

333

317-22

振武餘光

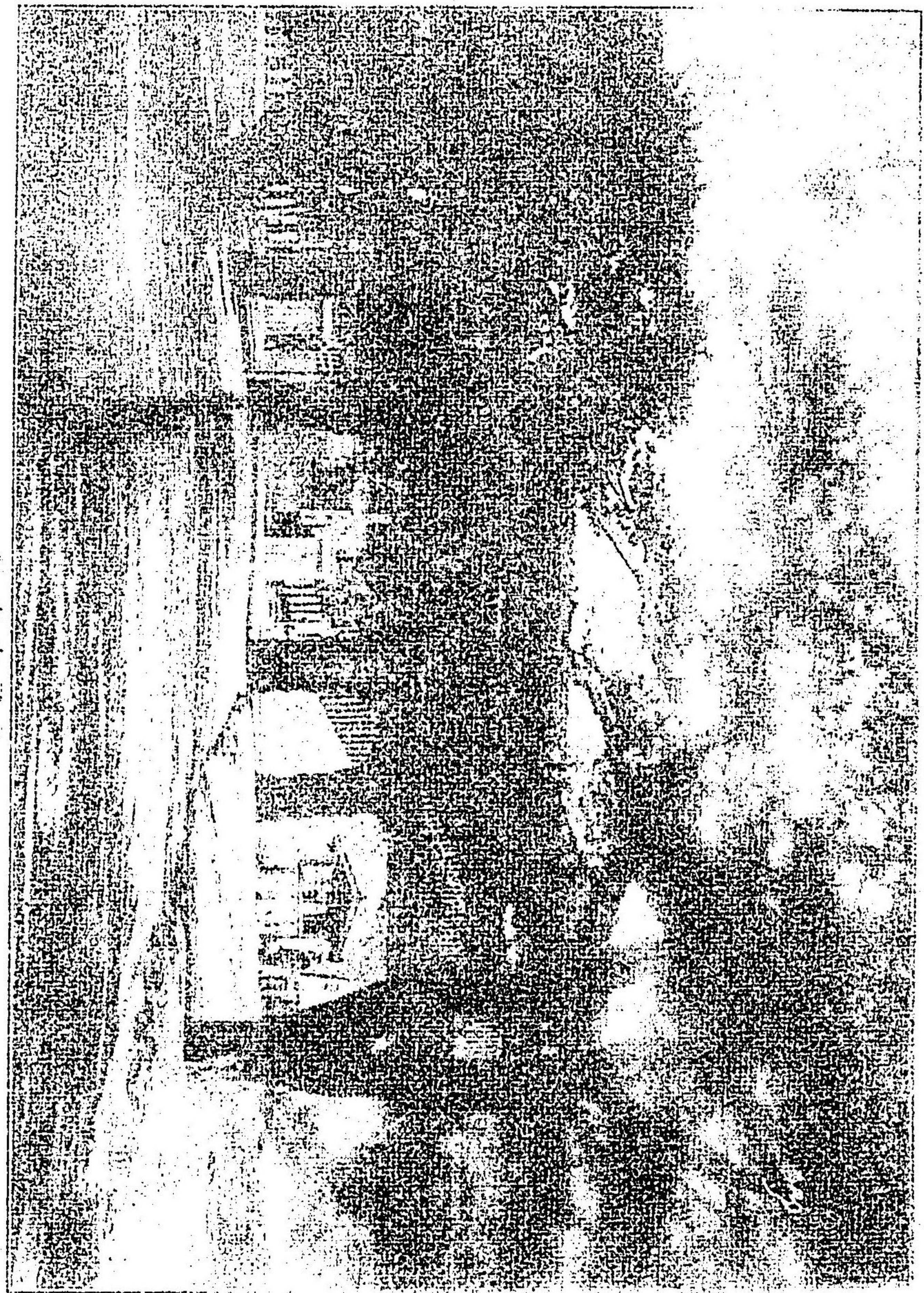
兵庫縣 寄贈本



明治三十六年十一月

陛下親臨陸軍特別大演習ヲ播州ノ野ニ舉行アラセ給フヤ宵旰勵
精御統監ノ勞ヲ執ラセ給フコト數日其間南朝ノ忠臣ヲ追賞シテ
贈位ヲ陞セラレ又明治維新ノ際王事ニ勤メタル諸藩ノ志士ニ位
階ヲ贈叙シ給ヒ或ハ神社陵墓ニ或ハ勤王志士ノ墓碣ニ或ハ戰死
者ノ紀念碑ニ各々侍臣ヲ遣シテ親シク追遠吊慰ノ優恩ヲ垂レ給
フ伏シテ惟フニ

陛下至德聖明允文允武曩ニ海軍特別大演習ノ事アリ觀艦式ヲ神
戶港ニ舉サセ給フヤ侍從ヲ郡市ニ差遣サレ具サニ殖産興業ノ狀
況ヲ視察セシメ給ヘリ其後未タ幾許ナラスシテ再々ヒ 行幸ノ



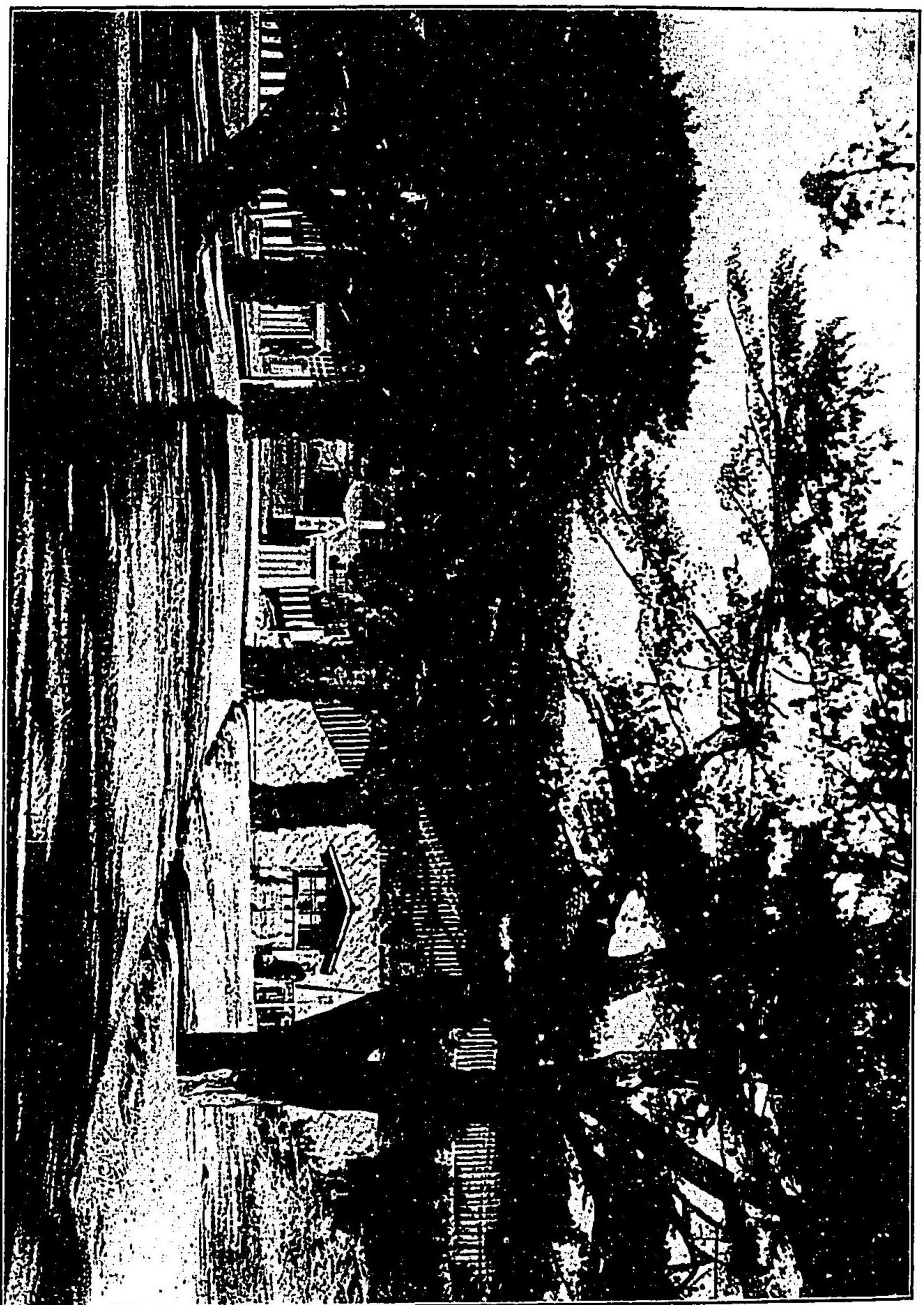
西本天宮

榮ヲ拜シ奉リ而カモ事齊シク振武ノ盛儀ニ屬ス本縣ノ名譽洵ニ
至大ナリト謂フヘシ之レニ加フルニ其振武ノ餘光ハ長ヘニ管下
忠勇ノ枯骨ヲ照ラシ恩澤洽ク古今ニ及フ 聖意ノ優渥ナル誰レ
カ
陛下ノ盛徳ヲ欽仰セサルモノアラムヤ今茲ニ當時ノ顛末ヲ記シ
併セテ之レニ關スル庶事ヲ叙シ以テ一冊子ト爲ス名ケテ振武餘
光ト曰フ縣民及ヒ其子孫ヲシテ永ク無上ノ盛事ヲ感銘シ一旦緩
急アレハ則チ義勇公ニ奉スルノ誠ヲ致サシメ以テ 聖恩ノ萬一
ニ酬ヒ奉ラムコトヲ期ス謹テ之ヲ序ト爲ス

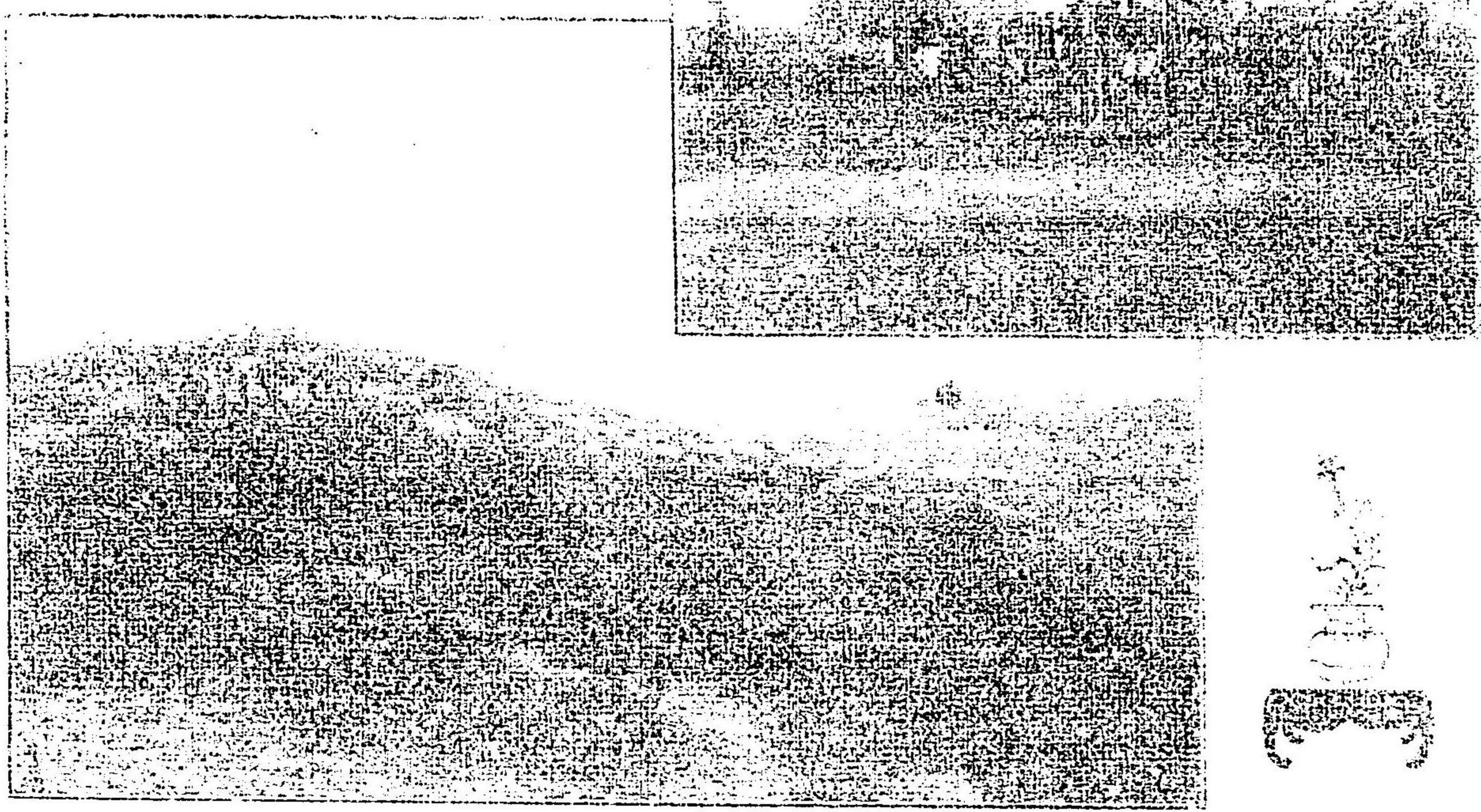
明治三十七年一月

榮ヲ拜シ奉リ而カモ事齊シ振武ノ盛儀ニ屬ス本縣ノ名譽洵ニ
 至大ナリト詔フヘシ之レニ加フルニ其振武ノ餘光ハ長ヘニ管下
 忠勇ノ精骨ヲ照ラシ恩澤洽ク古今ニ及フ 聖意ノ優渥ナル誰レ
 カ
 陛下ノ盛徳ヲ欽仰セサルモノアラユキ今茲ニ當時ノ顛末ヲ記シ
 併セテ之レニ關スル庶事ヲ叙シ以テ一冊子ト爲ス名ケテ振武餘
 光ト曰フ縣民及ヒ其子孫ヲシテ永ク無上ノ盛事ヲ感銘シ一旦緩
 急アレハ則チ義勇公ニ奉スルノ誠ヲ致サシム以テ 聖恩ノ萬一
 ニ酬ヒ奉ラハコトヲ期ス謹テ之ヲ序ト爲ス

明治三十七年一月

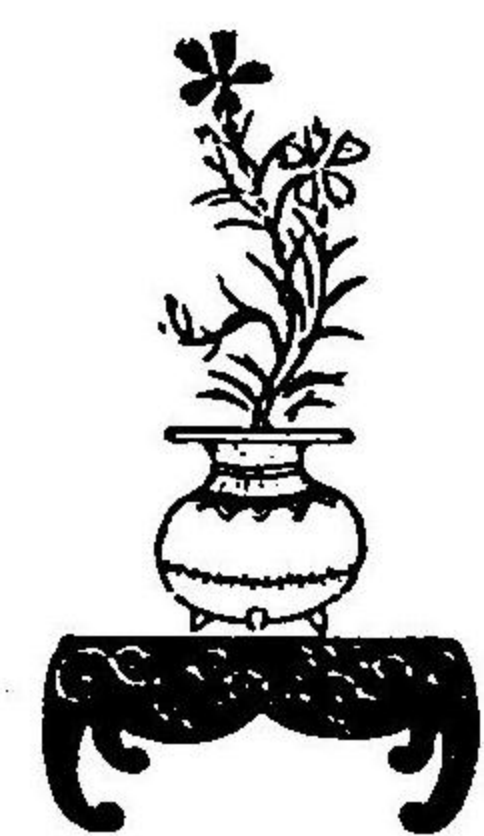
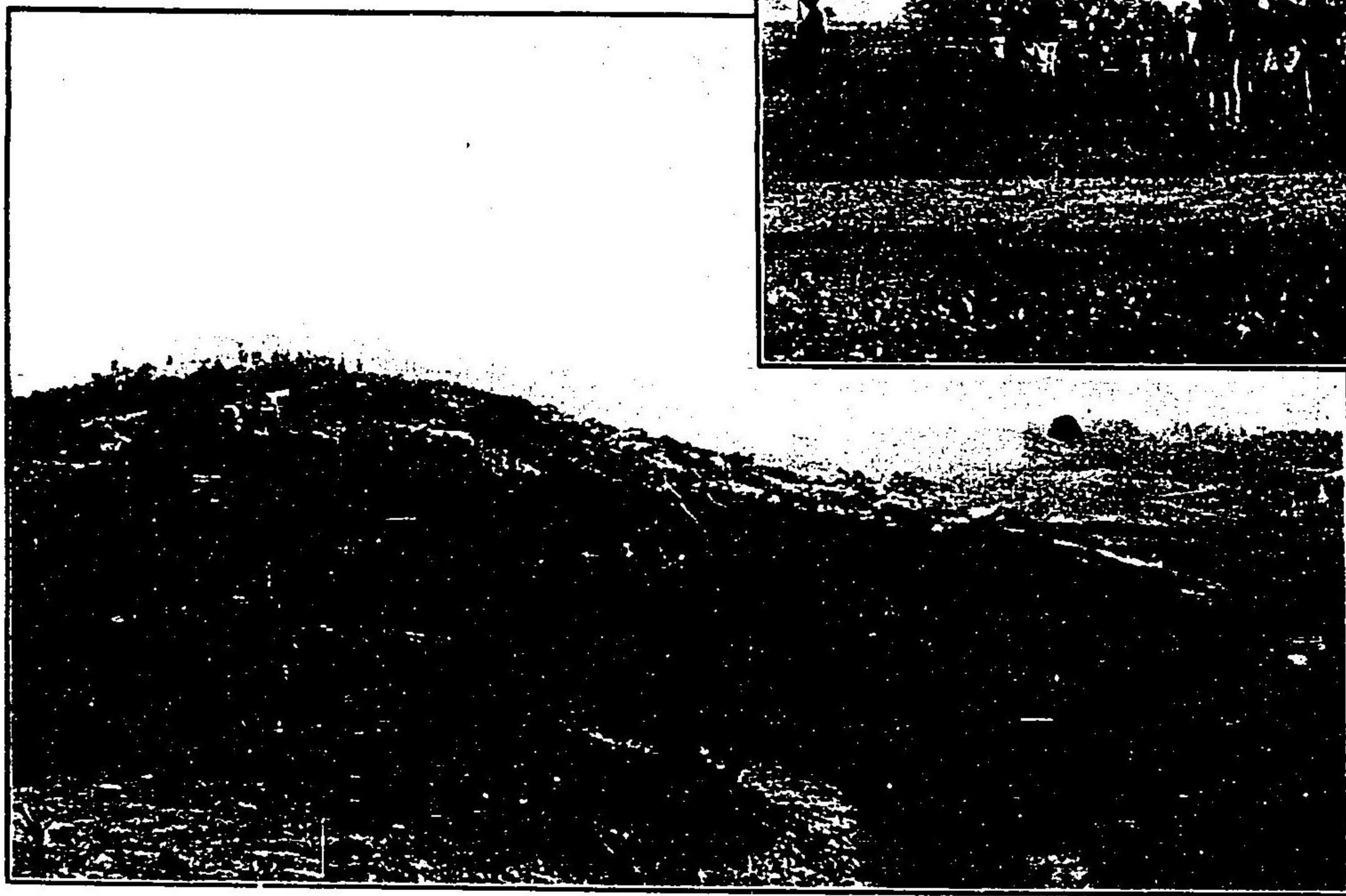


管本大子舞

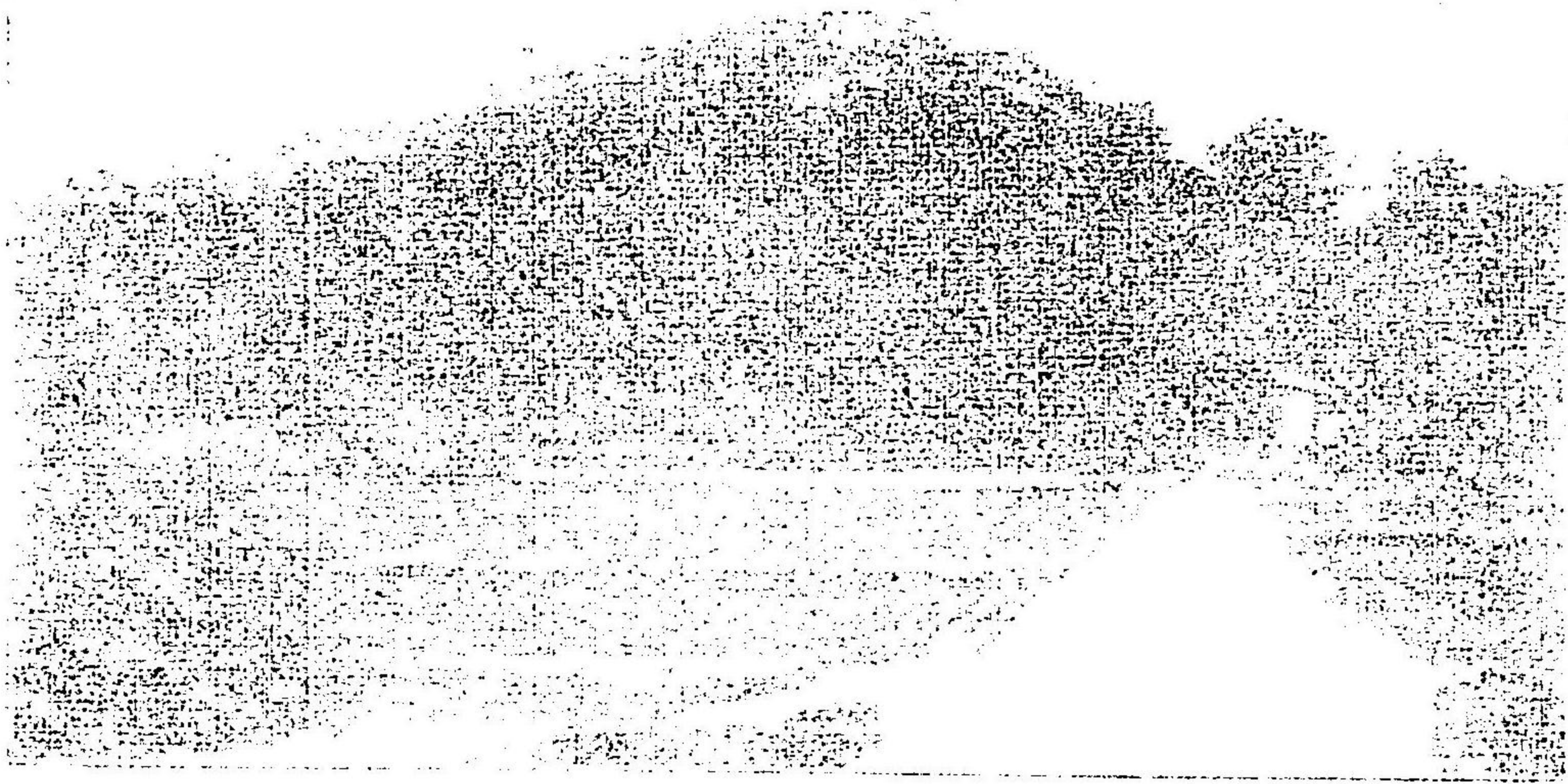
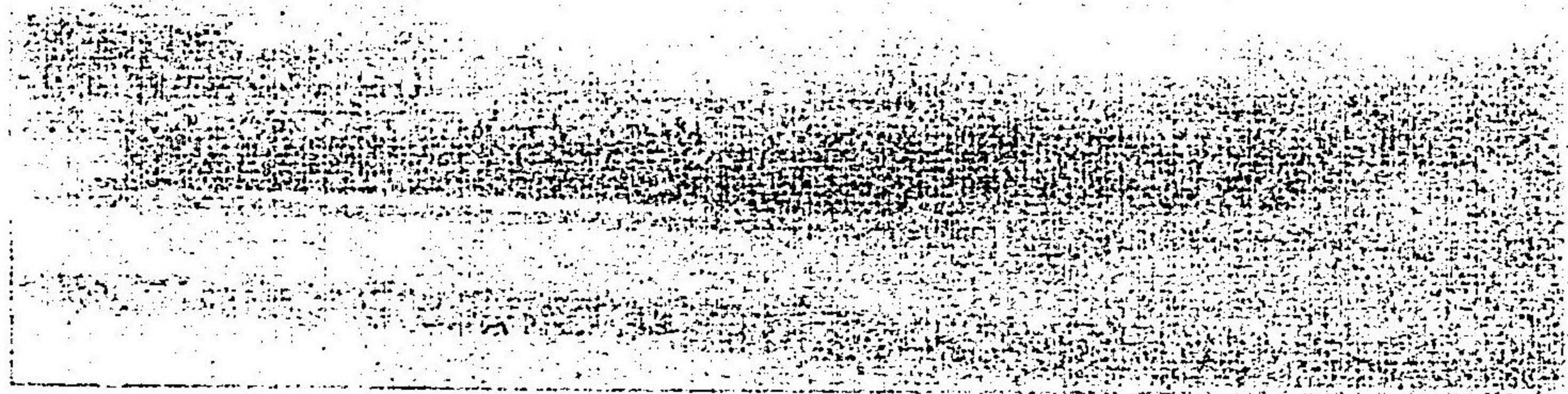


聖島地誌御出圖

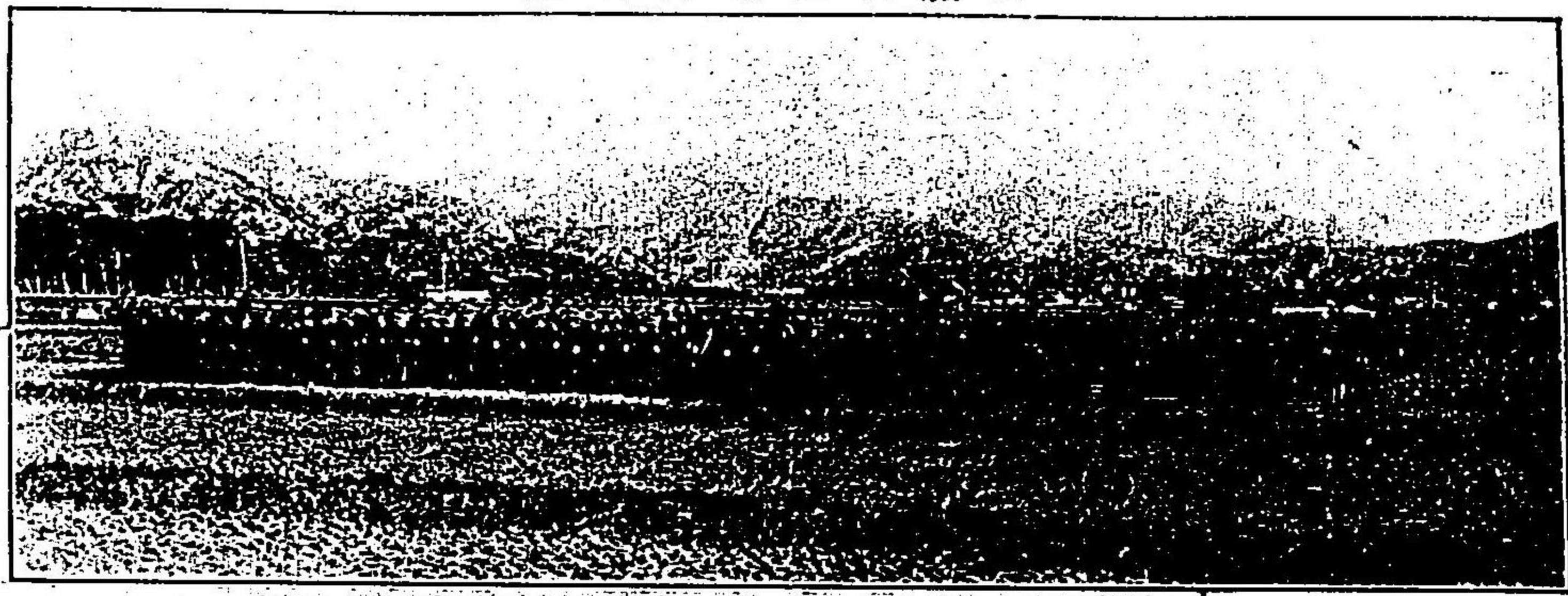
明石郡岩岡村御統監場所



日岡山御統監場所



山脇村御講評場所

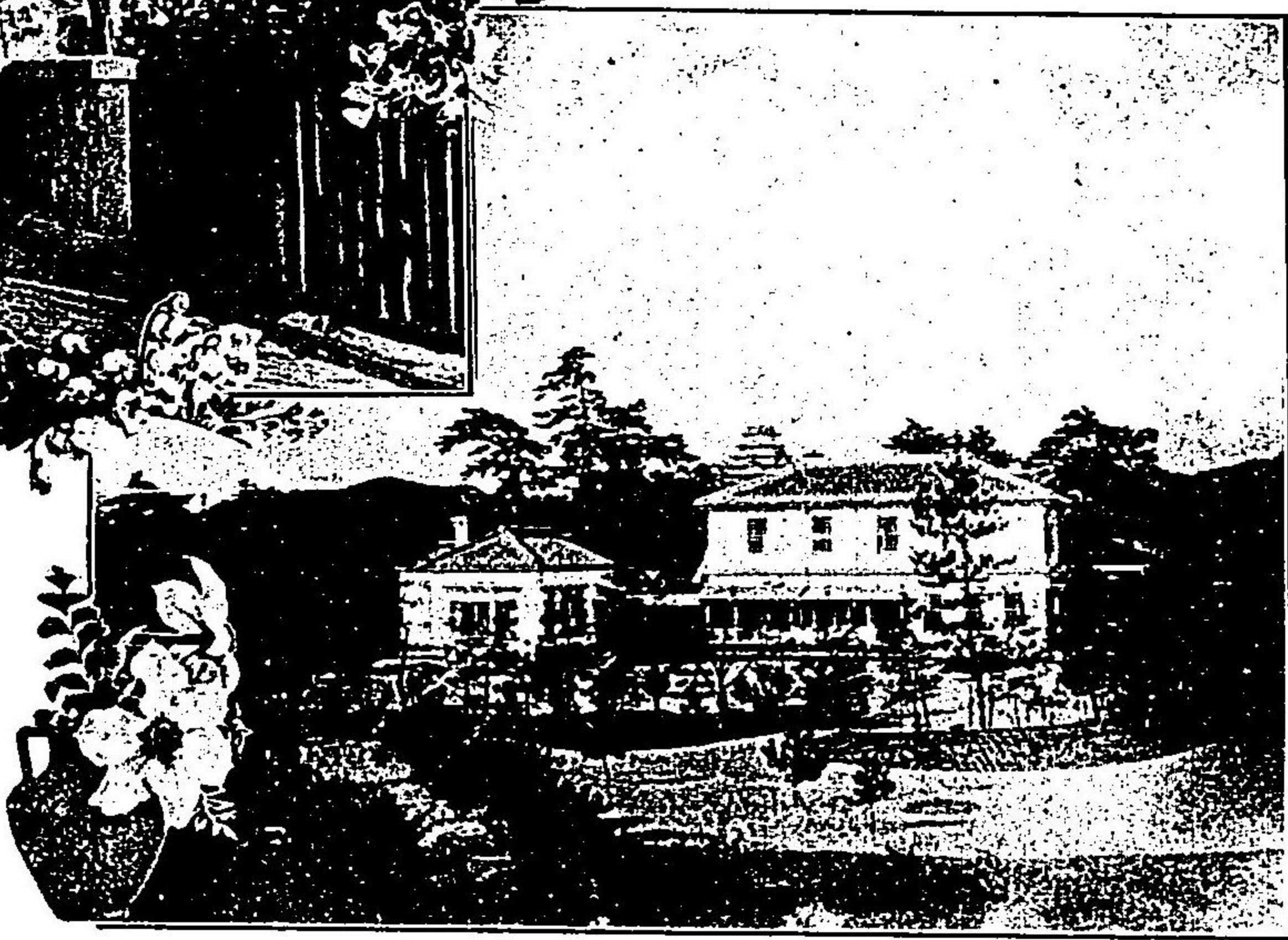
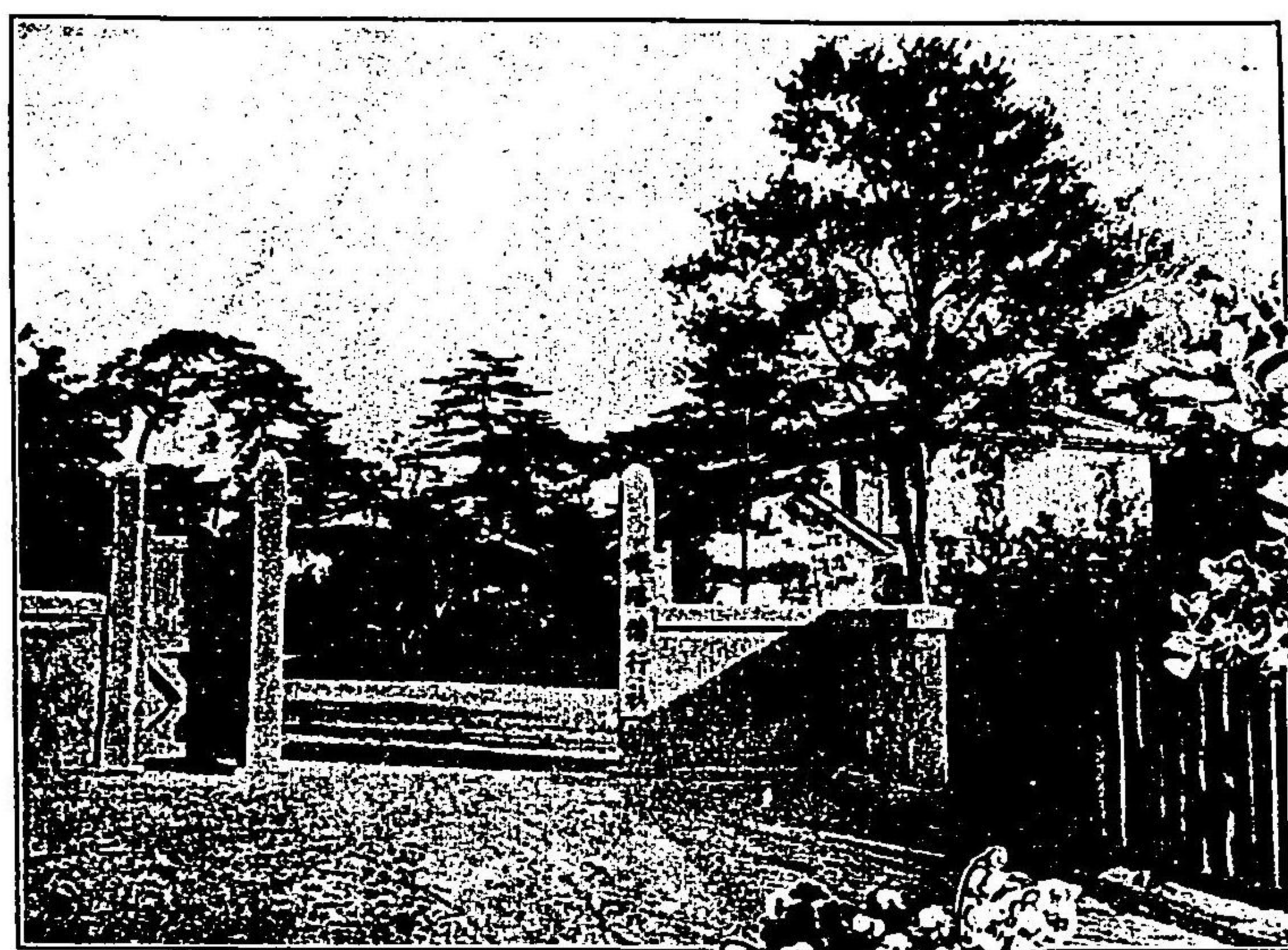


上鈴山御統監場所



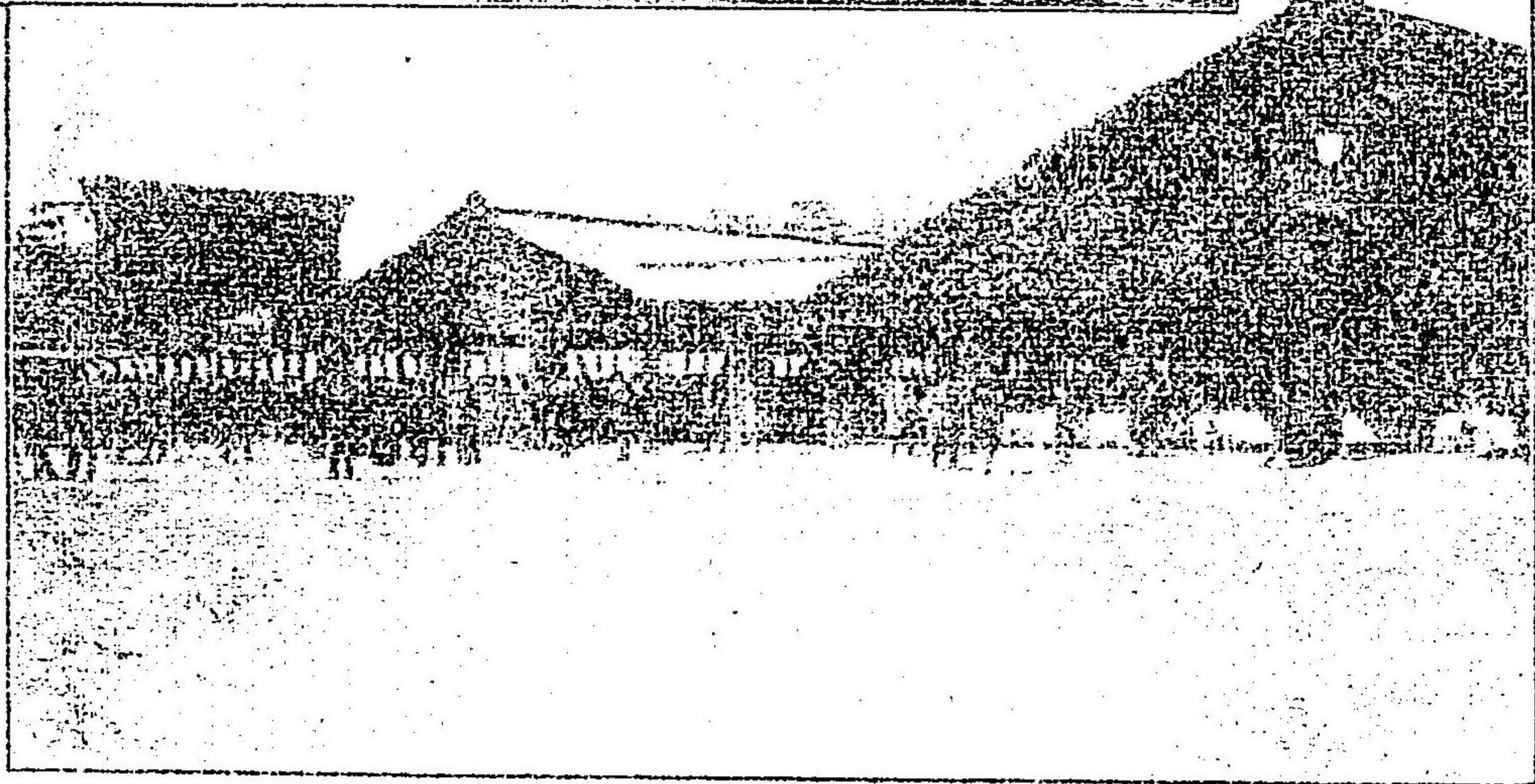
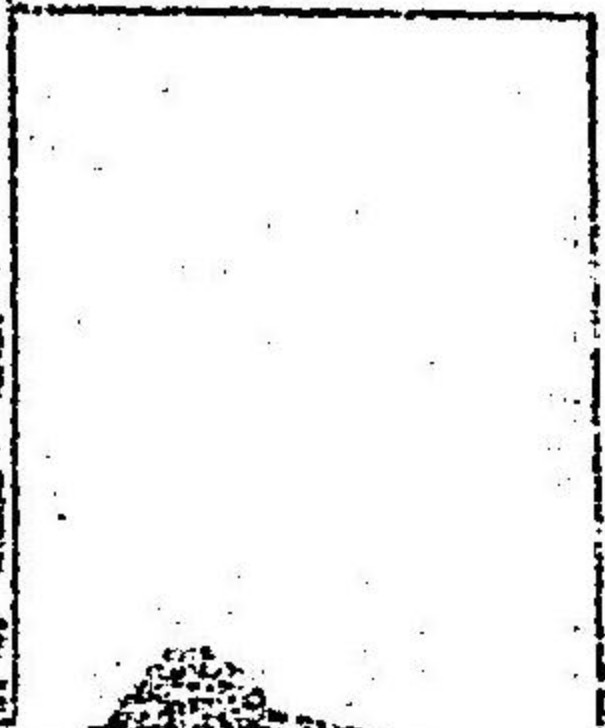
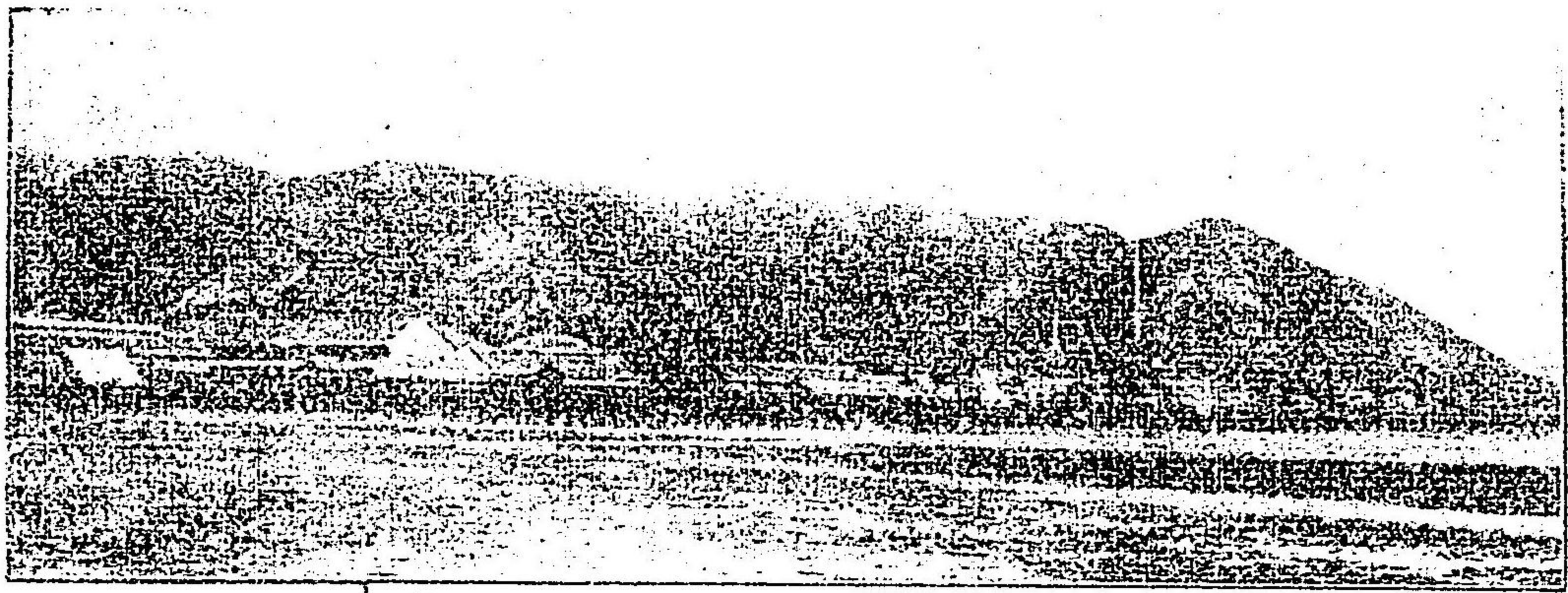


所 想 作 圖 物 品 均 奉 供



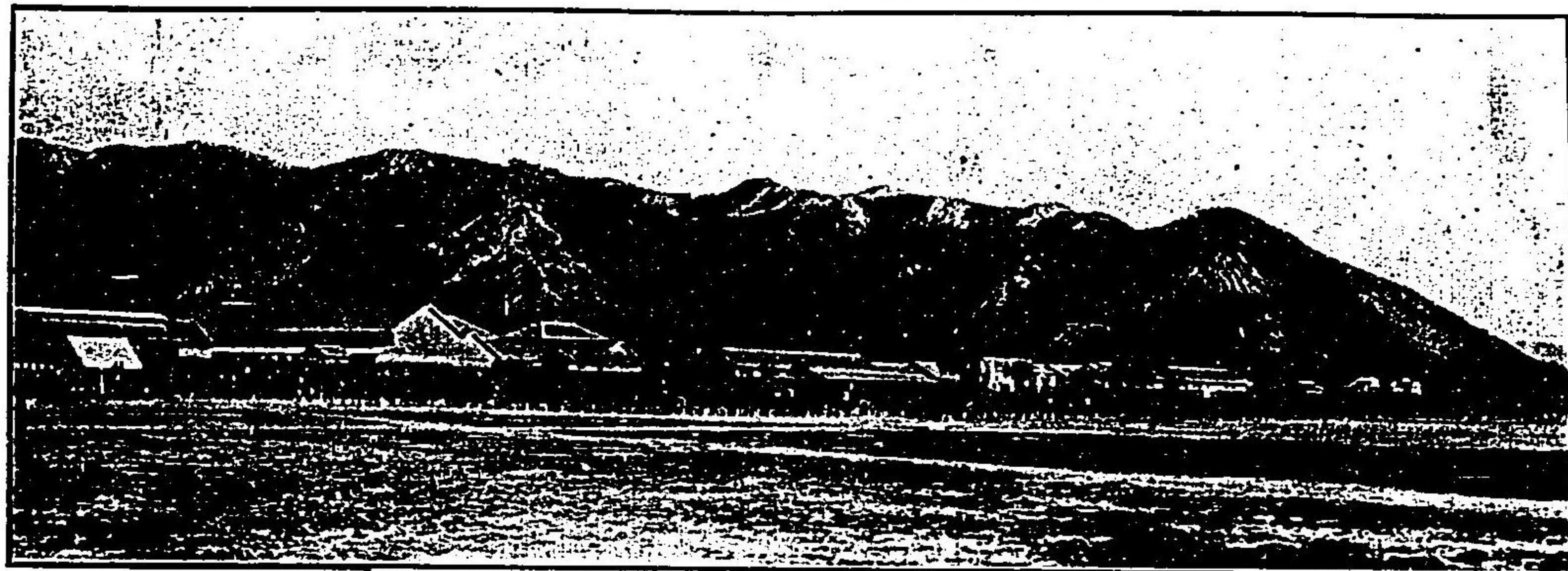
所憩休御

所詰員奉供



御宴會場

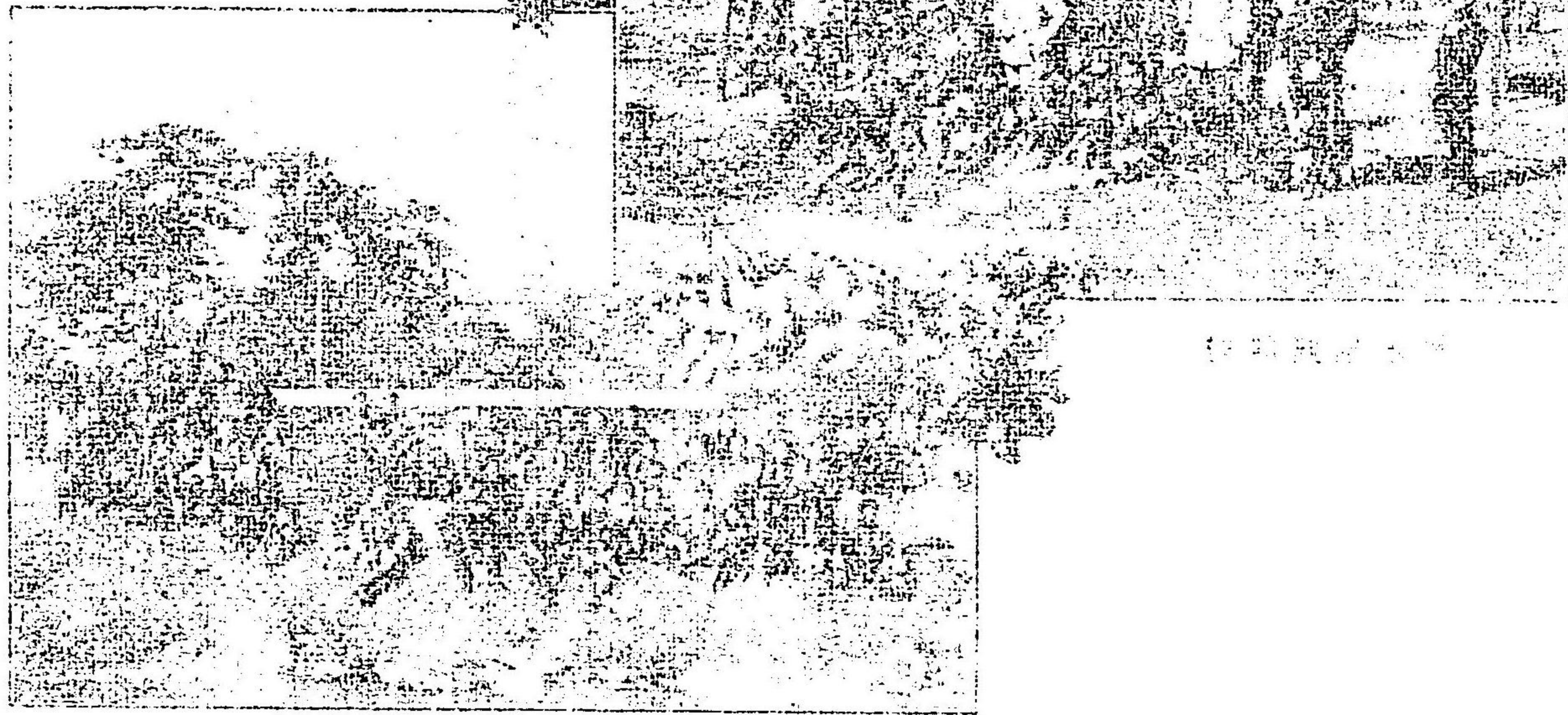
城北練兵場觀兵式



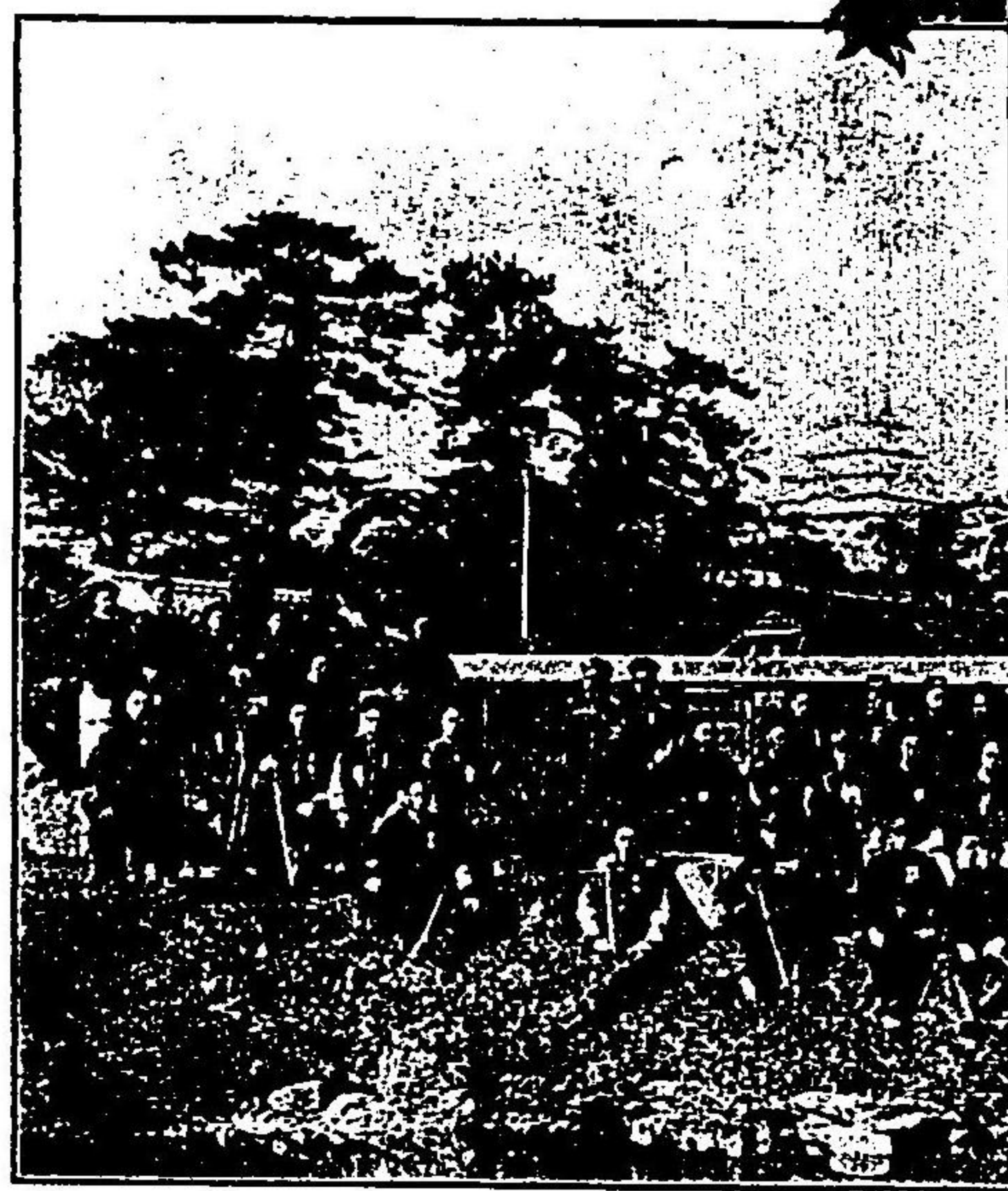
御宴會場



校前院景



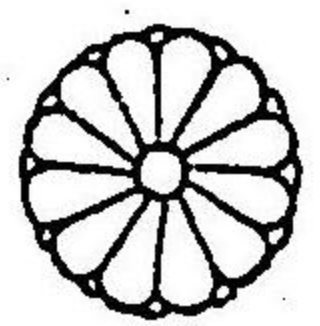
枝將觀陪韓滄



枝將觀陪米歐

勅語

講評ハ參謀總長ニ命シテ爲サシ
メタリ



朕親シク演習ヲ統監シ機動ノ稍
々宜シキニ適ヘルヲ認ム蓋シ用
兵ノ妙ハ實驗ノ練磨ニ待ツモノ
多シ汝等益々奮勵シ速ニ大成ノ
域ニ達セヨ

明治三十六年十一月姫路廣島丸龜三箇師團ノ諸兵ヲ集合シテ特別大演習ヲ本縣下ニ行ハセラルル同月十二日午前十一時卅分兩軍騎兵ハ加古郡加古川町東南野口村附近ニ於テ遭遇シ小戰ノ後午前零時十分演習ヲ中止ス此日大山參謀總長勅ヲ奉シテ之ヲ統監ス午後四時十一分 天皇陛下舞子大本營ニ着御十三日午前六時五十分大本營御出門同七時舞子假停車場御發車同時四十分加古川停車場ニ着御同八時加古郡氷丘村日岡山稻日太郎媛命陵高地ニ於テ兩軍一部ノ戰鬪演習ヲ親シク御統監アラセラレ午後一時演習中止後同地御發轡同二時加古川停車場御發車同時卅分大本營ニ還御十四日午前七時廿分大本營御出門同時卅分舞子假停車場御發車同時五十七分土山停車場着御同八時四十五分明石郡岩岡村ノ内古郷村ニ着御親シク兩軍戰鬪演習ヲ御統監アラセラレ午前十時四十五分演習中止後御晝餐アラセラレ午後零時四十五分演習地御發轡土山停車場ヨリ御乘車同二時舞子大本營ニ還御十五日午

前七時廿分大本營御出門同時卅分舞子假停車場御發車同八時卅分御着停車場ニ着御同時四十五分飾磨郡四鄉村上鈴山ニ於テ親シク兩軍攻守戰鬪演習ヲ御統監アラセラレ午後零時二十五分演習中止御晝餐後同村ノ内山脇村ニ於テ兩軍ノ將校ヲ集メサセラレ參謀總長ヲシテ講評セシメラル次テ勅語ヲ賜ヒ兩軍對敵動作ヲ解カサセラレ同二時十分演習地御發轆同時廿分御着停車場ヨリ御乘車同三時十分舞子大本營ニ還御十六日午前七時廿分大本營御出門同時卅分舞子假停車場御發車八時卅分姫路停車場ニ着御第十師團偕行社ニ於テ御少憩ノ後同九時四十分城北練兵場ニ臨御大演習參列諸兵ノ觀兵式ヲ行ハセラレタル後十一時五分同所御發轆偕行社ニ於テ御休憩御晝餐アラセラレ午後一時卅分御宴會場ニ臨御同時五十分御退場姫路停車場ヨリ御乘車三時舞子大本營ニ還御十八日午前七時十五分大本營御發轆同七時廿分舞子假停車場御發車靜岡御用邸御泊翌十九日還御アラセラレタリ

振武餘光記事

明治二十六年十一月中旬陸軍特別大演習ヲ本縣下播州ノ野ニ舉行セラル、ヤ
天皇陛下同月十一日東京御發轅名古屋離宮ニ御泊翌十二日ヲ以テ舞子有栖川宮
御別邸ノ大本營ニ着御アラセラレ鳳輦ヲ駐メサセ給フコト茲ニ數日其間日トシ
テ親シク演習地ニ臨ミテ御統監アラセ給フノミナラス特ニ南朝ノ忠臣兒島高德
等ニ對シ贈位ヲ進メラレ又明治維新ノ際王事ニ勤メタル諸藩ノ志士ニ對シ贈位
又ハ陞位ノ優恩ヲ垂レ給ヒ或ハ神社陵墓ニ或ハ勤王志士ノ墓碑ニ或ハ戰死者ノ
紀念碑ニ各侍臣ヲ遣シテ追吊逮ラサルナシ其概要左ノ如シ
十一月十三日贈正四位兒島高德外二名ニ對シ特旨ヲ以テ更ニ贈位ヲ進メラレ故
春日仲襄外四十九名ニ對シ位記ヲ追贈セラレ又正六位八木雕外一名ニ對シ位記
ヲ進メサセ給フ今本縣ニ關スルモノヲ茲ニ掲ク

贈正四位

贈從四位

兒島

範

長

贈正四位	故	河合屏山
贈從四位	故	中島太郎兵衛
贈正五位	故	黒田與一郎
贈正五位	故	古東領左衛門
贈正五位	故	秋元正一郎
贈正五位	故	境野求馬
贈從五位	故	中條右京
贈從五位	故	太田六右衛門
贈從五位	故	伊藤龍太郎
贈從五位	故	片山九市
叙從五位	從六位	永田伴正

同日爵位局長公爵岩倉具定ヨリ右御沙汰ヲ傳達セラル、ヤ本縣知事ハ直ニ之ヲ遺族竝ニ本人ニ通達シ各遺族竝ニ本人ハ執レモ本縣舞子出張所ニ出頭聖恩ヲ感泣拜謝シタリ

遺族姓名

河合屏山孫	東京市本郷區駒込分町百番地
中島太郎兵衛甥	兵庫縣發父郡大藏村ノ内高田村百廿三番屋敷
黒田與一郎甥	兵庫縣三原郡津井村三百三十四番屋敷
古東領左衛門甥	東京市小石川區指ヶ谷町四番地
秋元正一郎長男	大阪市南區難波新川一丁目八百七十八番屋敷
境野求馬孫	兵庫縣出石郡出石町ノ内松ヶ枝町八十一番屋敷
中條右京弟	吉村勇七

大阪府東成郡鶴橋村大字東小橋百十二番地

太田 久米藏

京都府天田郡龜岡村字前田

伊藤 徳松

兵庫縣氷上郡黒井村ノ内黒井村二千番屋敷

片山 義道

太田 六右衛門 次男

伊藤 龍太郎 甥

片山 九市 甥

十四日午前八時侍従子爵北條氏恭ハ兵庫縣參事官鶴見左吉雄兵庫縣警部土岐益之進ヲ從ヘテ大本營ヲ出發シ舞子ノ濱ヨリ水雷艇第二十五號ニ搭乘シ直ニ内海ニ航シテ津名郡家村ノ海濱ニ到ル時ニ午前九時津名郡長赤堀威洲本警察署郡家分署長警部松尾朔生郡家村長高岡宇吉其他村會議員等船ヲ艤シテ之ヲ海上ニ迎ヘ小學校生徒等整列シテ陸上ニ迎フ九時二十分郡家村ニ上陸スルヤ伊弉諾神社稱宜市富士太郎先導シテ多賀村ニ到リ社前ノ民家ニ少憩宮司曾和慎八郎出テ迎ヘ先導シテ伊弉諾神社ニ着ス侍従ノ一行直ニ幄舎ニ入ル神官神扉ヲ開キ神饌

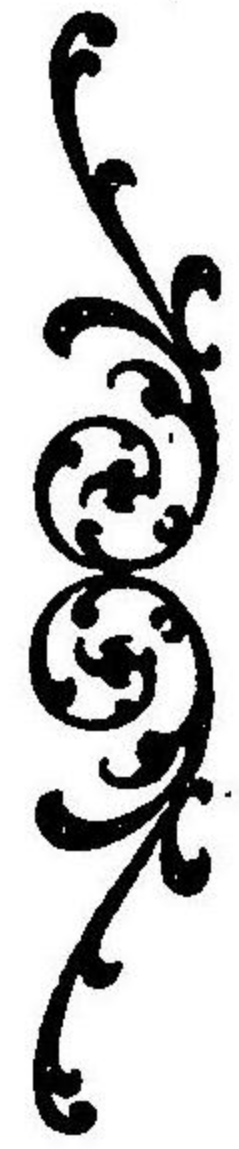
ヲ上リシ後侍従齋ス所ノ幣帛料(金貳拾貳圓)及神饌料(金八圓)ヲ神前ニ供シ侍従玉串ヲ上リ拜シ了リテ一同社務所ニ入りテ休憩宮司神酒ヲ供シ神社ノ由緒祭日等ノ事ヲ具サニ上申ス十時十分出發郡家村ノ濱ニ到ル送ル者前ノ如シ十一時十一分水雷艇ニ移リ直ニ拔錨十一時三十分舞子ニ歸著午後一時十二分再ヒ舞子ヲ出發瀛車ニ搭シテ日岡御陵ニ向フ隨員前ニ同シ二時七分加古川驛ニ下車加古郡長三輪信一郎氷丘村長吉田喜代松加古川町長大村清七等出テ、迎フ一行人力車ヲ馳セテ氷丘村日岡山ニ到ル即チ景行天皇ノ皇后稻日太郎媛命ノ御陵ノ在所ナリ諸陵寮勤務主殿助中川忠純御陵監守松尾傳三郎等御陵ノ入口ニ迎ヘテ之ヲ先導ス侍従ハ進ミテ御陵ノ前ニ到リ立拜シ了リテ郷社日岡神社社掌日岡長正ノ家ニ少憩ノ後加古川町ニ至リ兵庫縣出張所ニ於テ少憩三時二十四分同驛發ノ瀛車ニ乘シ四時九分ヲ以テ舞子驛ニ着シ直ニ大本營ニ歸ラル

十五日午前八時三分北條侍従ハ大本營出發舞子驛ヨリ瀧車ニ搭シテ廣田神社ニ向フ隨員前日ノ如シ午前九時十八分西宮驛ニ着ス武庫郡長阿部光忠前宮司祝儀麿(十一日國幣中社大山祇神社宮司ニ轉任)等出テ之ヲ迎フ直ニ人力車ヲ馳セテ廣田神社ニ到ル宮司高階幸造先導シテ勅使殿ニ入り少憩ノ後神殿ニ參向シ神官奏樂供饌等ノ事畢リ侍從齋ス所ノ幣帛料(金貳拾貳圓)及神饌料(金八圓)ヲ捧ケ侍從ハ玉串ヲ捧ケ拜シ了リテ再ヒ勅使殿ニ於テ少憩直ニ西宮驛ニ着午前十一時十分同驛發ノ瀧車ニテ西下シ途中須磨驛ニ下車名勝舊蹟等ヲ巡視セラレ午後零時五十七分再ヒ乗車舞子驛ニ歸着時ニ午後一時十三分

十六日車駕姫路市ニ親臨城北練兵場ニ於テ觀兵式ヲ舉サセラレ式畢テ後偕行社ニ御少憩アラセラル、ヤ侍從武官公爵鷹司熙通ヲシテ舊姫路藩士河合惣兵衛ノ墓竝ニ紀念碑及西南戰死者ノ招魂紀念碑姫路城等ヲ巡視セシメラル鷹司侍從武

官ハ午前十一時ヲ以テ偕行社ヲ出發シ姫路市坂田町淨土宗善導寺境内河合惣兵衛ノ墓ニ向フ兵庫縣參事官鶴見左吉雄屬永木誠太郎警部村島亨之ニ隨行シ姫路市助役齋藤長胤先導ス一行該寺ニ到ルヤ住職杉本慈俊及惣兵衛ノ女河合さき等出テ之ヲ迎フ侍從ハ墓前ニ就テ吊拜シ(十七日祭資料金貳拾圓ヲ下賜セラレ)畢リテ飾磨郡市殿村ノ内神谷村河合惣兵衛紀念碑ニ到ル飾磨郡長春名頼先導ス河合さき等碑前ニ在リテ一行ヲ迎フ侍從ハ碑前ニ就テ之ヲ吊シ轉シテ同郡高岡村ノ内山畑新田藥師山ノ西南戰死者招魂紀念碑ニ到ル姫路第十聯隊付陸軍中尉三宅文之助紀念碑管理者眞宗大谷派本德寺住職大谷勝珍出テ、之ヲ迎フ侍從武官ノ吊禮畢リ後直ニ姫路城ニ向フ三宅中尉先導該城ノ天主閣ニ登リ具サニ視察スル所アリ先是侍從試補心得慈光寺仲敏ハ姫路聯隊區司令官陸軍歩兵少佐大久保猶平等ヲ從ヒテ先着一行ニ合シ共ニ城内ヲ巡視セラレ午後一時三十分偕行社ニ

歸着セラル



目次

- 一贈正四位兒島範長之墓
- 一贈正四位河合屏山小傳
- 一贈從四位中島太郎兵衛小傳
- 一贈正五位黑田與一郎小傳
- 一贈正五位古東領左衛門小傳
- 一贈正五位秋元正一郎小傳
- 一贈正五位境野求馬小傳
- 一贈從五位中條右京小傳
- 一贈從五位太田六右衛門小傳
- 一贈從五位伊藤龍太郎小傳

一贈從五位片山九市小傳

一從五位永田伴正小傳

一官幣大社伊弉諾神社

一日岡御陵

一官幣大社廣田神社

一贈從四位河合惣兵衛之墓並紀念碑

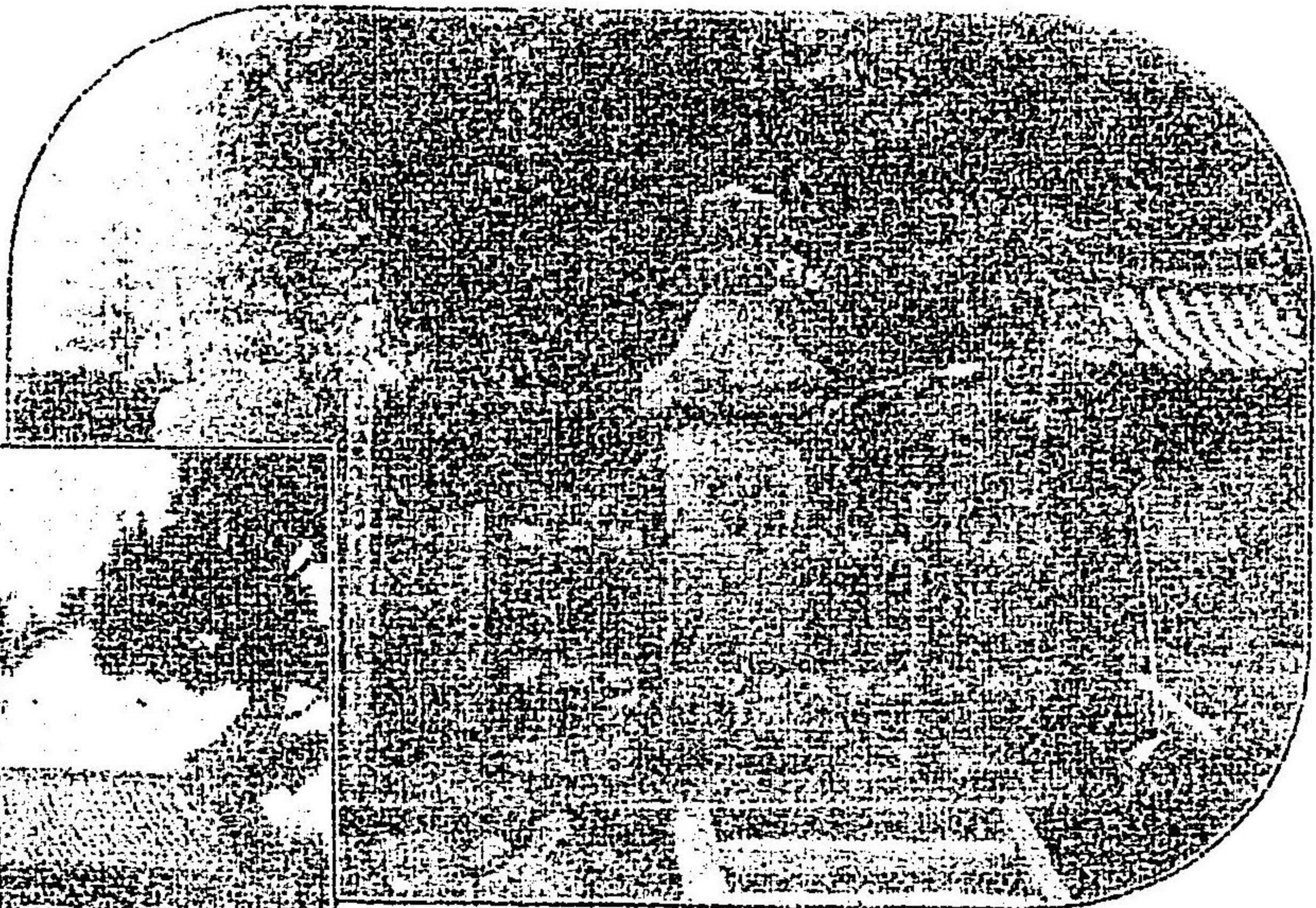
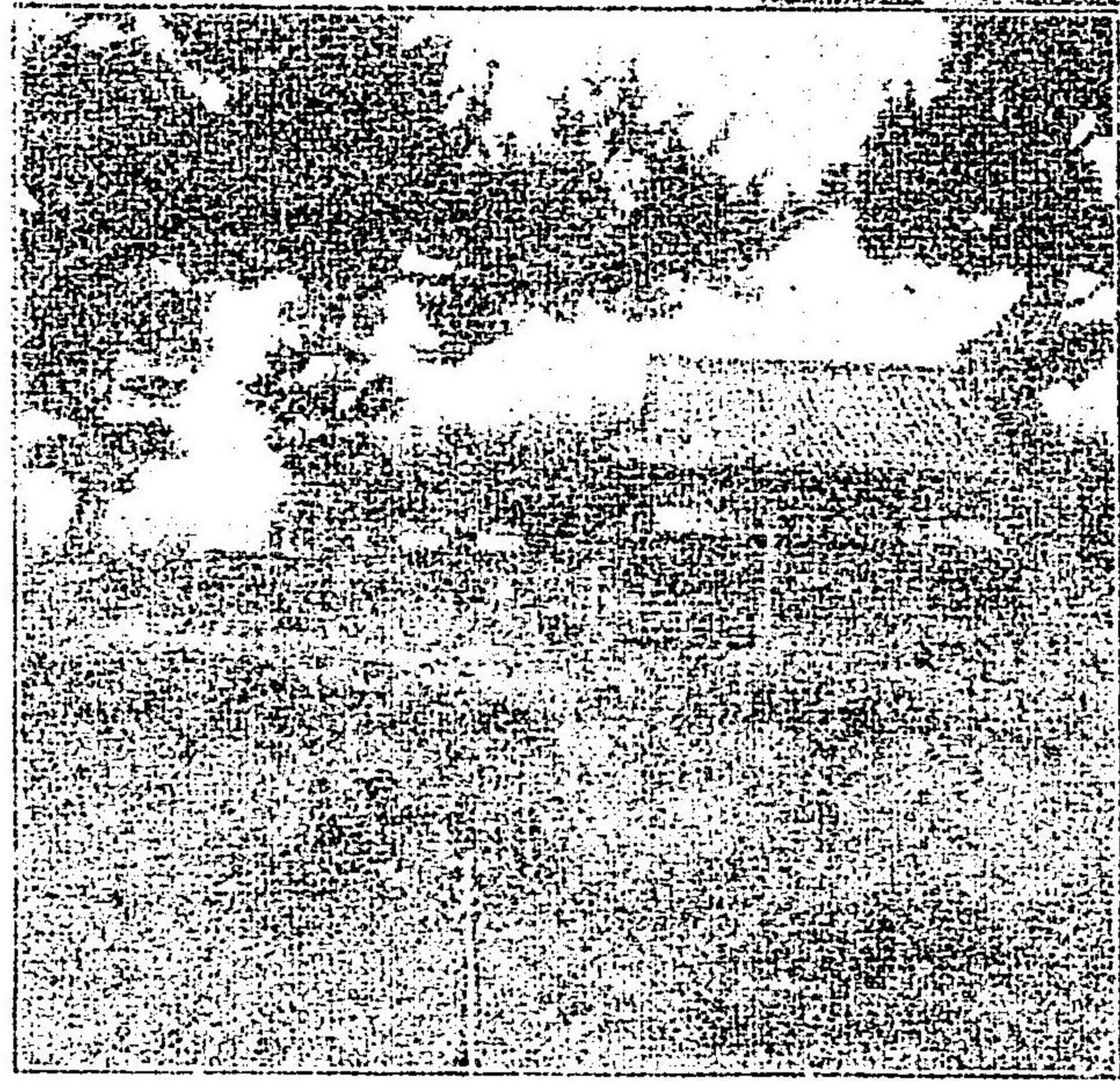
一藥師山招魂紀念碑

一姫路城

附 錄

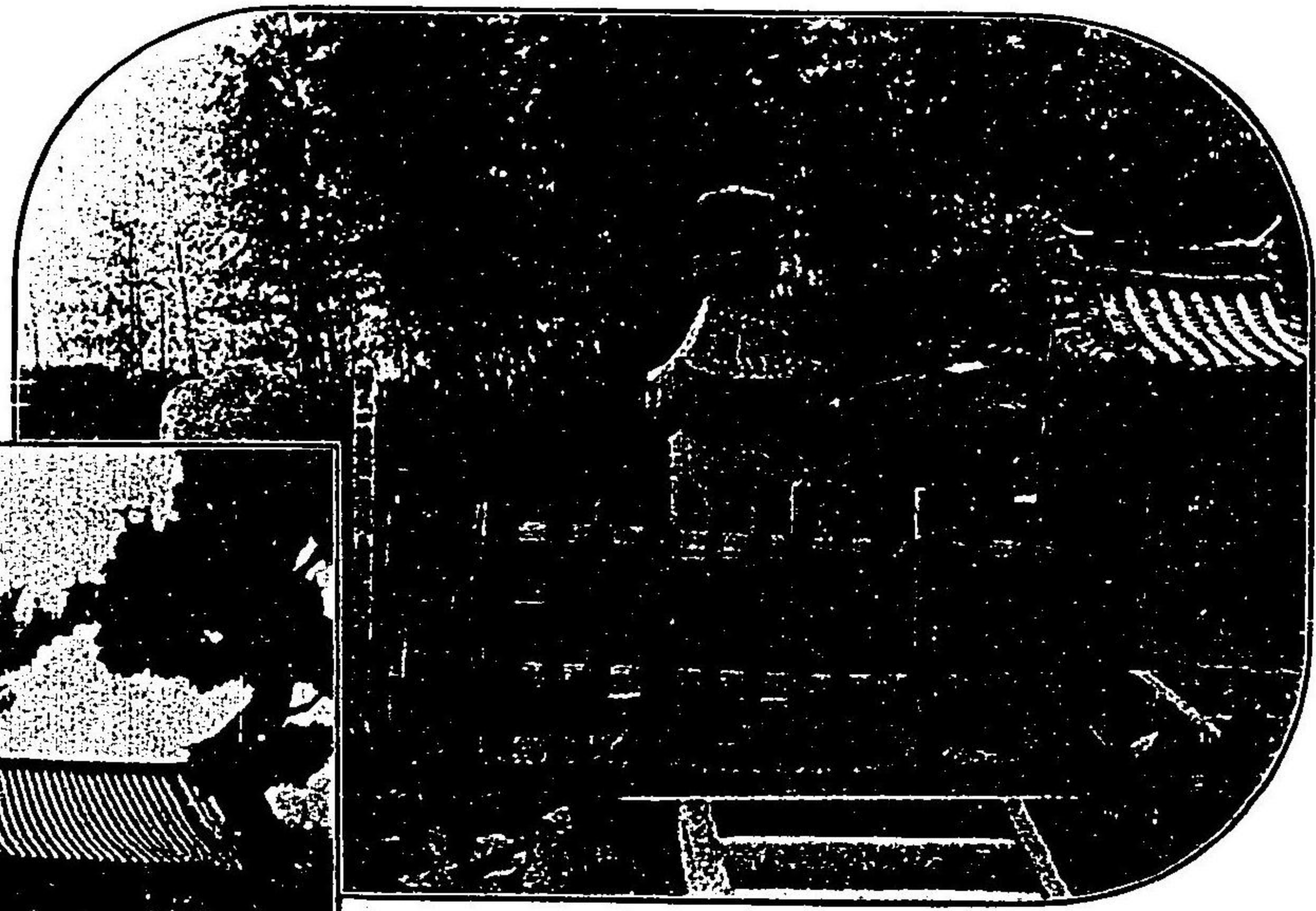
一淡河川疏水沿革誌

贈正四位兒嶋範長之墓



兒島長之樂





慕之長範島兒



是子之微名細言微物律
 之台於五山查子慧古氣
 素潔痛一以成信信若
 言以惠勇拔刃割股出
 慈腸老物皆按在出
 鐘岳山東望岳子河處
 辭精呼向一而治身有
 思即入誓死忠義流芳
 其志不沒治成點何可
 於彼傑助崇方初發如
 河 誰能忘其華 禮

此老琴碑高懸山陽道

泉石之清之松石法極
 可矣此古器以象白味
 惟夕夕園之宜上同書其
 位散留象以水之
 山陽外史記

龜田五一郎所藏

天子之治乎細而後得中
 之也初丘山查手製七氣
 素德備一或備信者
 之也初丘山查手製七氣
 此勝老所自操於此
 經山東望若子河唐
 驛指呼河頭給自為
 見其() 於危難能治
 其出五流泥成敗何可
 於位能助其分利修如
 河能治大華 控
 此老楚碑高山
 陽道
 各取丁者之秋區括括
 百安出古路以發自味
 檢多因之宜河者取
 位報留食以之
 山陽分其影

龜田五一郎所藏

贈正四位兒嶋範長之墓

贈正四位兒嶋範長ノ墓ハ兵庫縣印南郡阿彌陀村岩尾山大日寺釋迦堂ノ傍ニ在リ
山陽鐵道停車場曾根驛ヲ去ル東方僅カニ一町餘ニシテ近ク國道ニ接ス曾根驛始
メ阿彌陀驛ト稱ス播州ノ名所曾根ノ松ニ近キヲ以テ探勝ノ客ニ便センカ爲メ明
治三十五年三月十日今ノ名ニ改ム後醍醐天皇ノ御宇延元元年兒嶋範長其子高德
ト共ニ義兵ヲ備前國熊山ニ舉ケ赤松則村ト戰フ而シテ軍利アラス阿彌陀村ニ抵
リ僅ニ六騎ヲ餘ス遂ニ辻堂ノ内ニ入り刃ニ伏シテ死ス曆應五年三月墓ヲ其戰死
ノ地ニ建立ス今ノ五輪塔即チ是ナリ實ニ五百六十二年前ニ屬ス墓ノ高サ九尺八
寸古色蒼然碑面磨滅シテ殆ント通讀スヘカラス僅ニ「曆應五年三月九日敬白」
「講衆等」等ノ文字ヲ認ムルニ過キス

明治十六年八月六日特ニ勅シテ兒嶋範長ニ從四位ヲ贈ラシ其贈位宣下ノ旨ヲ本

縣へ通達セラルルヤ當時範長ノ墳墓ハ其所在不明ニシテ爾來之レカ搜查ニ勉ムルコト殆ント二年半ニ亘リ遂ニ該五輪塔ヲ以テ範長ノ墳墓タルコトヲ認メ十九年一月廿八日縣令内海忠勝ヨリ内務大臣へ稟申ノ末同年二月十日ヲ以テ公認ヲ經ルニ至レリ先是十八年八月九日 陛下中國御巡幸ノ御歸途特ニ侍從ヲ遣シテ其遺跡ヲ憑吊セシメラレタリ

兒島範長墳墓地之義ニ付稟申

故兒島範長贈位宣下之義ニ付去ル十六年九月十四日付庶甲第一四九七號ヲ以及上申爾來專ラ墳墓所在地探究候處縣下印南郡阿彌陀村黒田耕一郎外八名并節東郡白濱村澤田藤七治ヨリ別紙書類寫之通願出候ニ付照查候處右藤七治ヨリ差出候舊記之如キ紙卷ハ稍舊時之觀ヲ存シ候得共書體墨

氣等ニ於テハ決而康永年間之物トハ難認且他ニ徵憑スヘキ事跡モ無之畢竟誤謬相傳へ一家ノ遺書タルニ過キサルモノト存候依テ猶照考候處太平記所載阿彌陀ケ宿之邊云々又辻堂ニ入ル云々トアルハ黒田耕一郎等上申スル即墳墓所在地阿彌陀村大日寺ニ相違無之ト被存候該寺ハ天平年間之創立ニシテ構造矮少實ニ辻堂ニ均シキ一小刹ニ有之候趣太平記中辻堂ト記載アルモ深ク疑フヘキニ非ス且播磨智惠袋ニ伊保之庄ニテ追付云々ト有之阿彌陀村ハ即チ伊保ノ庄之西端ニ當ルヲ以テ其地タルモ又疑フヘカラス且右墳墓ハ五輪塔ニシテ碑面曆應五年三月ト有之其南朝ノ年號ヲ刻セサルモノハ當時足利家威勢最盛ナルノ時ニシテ其寵臣赤松圓心播磨國ヲ所領スルヲ以テ建碑者其忌諱ニ觸ルヲ恐レ枉テ北朝ノ年號ヲ用ヒ猶殊更ニ其姓名ヲ陰匿シタル趣于今古老之口碑ニ傳フル處ニ有之尤右ニ關ス

ル舊記等ハ該寺ニ保管有之候處爾來兵燹ニ罹リ今日證徴スヘキ書類ハ無
之候得共右ノ如ク史乘ト口碑之傳フル處ニ徴スルトキハ右五輪塔ハ即備
後守墳墓タルハ不可疑ニ付此際公認可致ト存候得共爲念別紙書類寫相添
一應及稟申候也

追テ本文認定候上ハ位記宣下之義ハ縣官出張墳墓ニ向ヒ告祭可致見込ニ
候得共其宣旨ハ該寺住職へ保管可爲致哉又ハ有志者ニ於テ既ニ公認ノ日
ヲ待社宇建設ノ計畫モ有之趣ニ付追テ落成之上神官へ保管爲致可然候哉
併テ仰御指揮候也

明治十九年一月二十八日

兵庫縣令 内海忠勝

内務大臣宛

備後守兒島範長墳墓之義ニ付副申

本郡阿彌陀村黒田耕一郎外八名ヨリ故兒島備後守墳墓之義ニ付向ニ上申書差出候處庶務課ヨリ
照會之次第モ有之猶又別紙古書類抜萃差出候ニ付篤ト照考候處太平記ニ阿彌陀カ宿ノ邊迄云々
トアリ又辻堂ノ中エ走入云々トアリ右ハ即墳墓ノ在ル所阿彌陀村大日寺ニ相違ナカルヘシ該寺
ハ天平年間創立ノ寺ナレトモ屢兵火ニ罹リ構造ノ矮少ナル辻堂ト均シキ者ナレバ其辻堂ト記シ
アルモ又可疑ニ非ス又播磨智恵袋ニ伊保ノ庄ニテ追付ケル云々トアリ今墳墓所在ハ舊西阿彌陀
村ニテ伊保庄ノ西極端ニ在レハ當時備後守ハ赤松ノ兵宇野重氏等ノ爲メ追撃セラレ處全ク此村
ニアル亦可疑ノ筋無之且此墳墓ハ五輪塔ニシテ碑面ニ曆應五年三月云々トアリ曆應五年ハ南朝
興國三年ニ當リ即備後守戦死後七年ナリ然ルニ曆應ハ北朝ノ年號ナレバ備後守ノ爲メ一應疑フ
容ルモノアレトモ當時足利家ノ最モ盛ナル時ニシテ當播磨國ハ其寵臣赤松圓心ノ領地ナレハ
備後守遺臣ト雖トモ其忌諱ニ觸レン事ヲ怖レ枉テ北朝ノ年號ヲ用ヒシ趣ハ于今古老口碑ニ傳フ
ル所ニ有之尤モ右ニ關スル古記類該寺ニ有之候處爾來兵火ニ罹リ悉皆烏有ニ歸シタル由今其書
類逆ハ無之候得共其口碑ニ傳フル所ト其墳墓ノ形況ニ據ル時ハ備後守ノ墳墓タル可疑無之相
考候但可疑ハ太平記等所載ト齟齬ノ廉即那波城主宇野重氏備後守ノ遺骨ヲ故郷へ送ル云々トア
リ果シテ此事實アラシメハ其郷里タル備前兒島邊ニ其墳墓存在スヘキ管ナルニ戦死後五百年間

忠臣烈士ノ舊蹟遺墳等累々彰明セサルナシテ著名ナル備後守舊里ニシテ未ダ聞ク所アラサ
レハ太平記所載コソ尤疑フ可シ且宇野重氏ハ備後守同郷親屬ニシテ赤松家ノ配下ニ屬シ備後守
ヲ追撃シ備後守戰死後ニ至リ其同親屬タルヲ了知シ陰ニ之ヲ保護シタル事顯然ダレハ之ヲ郷里
ニ送ルトアルモ其實該地ニ葬リ殊更ニ備後守ノ姓名ヲ隱匿シ年號年月日等ノミヲ誌シタル者ナ
ルヤモ知ル可ラス要スルニ此一点ノミ太平記等ト符合セスト雖モ今其實蹟ニヨリ之ヲ徵スルト
キハ前條ノ通り相違有之間敷相考候條村民願之通墳墓公認相成候様仕度此段副申候也

明治十八年十一月十三日

印南郡長 下田重復

兵庫縣令 内海忠勝殿

書面伺之通

但宣旨ハ該寺住職へ保管爲致告祭ハ執行ニ不
及義ト心得ヘシ

明治十九年二月十日

内務大臣 伯備山縣有朋

印南郡 阿彌陀村

大 日 寺

其寺境内ニ存在スル五輪塔ヲ以テ兒島範長ノ

墳墓ト定ム

右相達候事

明治十九年二月十八日

兵庫縣令 内海忠勝

該墳墓ハ元ト大日寺境内竹藪蒙茸ノ中ニ埋没シアリシカ公認以來里人之ヲ修理
シテ木柵ヲ周ラシ以テ今ニ至ル太平記其他古文書ニ載スル所ヲ舉レハ左ノ如シ

太平記

和田備後守範長、子息三郎高德は、佐々木の一黨が、舟よりわがる由を聞て、是を防がん爲に西川尻に陣を取て居たりけるが、福山巳に落されぬと聞へければ、三石の勢と成合んが爲に、十九日の夜に入て三石へぞ馳着ける、爰にて人に尋れば、脇屋殿は早宵に、播磨へ引せ給て候なりと申ける間、扱は舟坂をば通り得じ連、先日搦手の廻りたりし、三石の南の山路をたざるく終夜越て佐越の浦へぞ出たりける、夜未だ深かりければ、此儘少しの逗留もなく、打て通らば、新田殿には、安く追付奉るべかりけるを、子息高德が、先の軍に負たりける疵、未癒さりけるが、馬に振れけるに由て、目昏肝消て、馬にもたまらざりける間、佐越の邊に相知たる僧の有けるを、尋ね出して預け置たる程に、時刻押遷りければ、五月の短夜明にけり、去程に此道より、落人の通りけると聞て、赤松入道、三百餘騎を差遣して、那波邊にて予待せける備後守僅に八十三騎にて、大道へと志て打ける所に、赤松が勢、とある山陰に寄合せて、落人ご見るは誰人を命惜くば弓を弛し、物具脱で、降人に參れとぞ懸りたりける、備後守是を聞てからからと、打笑ひ、聞も習はぬ言哉、降人に成へくば、筑紫より、將軍の様々の御教書を成て、すかされし時こそならんすれ、其をだに引裂て、火にくべたりし範長が御邊達に向て、降人にならんと、ゆこそ申まじけれ、武器はしくばいで取せんと、言儘に八十三騎の者共、三百

餘騎の中へ喚て懸入、敵十二騎切て落し、廿三騎に手を負せ、大勢の圍を破て、濱路を東へぞ落行ける赤松が勢、案内者なりければ、懸散されながら、前々へ馳過て、落人の通るぞ打留め物具はげと、近隣傍庄にぞ觸たりける、是に由て其邊二三里が間の野伏共、二三千人出合て、此の山の陰彼の山の曠に立渡りて散々に射ける間備後守が若黨共、主を落さんが爲めに進では懸破り引下ては討死し、那波より阿彌陀が宿の邊迄、十八度迄戦て落ける間、打殘されたる者今は僅に主従六騎に成にけり備後守、或辻堂の前にて、馬を扣て、若黨共に向て申けるは天晴一族共だに、打連たりせば、播磨の國中をば安く蹴散して通るべかりつる物を方々の打分に向られて、一族一所に居ざりつれば、力なく範長討るべき時刻の、到來しけるなり、今は遁るべき共覺ねば、最後の念佛心閑に唱て、腹を切んと思ぞ、其程敵の近付ぬ様に防げ連、馬より飛下下、辻堂の内へ走入本尊に向ひ手を合せ、念佛高聲に二三百遍が程唱て、腹一文字に掻切て其刀を口に嚙て、覆に成てぞ臥たりける、其後若黨四人續て自害をしけるに、備後守が従弟に和田四郎範家と云ける者、暫く思案しけるは、敵をば一八も滅したること、後迄の忠なれ、追手の敵若赤松が一族子共にてや有らん、さも有は引組て差違んする物ぞと思て、刀を抜て逆手に握り、冑を枕にして、自害したる跡に見せてぞ臥たりける、此へ追て懸りける、赤松が勢の大將には、宇野彌左衛門次郎重氏とて和田が親類なりけり、正しきに辻堂の庭へ馳來て自害し

たる敵の首を取んとて、是を見るに、袖に付たる笠符皆下黒の文なり、重氏拔たる太刀を抛て
荒淺猿や誰やらんと思ひたれば、小島、和田、今木の人々にて有けるぞや、此人達と疾知なば、
命に替ても、助べかりつる物をと悲て、涙を流して立たりける、和田四郎此聲を聞て、範家は
に有りどて、がばと起たれば、重氏肝を潰しながら立寄て、こは如何とぞ悦ける、頓て和田四
郎をば同道して助置、備後守をば葬禮念比に取沙汰して遺骨を故郷へぞ送りける、

播陽萬寶智惠袋

寶曆八戌寅歲五月
喬木堂友親著

阿彌陀宿大日寺に古き五りん有年號左の通

右曆應五季

三月九日

月日は少見へ兼ぬ三月九日か

左曆請衆等

左の方の文字何共見へかたし

考るに是備後守の石塔か建武三年より七年に當る追て考へし
石の阿彌陀あり
天正二年七月二日とあり

播磨鑑

寶曆十二年播州
平津平野府修編

岩尾山大日寺

淨土宗

在西阿彌陀宿村

板倉侯御證文

寺領二石

此寺往昔真言宗ニテ牛堂山ノ東院ニシテ本尊大日如來也兵亂ノ世諸寺院炎上シ大破ニ及フノ時
當寺モ破壊シ其後時光寺ノ末寺ト成

一此寺ニ古キ五輪アリ年號如左

右曆應五季

三月九日

月日は少見へ兼併三月九日歟

左曆請衆等

左ノ方ノ文字何レモ見ヘカキシ

考之是備後守ノ石塔成歟建武三年ヨリ七年ニ當ル也

播州名所巡覽圖繪

文化元年版

岩尾山大日寺

西わみだの
宿にあり

本尊大日如來真言宗むかし國分寺の東院也兵火に亡ひて

後再建有時光寺の末と成る此寺荒廢の時の事にや別所長治の幕下陰山左近寓居せしとぞ是を大
日山の搦といふ

五輪塔

年號曆應五年三月也外に四字有刻字明かならず衆等の二字計見へた

り若是兒島備後守範長の墓なるか建武三年此地に自害の事太平記にみへたり

赤松則村馳使告尊氏曰白旗城陷則公雖有衆莫所用之尊氏乃大舉東上水陸並進福山城陷義助引兵退菊池武重殿之賊舟師上陸陣西川尻高德聞之欲合於義助踰山而東創亂範長託之僧寺以八十餘人東走會義貞已釋白旗圍赤松氏兵三百騎見範長過呼曰敗卒盍釋甲降範長笑曰嚮尊氏方招我我輒毀其書投火今曷降汝輩哉潰其陣出賊傳呼敗卒過士兵群起範長悉亡其兵所餘者六人曰悔我不舉族來乃伏及死

文政丁亥十年秋頼山陽此地ヲ過ク詩アリ

阿彌陀驛址備後守兒島範長死義之處也

天子之詔手翻覆、將軍之教丘山重、手裂教書禦虎威、備後老守眞忠勇、拔刀剖腹出熱腸、老脚肯接狐鼠踵、熊山東望鹿子河、廢驛猶呼阿彌陀、自有兒郎期范蠡、沼吳有志又蹉跎、成敗何可論俊傑、助盜分利終如何、誰把大筆旌此老、豐碑高照山陽道

此詩山陽ノ自筆ニ係ルモノ今現ニ印南郡曾根村龜田五一郎之ヲ藏ス五一郎ノ父曾テ同郡今市村鈴木長左衛門ノ分家鈴木長三郎ヨリ之ヲ獲タリト云フ長左衛門ヨリ前四代ノ祖深ク文事ヲ嗜ミ文人墨客多ク來リ寓ス當時山陽屢此地ニ來往シタルヲ以テ或ハ同人ノ爲メ揮毫シタルモノナランカ暫ク記シテ疑ヲ存ス



贈正四位河合屏山小傳

運糧
海の舟にりて舟にありて
我々の舟にりて舟にありて
舟にありて舟にありて

舟にありて舟にありて
舟にありて舟にありて
舟にありて舟にありて
舟にありて舟にありて

舟にありて舟にありて
舟にありて舟にありて
舟にありて舟にありて
舟にありて舟にありて

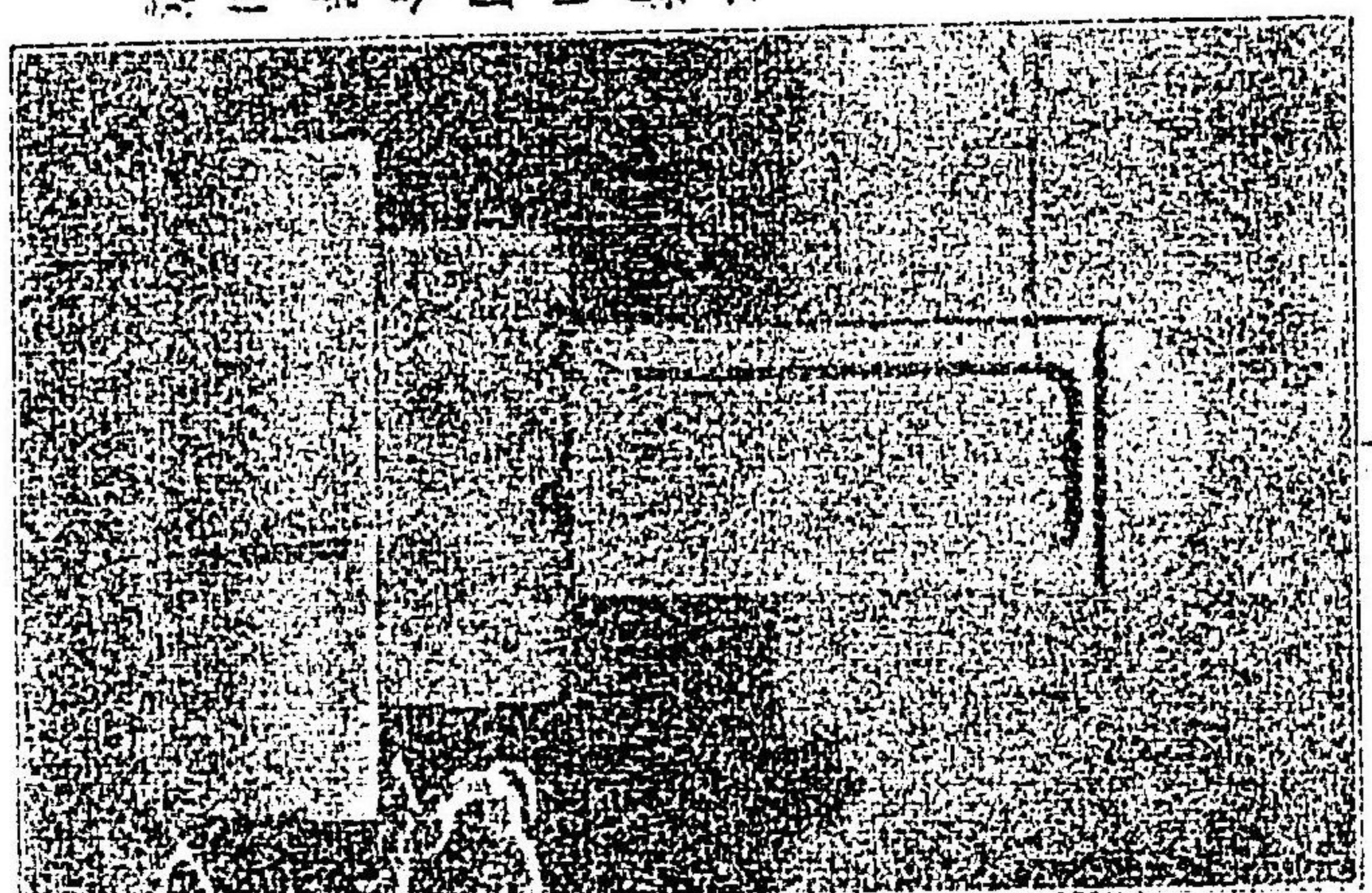
河合升吉所藏

建徳
其の申さるる人相
我なるらん
以上河合升吉所藏

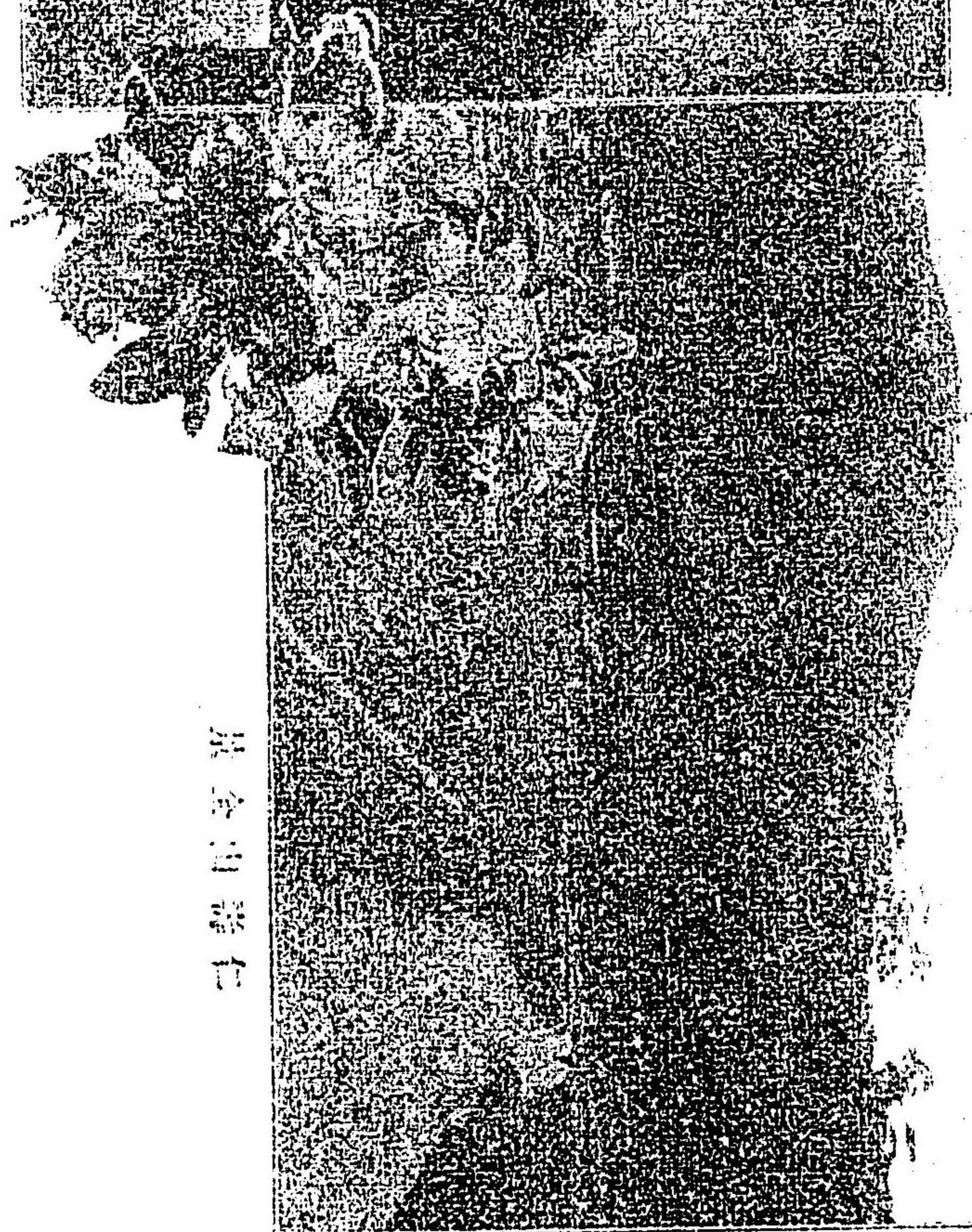
建徳
其の申さるる人相
我なるらん
以上河合升吉所藏

建徳
其の申さるる人相
我なるらん
以上河合升吉所藏

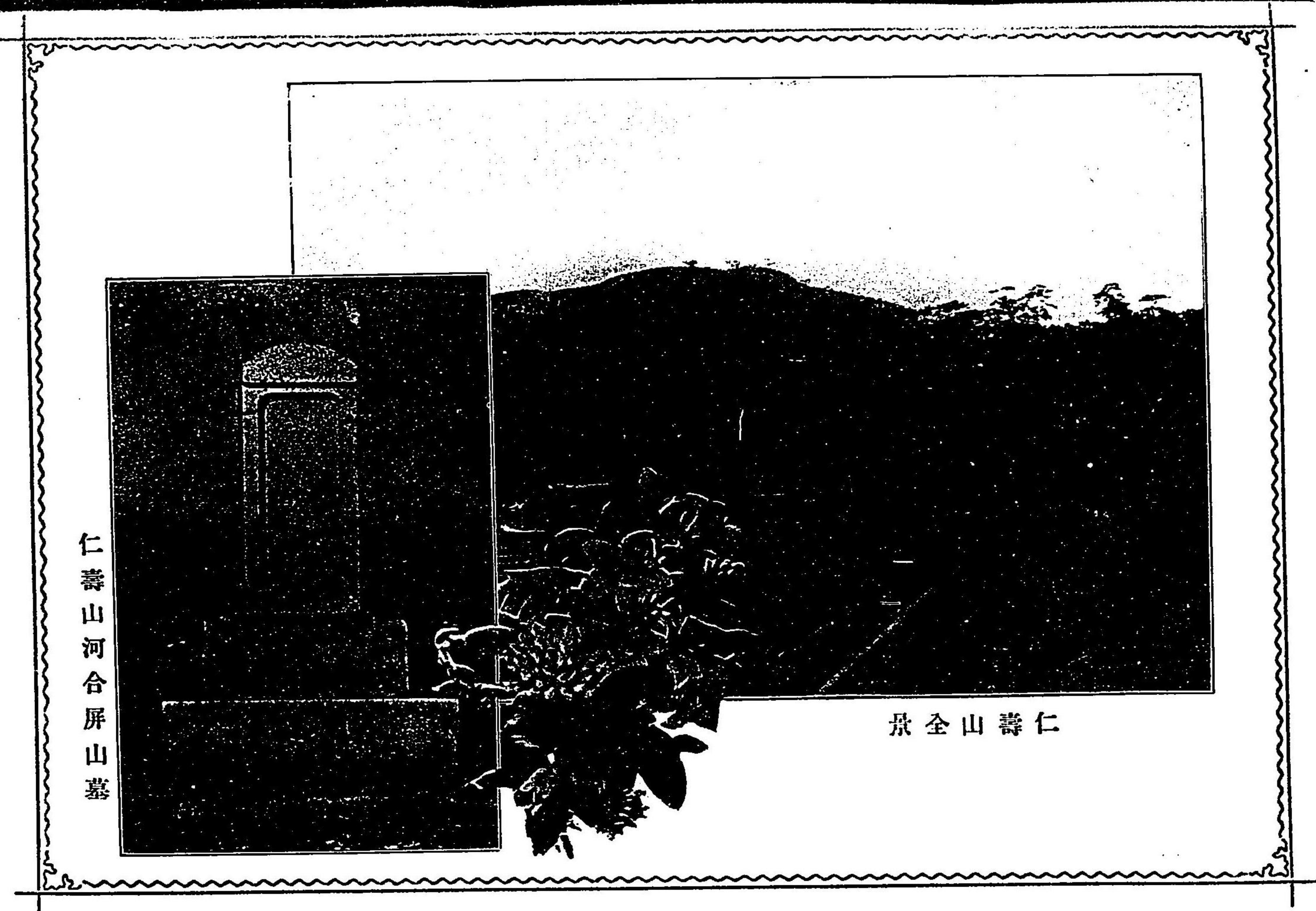
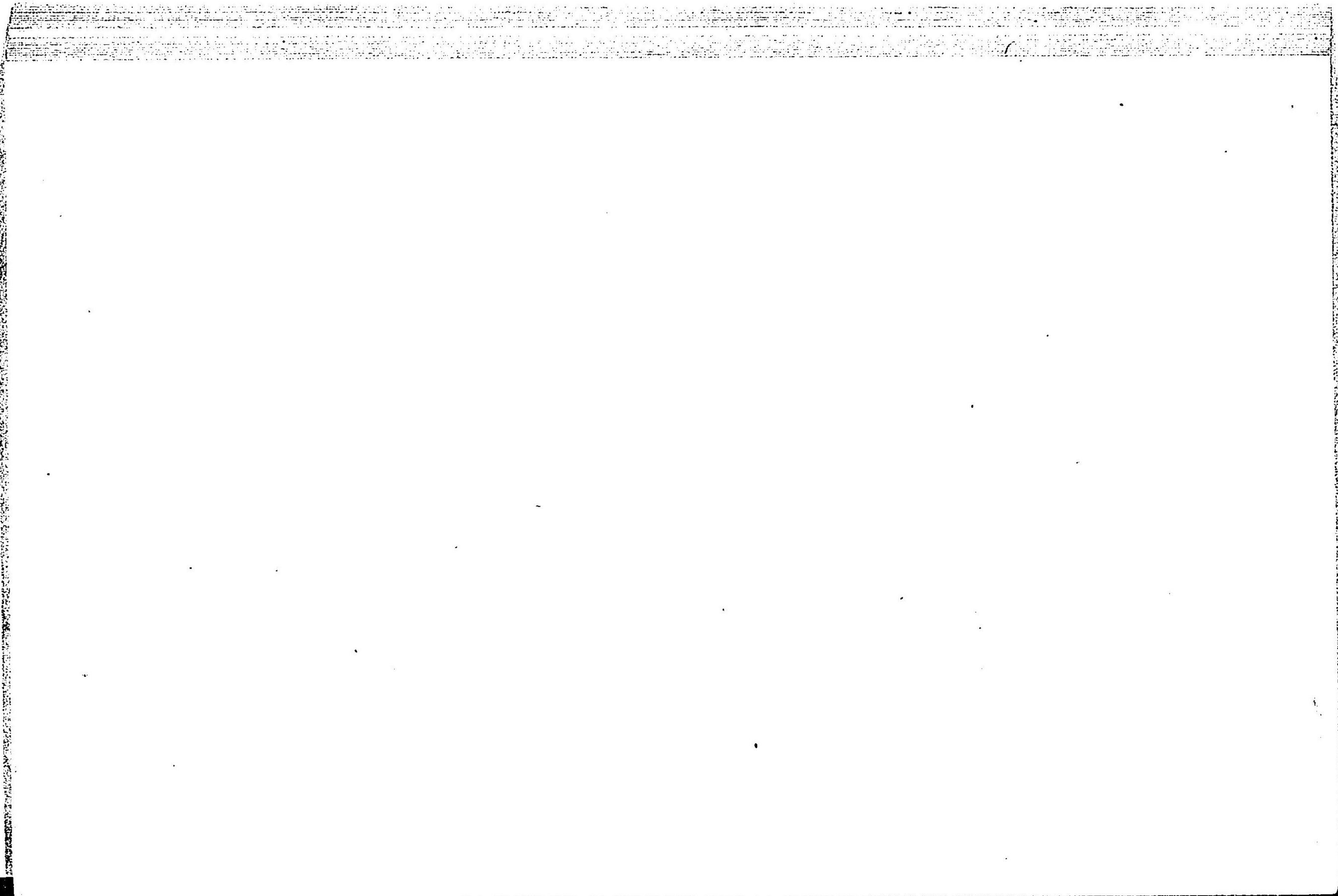
神戸田所千秋所藏



仁濟山河合屏山墓



基全川壽仁



仁壽山河合屏山墓

仁壽山全景

贈正四位河合屏山小傳

河合屏山ハ姫路藩士松下源太左衛門ノ次男ニシテ享和三年七月十八日ヲ以テ生
ル名ハ良翰初メ鎧七後小太郎ト稱シ隼之助又屏山ト改ム文化二年正月十五日姫
路藩士河合隼之助ノ養子トナル隼之助名ハ漢年後寸翁ト稱ス藩ノ家老職タリ屏
山ノオチ奇トシ妻スニ長女某ヲ以テス文政元年十一月十二日贄ヲ坪内清眼ノ門
ニ執リ就テ弓術ヲ學フ文政十一年六月三日藩ノ年寄役ニ舉ケラレ部屋住知行五
百石ヲ受ク天保二年四月二十四日命ヲ奉シテ藩校仁壽山黌ニ寄宿シ以テ學問ニ
勉ム仁壽山黌ハ藩主ノ創立スル所ニシテ其ノ之ヲ興ス養父隼之助實ニ之カ主動
者タリ是ヨリ先キ隼之助視ル所アリ夙ニ藩内ノ學問ヲ獎勵ス是ニ於テ天下學識
ノ士來リ聚ルモノ甚タ多ク屏山ノ藩學ニ入ルヤ頼山陽等モ聘セラレテ此ニアリ
屏山屢之ニ接シ大ニ勤王ノ志ヲ養フ

天保六年三月八日隼之助退隱シテ寸翁ト稱ス屏山家ヲ繼キテ家老職ヲ承ケ祿五千石ヲ食ミ通稱ヲ改メテ隼之助ト曰フ後其食祿ヲ以テ分ニ過クルト爲シ二千石ヲ割テ還納セシコトヲ請フ藩議其志ヲ嘉シ之ヲ許ス因テ三千石ヲ食ム同十二年養父寸翁歿ス其後藩命ニ依リテ江戸ニ在リ藩主幕府ノ内旨ヲ奉シ之ニ命スルニ謹慎ヲ以テス屏山乃チ藩ニ歸リ屏居スルコト凡ソ六年嘉永六年米艦ノ浦賀ニ來ルヤ屏山之ヲ聞キ歎シテ曰ク天下是ヨリ應ニ多事ナルヘシト因テ國風一首ヲ賦ス

相模の海長閑に過くる春風に

國の光や霞みゆくらん

是ニ於テ家ヲ嫡子良臣ニ譲リ退キテ仁壽山梅ヶ岡ノ別墅ニ隱ル屏山ノ稱此時ニ始ル是ヨリ意ヲ山水ノ間ニ恣ニシ大ニ文墨ノ士ヲ招キ竊ニ天下ノ形勢ヲ窺フ松

本奎堂藤本鐵石等モ亦時々此ニ往來ス萬延元年天下漸ク騷然勤王ノ士京阪ノ間ニ聚ルモノ頗ル多シ屏山國風ヲ賦シ以テ其志ヲ謂フ

世の憂さを聞くにはまざるものぞかし

さわけ 軒端の萩の上風

有志ノ徒推シテ以テ斡旋スル所アラントスルモノアルモ未ダ敢テ之レニ應セス其狀藩政ヲ以テ意ニ介セサルモノ、如シ蓋シ猶時ノ到ルヲ俟ツ文久二年形勢益迫ル是ニ於テ蹶然トシテ起チ將ニ大ニ爲ス所アラントス執政某等皆之ヲ忌ミ近親松平孫三郎ヲシテ往テ説ク所アラシム屏山聽畢リ大喝シテ曰ク鼠輩焉ソ天下ノ大勢ヲ知ランヤト時ニ天大ニ雪ヲ降シ滿山皚々トシテ復タ點塵ヲ留メス起テ牖戸ヲ推シ呼テ曰ク汝彼ノ雪ヲ見スヤト孫三郎言フ所ヲ知ラス啞然トシ辭シ去ル既ニシテ有志數輩ヲ率井事ニ託シテ京都ニ之キ河合惣兵衛等ヲ指揮シテ王

事ニ勤メ隱然首領ヲ以テ自ラ任ス小河彌右衛門等モ亦屢往來シ共ニ奔走スル所アリ時ニ藩主酒井忠績將ニ藩ニ歸ラントシ幕府ノ命ヲ奉シテ京都ニアリ屏山屢之ニ見ヘ説クニ尊攘ノ大義ヲ以テス諸士モ亦屏山ヲ推シ再ヒ執政タラシメントテ請フ忠績未タ之ヲ聽カス是歲秋屏山藩ニ歸ル有志ノ士又上書シテ執政タラシメントテ請フ忠績始メテ其請ヲ容レ再ヒ起シテ事ヲ執ラシム翌年六月忠績幕府ノ老中トナリ十二月將軍ニ隨ヒ京師ニ上ラントス屏山將ニ建議スル所アラントシ同志ノ士ヲ率ヰテ江戸ニ赴ク行々大阪ニ至リ偶病ニ罹リ遂ニ果サヌ元治元年忠績再ヒ京師ニ上リ屏山モ亦京師ニアリ屢忠績ニ見エテ大義ヲ説ク忠績屏山ヲシテ江戸ニ下リ世子忠敬ニ告クルニ其事ヲ以テセシム到レハ則忠敬既ニ卒シ屏山終ニ幽閉セラル因テ一首ヲ詠ス

櫻花思はぬ方にさそはれつ

これも憂き世の春の山風

河合惣兵衛以下八人及永田伴正以下六人モ亦共ニ王事ニ奔走ス是ヲ以テ藩廳ノ忌ム所トナリ惣兵衛等八人ハ死刑ニ處セラレ伴正等六人ハ獄ニ下サル既ニシテ忠績退隱シ忠悖家ヲ繼キ亦事ニ座シテ罪ヲ朝廷ニ得命シテ其家ニ蟄居セシメ養子直之助ヲシテ家ヲ繼カシム時ニ明治元年五月ナリ伴正始メテ獄ヲ出ルコトヲ得急行江戸ニ到リ諸士ト相謀リテ屏山ヲ幽居ニ濟フ七月朝廷直之助ニ令シテ屏山等ヲシテ上京セシム

酒井直之助

先般寛大ノ御處置被仰付候砌家督相續ノ上ハ向後不心得無之様國論一定精々可勵忠勤旨御沙汰之條奉畏候ハ勿論之儀ニ付追々黜陟等嚴重ニ取計可申候得共猶又今般厚キ思食モ被爲在候ニ付高須隼人本多意氣揚河合屏山三人

之者至急令上京候様仰付候事

七月

是日朝廷又屏山ニ命シ準人意氣揚等ト商議シ藩主ヲ補翼シテ大義ノ在ル所ニ從ヒ以テ藩屏ノ任ヲ盡サシムヘキコトヲ申諭ス屏山謹テ諭示ヲ奉シ三タヒ出テ、藩政ヲ執リ自ラ改革ノ任ニ當リ施設スル所頗ル多シ
時ニ幕府已ニ倒レ東北ノ亂亦平定ニ歸シ王政復古百事維新ノ始メニ屬セリ然レトモ列藩猶封土ヲ有シ未タ全ク兵馬ノ權ヲ解カス屏山以爲ラク今ヤ纔ニ復古ノ名アリ而シテ列藩ノ形勢彼カ如ク實權未タ朝廷ニ歸セス之ヲシテ眞ニ王政ノ實ヲ得セシメンニハ須ク封建ノ制度ヲ撤シ更ニ郡縣ノ制ヲ定ルニアルヘシト藩士武井守正近藤薰等ヲシテ常ニ京師ニ在リ竊ニ列藩ノ動靜ヲ察シ細大之ヲ報道セシメ十一月ニ至リ遂ニ封土奉還ノ議ヲ藩主ニ建ツ時論紛紜藩議容易ニ決セス然

レトモ藩主終ニ屏山ノ議ニ從ヒ朝廷ニ上書シテ廢藩置縣ノ制ヲ立ンコトヲ請フ是レ實ニ版籍奉還建議者ノ卒先ナリ十二月ニ至リ再ヒ書テ朝廷ニ上リ建議ノ趣旨ニ就テ細述スル所アリ翌年正月薩長土肥ノ四藩モ亦連署上表シテ版籍ヲ奉還センコトヲ請ヒ他藩亦之ニ倣フモノアリ屏山又藩ニ勸メ是月二十八日ヲ以テ書ヲ三タヒ朝廷ニ上リ曩日ノ建議ヲ採用セラレンコトヲ請ハシム既ニシテ指令アリ建言ノ趣意諸藩ノ建白ト其意味相違アルテ以テス依テ二月十五日ヲ以テ四タヒ書テ朝廷ニ上リ獻言ノ趣旨ハ版籍ノ奉還ニアリ其ノ諸藩ノ建議ニ符合スルヲ述ヘ更ニ版籍ヲ奉還センコトヲ請フ六月十七日終ニ其請ヲ許サル屏山積年ノ本意是ニ至リ始メテ之ヲ達スルコトヲ得タリ
明治二年十月姫路藩大參事ニ任セラレ官ニ在ルコト滿一年其職ニ在ルヤ朝廷ニ建議スル所アリ曰ク此際貨幣ノ制度ヲ釐革シ從來通用スル所ノ新古金銀ヲ廢シ

之ニ代ルニ紙幣ヲ以テシ上下一般蓄フル所ノ金銀ヲ收メ以テ外債ヲ償ヒ彼我生
産裕餘ノ器物ヲ以テ相流通セハ則貿易ノ實舉リ交際ノ道全ク 皇國ノ威信因テ
以テ立ツコトヲ得ヘシト三年九月三日大參事ヲ免シ十五日ヲ以テ依願退隱ヲ許
サル其退隱スルニ及ンテモ猶未タ公共ノ事ヲ忘レヌ偶藩内ノ社家相集リテ古學
館ヲ設ケ皇道ノ恢張ヲ圖ラントスルモノアリ屏山嘗テ賜ハル所ノ仁壽山費付屬
ノ田地屋舍等ヲ舉ケテ之ヲ返上シ以テ該館ノ維持費ニ充ンコトヲ請フ曰ク是亦
王土タリ得テ私スヘキモノニアラスト時ニ三年十一月ナリ同年十二月ニ至リ藩
廳其ノ賞トシテ金及物ヲ賜フ

河合大參事

古學館爲引立拜領ノ持地仁壽山付屬ノ田地并ニ屋舍トモ差上候爲其賞目錄
ノ通下賜候事

庚午十二月十四日

姫路藩廳

目錄

一爲家卿御歌入文

一熊川茶碗

一金五百兩

明治四年八月十七日縣廳重ネテ之ヲ賞ス

大參事 河合良翰

基朝意從前下賜候仁壽山致奉還候段殊勝ニ付爲其賞目錄ノ通下賜候事

辛未八月十七日

縣廳

目錄

一金七百兩

明治九年八月十四日病ニテ歿ス享年七十四仁壽山梅ヶ岡ノ先塋ニ葬ル

○庭花

咲花を思ふ心にうれしきは

日をへて聞かぬ松風のこゑ

○上巳思ふ事ありて

されほとて光りは残る世なりけり

夢だに見せよ行末の空

○春述懐

命ぞとたのみし花はちりはてし

同じ浮世を思ひしれどや

○落花

吹くまゝにちるを盛の花見れば

風のつらさも忘れにけり

○秋月

年毎に馴にし秋の月ながら

見れば思ひの數まさりつゝ

○月前述懐

はれやらぬ心づくしに眺めても

つれなくすめる秋の夜の月

○老後見月

去かりとて眺めざらめや秋の月

曇るは老の習ひなれども

○秋 懷

草も木も同じ時雨はある物を

わが袖のみを何しぼるらん

○冬 朝

あぢきなく浮よの色を忍べとや

落葉が上にさゆる朝霜

○述 懷

世の中ようつればかばる人ごころ

思ひ定むる事しなけれは



(附 録)

勤王正義者ノ義ニ付内申

兵庫縣姫路市北條口十四番屋敷士族
東京市本郷區追分町百番地寄留河合升吉祖父

故 河 合 屏 山

右ハ元姫路藩士ニシテ夙ニ勤王ノ志厚ク嘉永安政ノ際同藩有志ノ士河合惣兵衛
等ヲ指揮シ王事ニ奔走スルコト數年ニ相及ヒ之レカ爲メ幕府ノ嫌疑ニ觸レ一タ
ヒハ藩地ニ屏居シ一タヒハ江戸ニ幽閉セラル、等備サニ辛酸ヲ嘗ルモ敢テ屈ス
ルコト無之遂ニ維新ノ鴻圖ヲ翼賛スルコトヲ得候ハ其功鮮カラサル儀ニ有之維
新ノ際專ラ藩主酒井忠邦ヲ輔佐シテ到ラサル所ナク能ク闔藩ノ向フ所ヲ固メ勤
王ノ誠意ヲ致サシメ殊ニ王政復古ノ實ヲ舉クルハ封建ノ制度ヲ廢シ文武ノ實權
ヲ朝廷ニ收ムルニアリトシ藩主忠邦ヲ勸メテ版籍ノ奉還ヲ建議セシメタルカ如

キ其薩長土肥ノ建議ニ先タツコト實ニ數ヶ月前ニ有之當時封建ノ餘習未タ去ラ
サルニ際シ克ク版籍ノ奉還ヲ請願シタルモノ實ニ姫路藩ヲ以テ率先者ト爲スヘ
ク而シテ之カ主動者タルモノ實ニ屏山ニ有之是レ屏山カ平素大義ヲ重ンシ天下
ノ形勢ヲ察シ先見卓識鴻圖ヲ翼贊セントスルノ誠意ニ外ナラス其功實ニ偉大ナ
ルモノニシテ其詳細ナル事蹟ハ別紙版籍奉還建議顛末書ニ有之候前記惣兵衛以
下ノ者ハ已ニ夫々贈位叙位等ノ恩典ヲ拜シタリト雖モ獨リ屏山ニ至リテハ未タ
何等御沙汰無之候得共其精忠功績前記ノ通ニシテ惣兵衛等ニ對シテハ實ニ其先
輩トモ可申者ニ有之候條此際恩典ニ浴スル様特殊ノ御詮議相成候様致度別紙履
歷書等相添此段及上申候也

明治三十六年九月二十五日

兵 庫 縣 知 事

内 務 大 臣 宛

姫路藩版籍奉還率先建議之顛末

維新ノ曙光煥發シテ王政古ニ復シ伏見鳥羽ノ一戰幕府ノ餘命ヲ斷テヨリ東北ノ
亂亦尋テ平キ中央集權ノ端緒漸ク開カル然レトモ列藩諸侯猶其封土ヲ保有シテ
各其國ニ割據シ朝廷ノ實權未タ牢固ナラス此形勢ニシテ一轉スルナクハ維新
ノ大業モ其功ヲ一篲ニ欠カントスルノ虞アリシカ幸ニシテ諸藩ノ封土版籍ヲ奉
還スルアリテ其鴻圖全ク成ルニ至レリ

明治二年正月二十日薩長土肥ノ四藩連署上表シテ土地人民ヲ奉還センコトヲ請
フ列藩相踵テ之ニ倣ヒ六月十七日其請ヲ許サレ封建制度ハ茲ニ郡縣ノ古ニ復セ
リ而シテ此四藩ノ上表ニ先ツコトニケ月明治元年十一月ニ於テ夙ク姫路藩ハ書

ナ上リテ諸侯ノ版籍ヲ收メ郡縣政治ヲ布カンコトヲ請ヘリ是ニ由リテ之ヲ觀レ
ハ姫路藩ハ版籍奉還建議ノ率先者タリシモノト謂フヘシ
今其顛末ヲ考フルニ當時姫路藩ノ家老ニ河合屏山アリ大ニ勤王ノ志ヲ懷キ少時
仁壽山巖ニ學フ巖ハ其養父河合隼之助(寸翁又漢年ト號ス)ノ建ル所ニシテ當時
ノ學者多ク來リ集リ頼山陽等モ亦招カレテ茲ニアリ屏山乃チ屢之ト接シ深ク國
事ヲ憂フ常ニ王室ノ式微ヲ慨シ諸侯ノ土地人民ヲ私シテ朝廷徒ラニ虛器ヲ擁ス
ルヲ歎シ竊ニ之カ恢復ヲ圖ルヲ以テ任トナス養父隼之助隱居スルニ及ンテ家督
ヲ受ケ一タヒ家老トナル其性頗ル果斷ニシテ事ヲ處スル敏捷決流ル、カ如シ
後故アリテ屏居シ文人學者ヲ招テ竊ニ天下ノ形勢ヲ察ス野々口隆正萩原廣道松
本奎堂藤本鐵石等來リ訪フモノ多シ文久二年大勢漸ク迫ルニ及ヒ屏山京師ニ出
テ藩士河合惣兵衛等ヲ指揮シテ王事ニ奔走シ屢小河彌右衛門等ト來往ス之ヲ以

テ藩ノ譴責ヲ受テ江戸ニ幽閉セラレ惣兵衛等ハ切腹ヲ命セラル明治元年秋ニ至
リ朝廷ヨリ召レテ京ニ入り姫路藩政ノ改革ヲ命セラル是時ニ當リ藩士武井守正
(當時逸之介ト稱ス)恰モ外交方ヲ命セラレテ京ニアリ屏山乃チ守正ニ告ケテ曰
ク今ヤ王政古ニ復シ天下漸ク平定ニ向ハントス然リト雖モ猶列藩ノ諸國ニ割據
シテ各兵馬ノ權ヲ有スルアリ斯ノ如クンハ實權何レノ日カ朝廷ニ歸セン之ヲシ
テ眞ノ王政復古ニ致サシメンニハ須ラク封建ノ制度ヲ解テ郡縣組織ニ復セサル
ヘカラス然レトモ事遽カニ行フヘカラス宜シク形勢ヲ觀其時機ヲ失スルコトナ
ク務メテ報道ヲ怠ルコト勿レト時ニ藩士近藤薫(當時啓藏ト稱ス)亦史生外交掛
ヲ命セラレテ京ニ到ル二人共ニ苦心シテ列藩ノ動靜ヲ察シ時機ヲ覘フ明治元年
十月ニ至リ一日大目付松崎甫(當時彦右衛門ト稱ス)ト京師二條ノ藩邸ニ會シ相
謀テ曰ク今ヤ政朝廷ニ歸シ東北亦平ラク而シテ雄藩ノ霸ヲ圖ラントスル者無キ

カ如シ時機至レリト乃々近藤燕ヲシテ馳セテ姫路ニ還リ之ヲ屏山ニ告ケシム屏山之ヲ以テ藩主酒井直之助ニ説キ藩主其議ヲ容ル屏山則々藩儒菅野猶介ニ旨ヲ授ケ其建議書ヲ起草セシメ十一月初旬藩主ノ名ヲ以テ之ヲ上ル其文ニ曰ク

王政御一新之御折柄皇國御一體朝廷列藩氣脉相通シ不申候半而者御成功ニモ被爲及兼候御儀ト乍恐奉存候就而者府藩縣之御制度ニ而者府縣者自ラ貫通仕候得共藩之儀者藩々家法職制等區々ニ而自然隔絶仕府藩縣三治一致ニ歸シ兼候通弊ト奉存候ニ付何卒藩之名稱ヲ御改都而是迄之府縣ト一般同軌ニ罷成其上官之者ハ參朝ヲモ被免大事件者伺之上裁決シ定例等之儀者便宜取扱候様相成候得者自然御情意皇國中へ貫徹仕中興之御盛業被爲遂候御儀ニモ相連ヒ可申哉ト乍恐奉存候ニ付不顧忌諱此段奉獻言候誠恐誠惶

此建議書ハ更ニ其趣意ノ詳細ヲ書出スヘシトノ指令ヲ添ヘテ下ケラレタリ即チ

十二月ニ至リ更ニ第二ノ書ヲ上リテ列藩諸侯ノ地ヲ收メ府縣ト之ヲ同クシ封建割據ノ舊制ヲ革メ郡縣劃一ノ新制ヲ施行セントスルノ旨趣ヲ陳フ其文ニ曰ク

府藩縣御制度之儀ニ付不顧僭越不敬鄙存之趣獻言仕候處猶一層細密申上候様御沙汰ニ付左ニ奉中上候

府縣之儀者朝廷ヨリ諸藩人材御拔擢ニ而上等官ニハ夫々官位等賜リ專任仕候儀別而府之儀ハ堂上方御任職ニ罷成候儀ニ付下情等一々上通仕自然皇意貫徹仕候得共藩之儀者自ラ其藩々舊格職制等區々之上地方ニヨリ京師ヨリ百里二百里或ハ三四百里モ隔居候ニ付諸御布告筋等者相達候得共何分遐陬僻郷之儀ニ付風俗等固陋ニテ兎角朝廷之御情意通シ兼候勢モ有之候是全土地之儀者朝廷ヨリ御預リ申居候ニ不心付銘々我土地ト存居候舊習之心得違ヒ有之候故自然朝廷列藩之間隔絶之弊習モ相生シ可申哉ト乍恐奉存候右ニ

付今般御一新ノ廉ヲ以一旦土地御引上ニ相成改テ御預ケト申御沙汰ニ相成藩ノ名稱御改ニテ府縣ト被成申迄モ無之候得共兼テ御布告ノ通門閥ニ不拘人材登庸任舉仕其執政參政等者輪番ニテ京師エ相詰居時宜ニヨリ官位等モ賜リ大事件者參朝ノ上相伺裁決仕候様相成候ハ、皇領ノ府縣ト同一軌ニ罷成自然御情意皇國中エ貫徹仕乍恐中興ノ御偉業被爲遂候御儀ニモ相運ヒ可申哉ニ奉存候ニ付不顧忌諱此段再應獻言仕候誠恐誠惶

此建議ニ對シテハ更ニ何等ノ沙汰無クシテ遂ニ其年ヲ終レリ翌年正月二十日ニ至リ薩長土肥ノ四藩連署上表シ他藩亦之ニ倣フモノアリ是ニ於テ同月二十八日更ニ書テ上ル

昨冬中府藩縣ノ儀ニ付不憚忌諱獻言仕候處猶一層細密可申上旨御沙汰ニ付不鄙存縷々奉申上候然處先頃來同様ノ旨趣獻言仕候藩々モ往々有之趣傳承

仕候右藩々獻言ノ旨趣御採用ニ相成候半ハ奉申上候ニモ不及儀トハ奉存候得共同様ノ御沙汰被成下候様仕度此段前以奉懇願置候以上

正月二十八日

酒井雅樂頭

辨事

御中

朝廷乃チ附紙ヲ以テ沙汰ヲ下ケラル其文ニ曰ク

其方獻言ノ趣意頃日諸藩ヨリ獻白ノ意味ト致相違候間御沙汰無之候事

焉ソソ圖ラン曩ニ版籍奉還ノ趣旨ニ出テ、而シテ列藩上表ノ意ト正ニ符合セル建言ノ却テ其意味相違セリトノ指令ヲ受ントハ是ニ於テ二月十五日重ネテ上書スル所アリ

昨冬十一月中府藩縣一般一治之儀ニ付不憚忌諱獻言仕候處猶一層細密可申

上旨御沙汰ニ付同十二月中封土版籍一旦御引揚被遊改テ御預ケト申御沙汰ニ相成候ハ、普天王土之儀明白仕御情意皇國中エ貫徹可仕候不願鄙存縷々奉言上置候處過日以來版籍返上ノ藩々有之不圖獻言ノ趣ニ暗合仕候ニ付而者右獻言御採用被爲下候儀ニ候ハ、私版籍之儀モ外同様之振合ニ被仰付候儀哉ト奉存過日出願仕候處趣意相違之儀御附札ニテ御下ニ相成其段何共恐入候次第ニ御座候得共全右獻言仕候心底素々版籍奉還之覺悟ヨリ出候儀者今更申上候迄モ無御座候間今般改テ版籍奉還奉願候宜御執奏被下度此段奉願候誠惶敬白

二月十五日

辨 事
御 中

同月行政官ヨリ左ノ令ヲ受ク

酒 井 雅 樂 頭

今度土地人民版籍奉還可致之旨及建言候條全ク忠誠之志深ク歡感被思食候尙東京御再幸之上會議ヲ經公論ヲ被爲竭何分之御沙汰可被爲在候得共版籍之儀ハ一應取調可差出之旨被仰出候事

二 月

行 政 官

六月十七日ニ至リテ諸藩ト均シク其請ヲ許サレ版籍奉還ノ趣意茲ニ達スルヲ得タリ

以上ノ事實ニ就テ之ヲ見レハ姫路藩版籍奉還ノ建議ハ薩長土肥四藩ノ上表ニ先ツコト正ニ二ヶ月餘トス其ノ率先シテ此ノ議ヲ上リタルハ實ニ藩老河合屏山ノ素志ニ出テ而シテ武井守正近藤薰松崎甫等ノ能ク其意ヲ體シテ之ヲ助ケタルニ

依ル惟フニ王政復古ノ確立ハ郡縣制度ノ建設ニ基キ郡縣制度ノ建設ハ諸侯ノ版
籍奉還ニ起源セスンハアラス屏山則ケ能ク衆ニ先ンシ機ヲ制シ以テ藩主ヲシテ
此議ヲ上ラシム是ヨリ天下ノ形勢一轉シテ以テ薩長土肥四藩ノ上表ヲ促スニ至
レリ東北ノ亂平定ノ後ニ於テ爲政家ノ腦裡ニ盤レル問題ハ實ニ夙ク屏山ニ依リ
テ解決セラレタリ屏山勤王ノ志先見ノ明ハ能ク維新ノ大業ヲシテ其有終ノ美ヲ
成就セシメ朝廷ノ實權ヲシテ鞏固ナラシムルノ端緒ヲ開キタルモノト謂フヘシ
不幸ニシテ其名ハ世ニ没セラレタリト雖モ其功業ト其精神トハ維新ノ大業ト共
ニ永ク其光輝ヲ放ツヘキナリ



贈從四位中島太郎兵衛小傳

春のあけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを

雑子

春のあけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを

浦のうた

浦のうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを
あけぼののうたを

中嶋勇治所蔵

中嶋重孝詠草抄(足代弘訓評)

何美

春をよめる人のあはれきりてはなほのこころをいかに
かきとらふべきか

雑子

差押の書成る地をいかにいかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

曲水

浦のよき水はあはれきりてはなほのこころをいかに
かきとらふべきか

中嶋勇治所藏

あつたてのあつたてのあつたての
あつたてのあつたてのあつたての
あつたてのあつたてのあつたての

生野町松本綺太郎所藏

あつたてのあつたてのあつたての
あつたてのあつたてのあつたての
あつたてのあつたてのあつたての

中島勇治所藏

あつたてのあつたてのあつたての
あつたてのあつたてのあつたての
あつたてのあつたてのあつたての

生野町吉川増太郎所藏

所々名も知れぬ志士一國の
生れし時春乃は味持て玉座

生野町松本麟太郎所藏

月夜
やとあつれ我並衆の柱に
此の世もたゞはまらふらんや

中品勇治所藏

今志士一國のやみなきは花さうち
こゝろのちかきやまのちかき

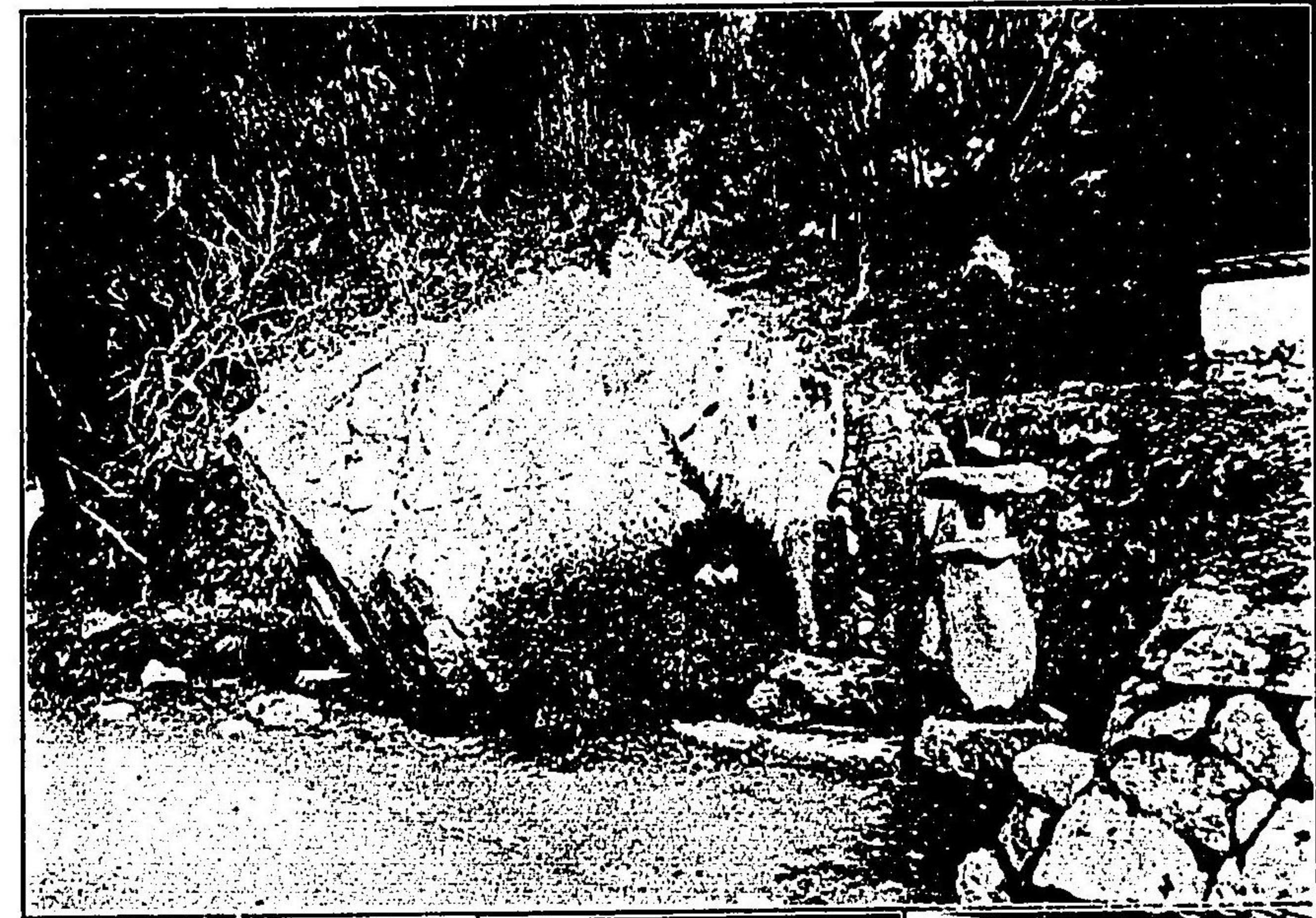
生野町吉川増太郎所藏

山 伏 岩

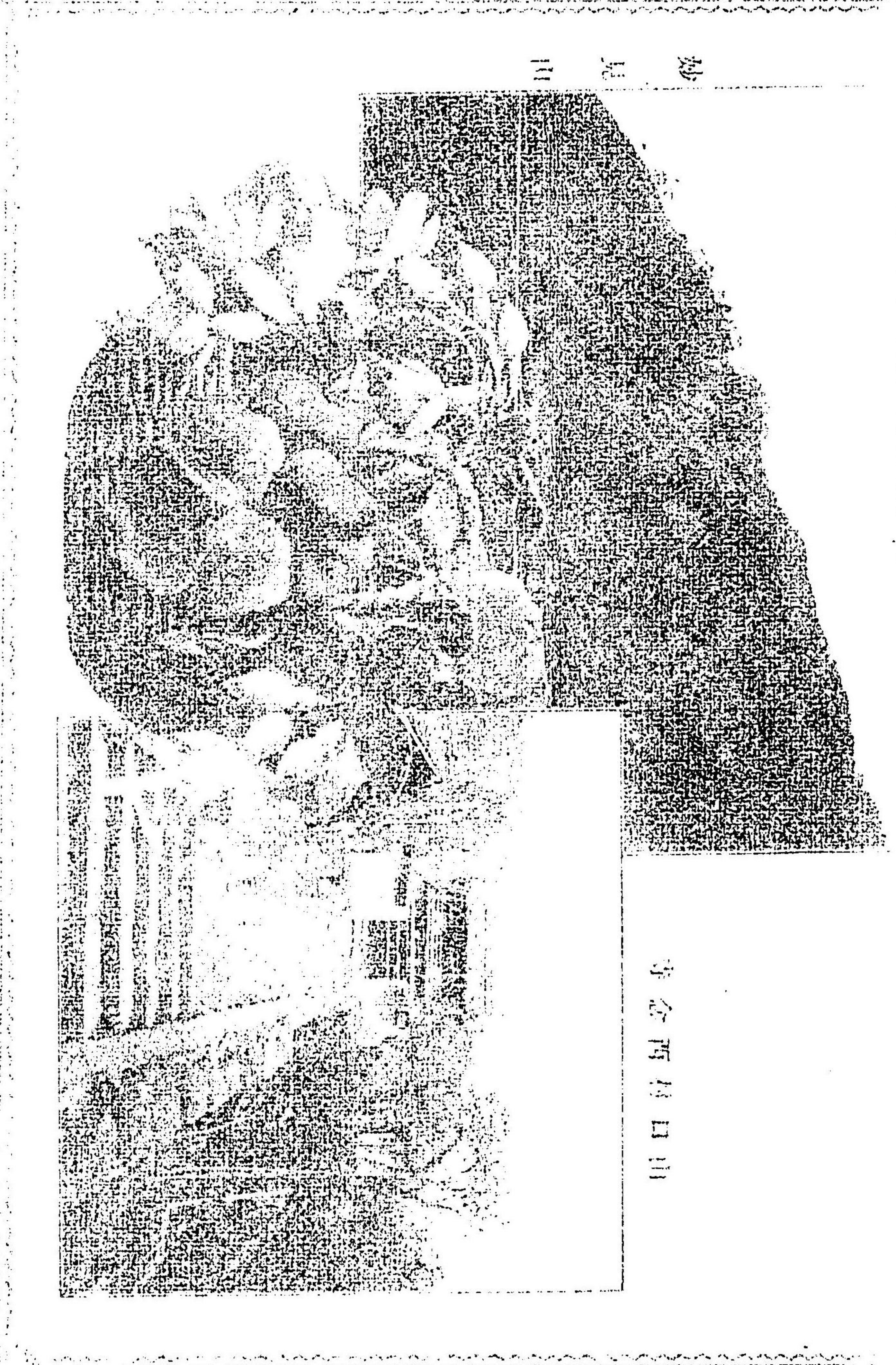


山 招 魂 社 内 石 碑

山 伏 岩



山 口 招 魂 社 内 石 碑



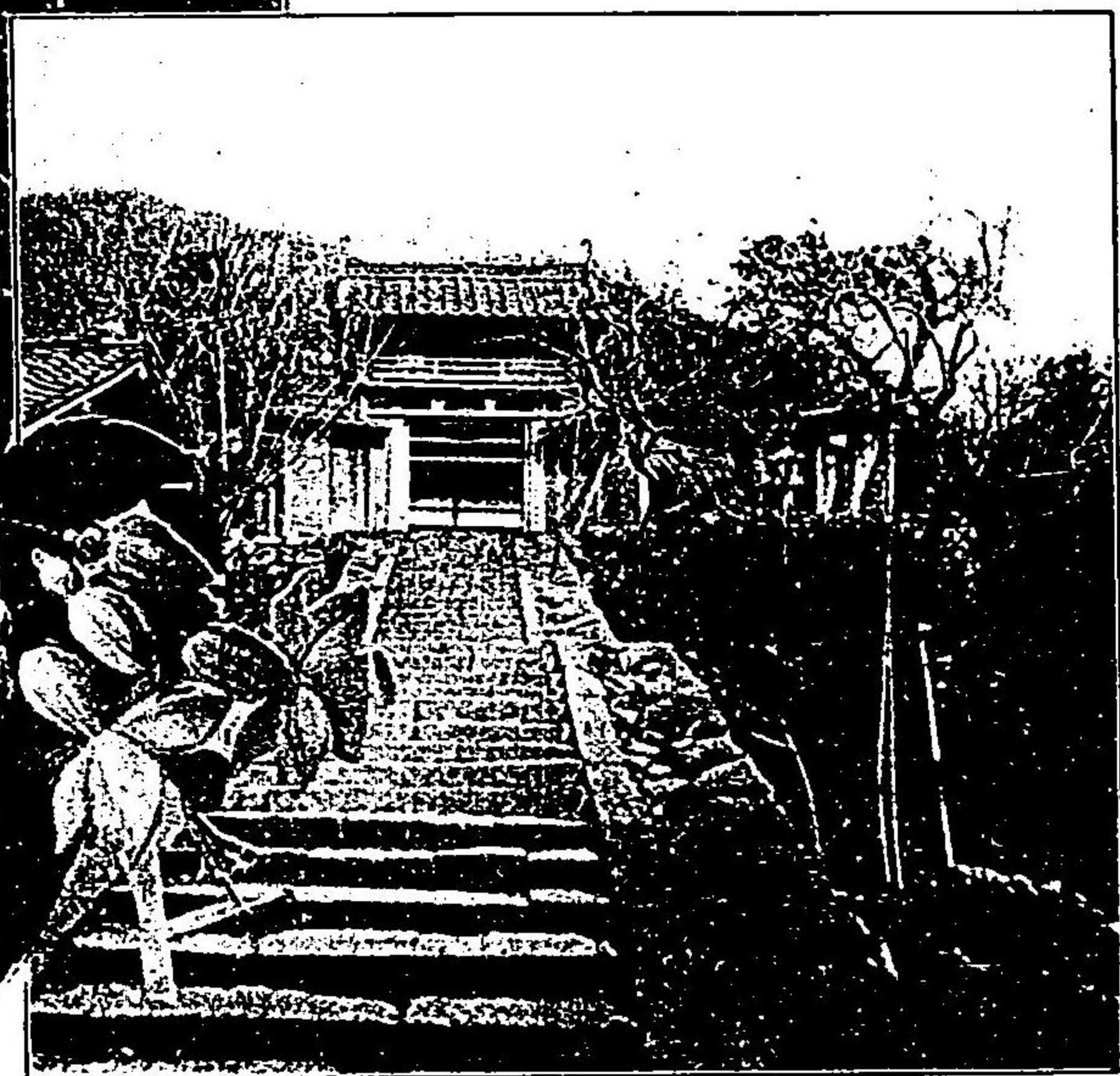
山 景 圖

山 景 圖 卷 一

妙見山

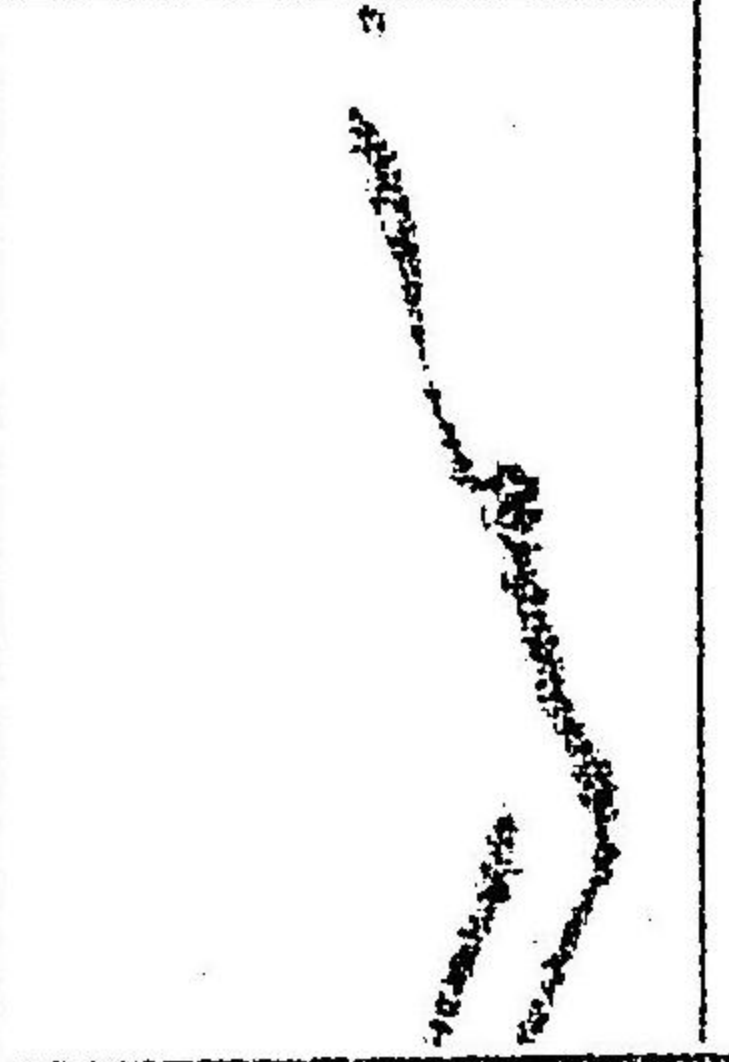


山 口 村 西 念 寺



中
國
治
所
藏

中
國
治
所
藏



論
勝
必
武
神
馬
次
野
平

論勝必武神馬次野平

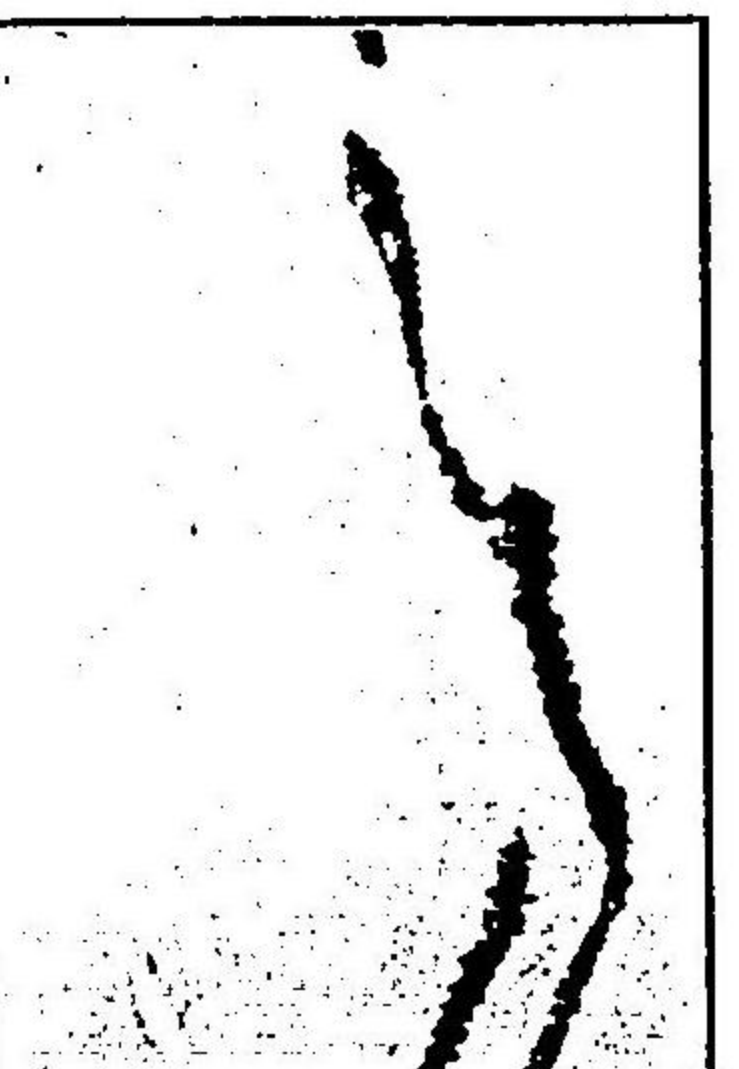
神武天皇
神武天皇
神武天皇
神武天皇
神武天皇



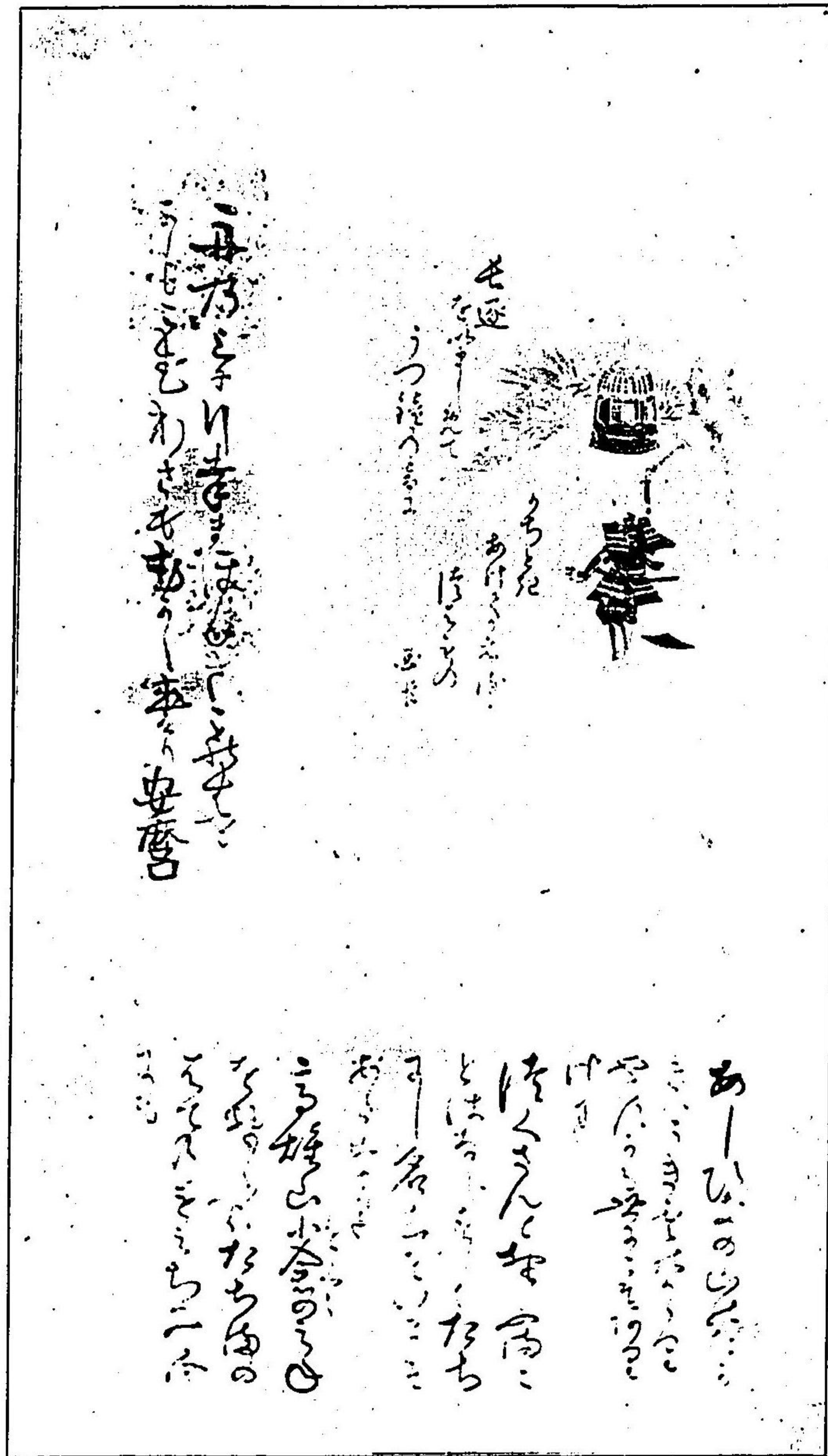
神武天皇
神武天皇
神武天皇
神武天皇
神武天皇

平野次郎神武必勝論

神武天皇
神武天皇
神武天皇
神武天皇
神武天皇

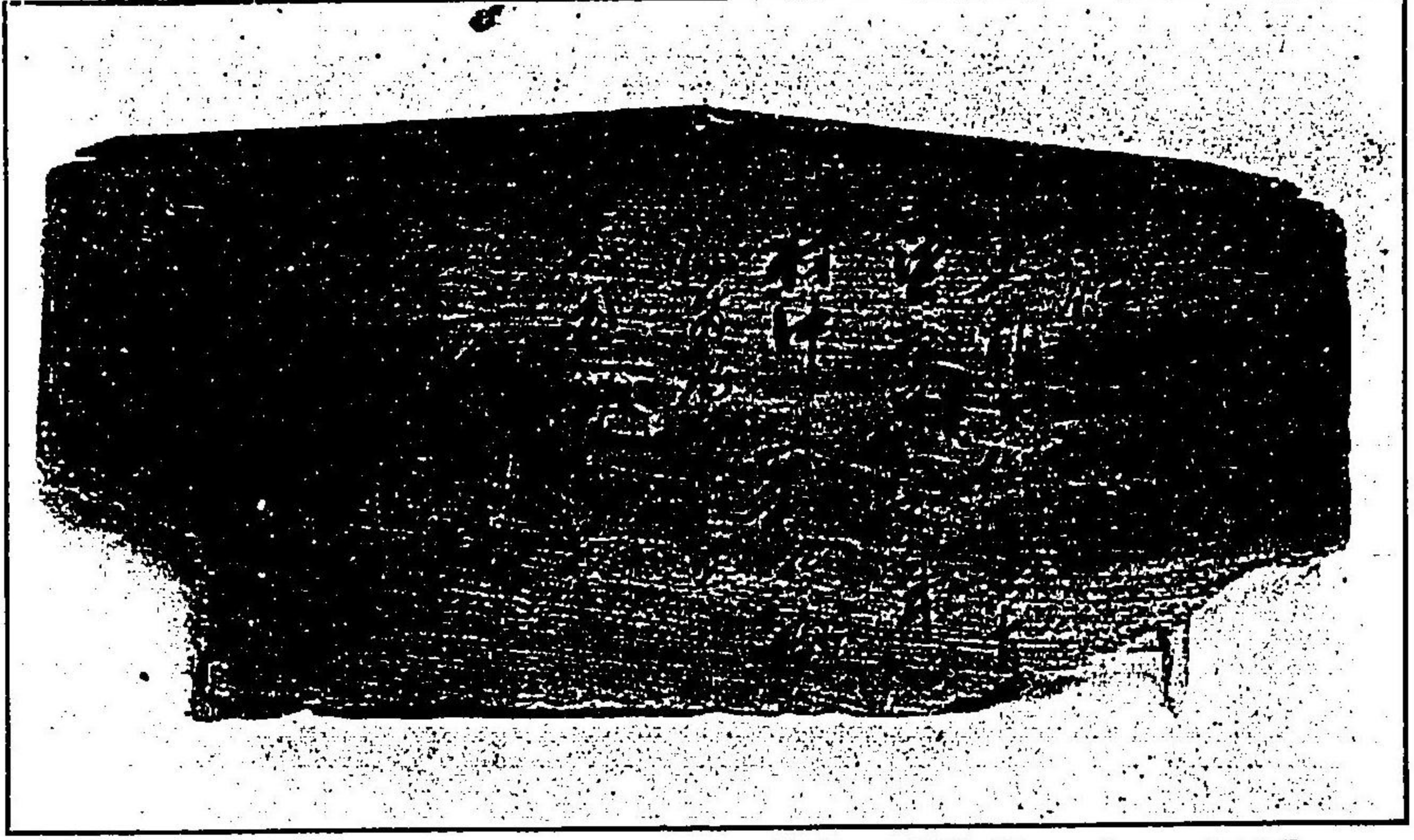


藏所治勇嶋中



筆自 野次郎

生野町吉川増太郎所藏



生野葦原制札

捷

一從天朝被仰出之
旨察相守へき事
一村中一和肝要た
るへき事

一火用心肝要之事
文久三癸亥
十月十三日

神領

南八郎題詠

議論より實を行へ

なまけ武士

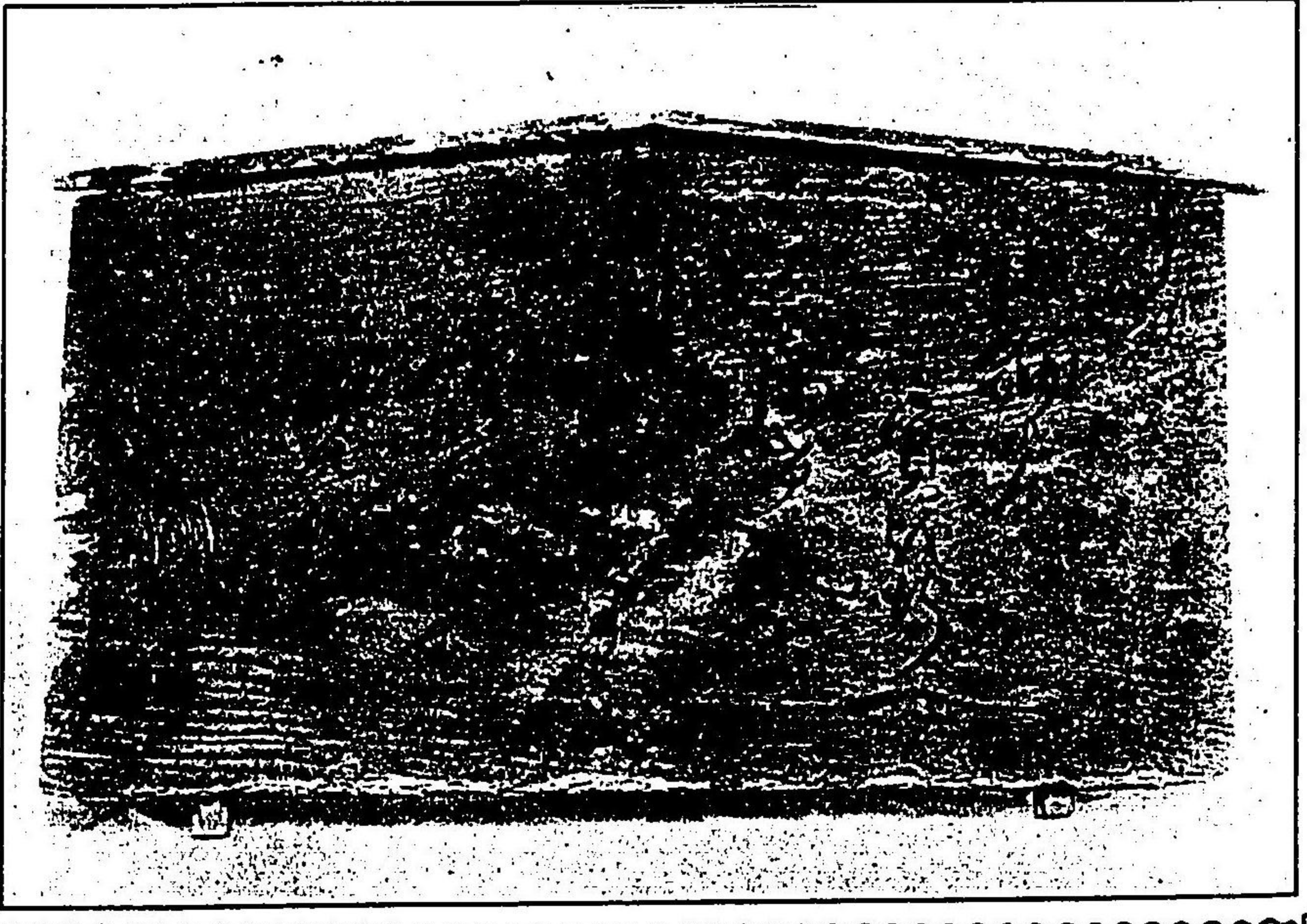
國の大事を

餘所に見る

馬鹿

皇國草莽臣

南八郎



山口村招魂社所藏

贈從四位中嶋太郎兵衛小傳

中島太郎兵衛名ハ重孝幼時信太郎ト云フ父ノ名ハ重憲亦太郎兵衛ト稱ス母ハ正垣氏文政八年十一月十日ニ生ル其先ハ黒田氏世々武士タリシカ後農ニ皈シ但馬國養父郡高田村ニ住ス高田村ハ往古石禾郷ニ屬シ中古高田ノ庄ト云ヒ後石禾ノ庄ト稱ス生野ヨリ豊岡及城崎温泉ニ達スル街道ノ中央ニシテ維新前人馬繼立ノ宿驛タリ而シテ中島氏ハ同村ノ中央西側ニ住シ世々大庄屋ニシテ地方ノ右族ナリ

重孝性豪邁不羈強ヲ畏レヌ弱ヲ援クルノ風アリ信義一貫少シモ仮借スル所ナシ幼ヨリ皇室ヲ重シシ毎ニ皇威ノ振ハサルヲ歎シ長シテ同國出石藩小山篤輔草川三右衛門ニ隨ヒ漢籍ヲ學フコト年アリ尋テ竹田町宮本池臣ニ學フ天保十四年遠ク伊勢ニ遊ヒ足代弘訓翁ノ門ニ入り國學ヲ修ムルコト三年餘弘訓一日門下ノ諸

士ニ告テ曰ク方今我邦ノ形勢恰モ宋末ノ如シ國威衰退名義將ニ紊亂セントス有志ノ士蓋ソ奮起シテ累卵ノ危キヲ救ハサルヤト太郎兵衛慷慨措ク能ハス是レヨリ力ヲ國事ニ竭シ死ヲ以テ之ニ任センコトヲ誓フ時ニ文久三年生野義舉ヲ去ルコト殆ント二十年前ナリ嘉永六年米國人浦賀ニ來ル是ヨリ天下騷然人心恟々タリ太郎兵衛慨然人ニ語テ曰ク死シテ國恩ニ報スルノ時來レリト爾後日夜潛心苦慮或ハ甲冑刀劍ヲ購ヒ或ハ白絹木綿等數十疋及機械ヲ求メ亦廣ク有志ヲ糾合シ家産爲メニ頽廢スルニ至ルモ敢テ意トナサス曾テ大和國吉野ニ詣リ南朝ノ古跡ヲ探リ其如意輪寺藏スル所ノ小楠公決死戰ニ臨ムノ日留ムル所ノ馬鞍ニ外匣ナキヲ見歎シテ曰ク嗚呼世間人ナキ哉ト直ニ同志ニ謀リ桐匣ヲ造リテ之ヲ納ム香川景樹ノ子景恒之レカ記ヲ撰ス其文左ノ如シ

我友貞重孝春の花にあくがれ秋の丹葉を惜みて芳野の山踏しける其折々此如意輪精舎の寶庫に秘

置れたる小楠公の鞍を拜み奉るにつけてかけまくもかしこき延元の頃はひ天の下に雙ひなかりし君が勳功を慕ひ奉るに堪ずして實に七寶にもまされりと思ひとれるなり好古の情誰しの人かはひとしからざらむ爰に同志の友がき幹梅城と共にかゝる至寶の千載の後にれのづからにそこなはれ行むことを歎き謀りてこれ以新に筥を造らしめて納奉れるものなりさるは年々るの願ひ相かなひてかたみによるこひの時にあへるを歎ひあへるになむ是はた古しへのふるの中道打開けて治れる大御世の賜物なりけらし

文久元二月末の三日

陸奥介平景恒

妻正垣氏名ヲヤサト云フ母弟ノ女ナリ嫁シテ既ニ十四年ニ女ヲ産ム文久三年正月即チ義舉ノ前數月事ニ托シテ之ヲ離婚ス人其故ヲ知ラス生野ノ事アルニ至テ漸ク之ヲ知ル大義ノ爲メ恩愛ノ子女モ亦纏綿ノ煩累タルヲ慮ル其衷心ノ痛苦察スヘシ是ヨリ先江州膳所ノ藩士本田素行(又本田小太郎ト稱ス實名山元隆助)藩ヲ脱シテ京都明暗寺ノ役僧タリ但馬播磨兩國ノ出張所ヲ預リ高田ノ隣邑養父市場ニ寓シ常ニ兩國ノ間ヲ往來シ其風土人情ニ通ス又達辨ニシテ奇節アリ重孝意

氣相投合シ常ニ之ト交ハリ謀ル所アリ又熊本藩士朝日健但馬國八鹿村ニ寓シ醫國屋某ノ宅ニ於テ劍道ヲ教授ス朝日又慷慨同志ノ士ナリ竹田町ノ太田六右衛門亦劍客ヲ聘シテ術ヲ子弟ニ授ク筑前ノ人平野次郎薩摩ノ人美玉三平（高橋祐次郎ノ變名）等來リテ中島ノ家ニ寓ス蓋シ近歲外警頻リニ形勢穩ナラサルヲ以テ幕府令シテ農民ト雖モ亦武ヲ習ヒ不虞ニ備ヘシム然ルニ美玉ノ但馬ニ入ルヤ朝廷ノ命ニ依リテ農兵ヲ組織スト稱ス爲ニ大ニ便宜ヲ得將ニ期スル所アリ時ニ生野ノ代官ヲ川上猪太郎ト云フ三平等ノ朝命ヲ奉スト云フヲ以テ關東ノ指命ニ拘ラス奉戴スヘキナリト爲シ屬僚ヲ出シテ農兵組織ノ舉ヲ助ケシム志士等大ニ之ヲ喜ヒ九月五日朝來養父兩郡ノ庄屋中重立者ヲ養父明神ノ山内ニ集メ美玉平野朝日等出テ、農兵組織ノ朝旨ヲ傳フルヤ生野役所ヨリ地役人木村松三郎小川愛之助等代官ノ命ヲ奉シテ來リ其間ニ周旋スル所アリ美玉三平ノ奉戴セル御書付

ニ曰ク

但馬國之義ハ賊衝ニ當リ殊ニ京都ヨリ僅三四十里ノ地方急度兵備可有之候處農民等忠孝之志厚ク有之趣ニ付農兵之組立當今切迫之時勢ニ付速ニ出來候様有之度候勿論其功績ニ依リ急度可及沙汰候帶刀之儀者差許候間此段相心得周旋可致候事

八月

參 政

美玉三平 江

以上ノ書付ハ八月十六日參政御役所ニ召サレ非藏人松尾但馬吉田遠江兩人取次ヲ以テ三條公ヨリ受領セシモノナリト云フ此時ニ方リ遠近有志ノ士勃然起テ之ニ應シ（生野銀山町）北垣晋太郎（養父郡能野村柴捨藏ト稱ス）ヲ始メ太田仁右衛

門(生野銀山町)木南彌市兵衛 生野銀山町(進藤俊三郎(朝來郡佐中村進藤丈右衛門ノ弟ニシテ後チ原六郎ト稱ス)太田六右衛門(後ニ出ツ)太田悟一郎(朝來郡竹田町太田壽右衛門ノ子)木村治平(竹田町)宮本采女(竹田町諏訪明神主宮本近江ノ子)小山六郎(朝來郡大月村)田治米吉郎右衛門(朝來郡矢名瀨町)藤井三郎右衛門(矢名瀨町)福田元良(矢名瀨町)吉井定七(矢名瀨町)山崎甚兵衛(朝來郡喜多垣村)日下安左衛門(朝來郡粟鹿村)下村治右衛門(養父郡高田村)北村平藏(養父郡能野村)西村庄兵衛(養父郡八鹿村)西村重右衛門(八鹿村)西村五兵衛(八鹿村)西村哲次郎(五兵衛ノ弟ニシテ太田次郎ト稱ス)上田九左衛門(氣多郡土居村)朝倉心齋(城崎郡湯島村)大江甚助(城崎郡瀬戸村)等諸藩ニテハ平野美玉ヲ始メ朝日本田横田友次郎長曾我部太七郎河合惣兵衛田中軍太郎伊藤龍太郎千賀九左衛門等互ニ出入往來遙ニ氣脉ヲ京阪近畿ノ間ニ通シ相應援シテ機ノ會ス

ルヲ俟ツモノ、如シ志士等時々擊劍ノ稽古ト稱シ行厨ヲ携ヘテ屢茶白山ナル鎮守ノ森ニ會合シ事ヲ議ス而シテ重孝ノ家ハ帷幄根據ノ地ニシテ同志圖ル所ノ事一トシテ重孝之ニ關セサルハナク陰然重キヲ以テ任セラル先是文久三年八月吉村寅太郎藤本鐵石等ノ諸士中山忠光卿ヲ奉シテ義ヲ大和ニ唱フ時ニ三條中納言以下七卿西ニ走リテ長門ニアリ美玉始メ伏見寺田屋ノ舉瓦解ノ後窃カニ但馬ニ入リシモ再々ヒ京師ニ在リ堺町御門ノ變アリ七卿直ニ長門ニ下ラル、ト同時ニ亦但馬ニ入り平野又朝命ヲ受ケテ大和ノ義舉鎮靜ノ爲ニ赴キシモ事既ニ發シテ騎虎止ムヘカラサルノ勢ヲ見難ヲ避ケテ亦但馬ニ入り美玉ヲ助ケテ農兵組織ノコトヲ竭サント欲シ共ニ陰カニ三條卿ヲ奉シ義ヲ但馬ニ舉ケ遙ニ之カ應援ヲ爲サント欲ス九月下旬田中軍太郎西村哲次郎木南彌市兵衛進藤俊三郎等京阪ノ間ニ赴キ同志ヲ招キ軍器ヲ輸サントシ平野北垣等ハ長門ニ下リテ元帥ヲ迎ヘ

ントス太郎兵衛及美玉朝日其他ノ同志ハ但馬ニ在リテ輜重其他ヲ調度シ專ラ用意ヲ怠ラス當時太郎兵衛氏名ヲ變シテ石和太郎ト稱ス平野等三田尻ニ至リ先ツ三條公ニ就キテ之ヲ推戴センコトヲ請フ公不可トシテ應セス轉シテ澤宣嘉卿ニ説キ夜ニ乘シテ之ヲ船ニ邀ヘ海路播磨ヲ經テ十月十一日但馬ニ入ル長州藩士河上彌市白石廉作長野熊之允下瀬熊之進和田小傳次西村清太郎小田村信之進井關英太郎久富豊伊藤百合五郎大村辰之助秋月藩士戸原卯橘水戸藩士小川吉二郎河股左一郎伊豫ノ人田岡俊太郎尾張ノ人江上庄藏薩摩ノ人氷田左衛門及出石藩士多田彌太郎高橋甲太郎中條右京其他諸藩志士ノ脱シテ長門ニ在ル者多ク來リテ之ニ從フ太郎兵衛又弟黒田與一郎ヲ大阪ヨリ招キ同年十月遂ニ義兵ヲ生野銀山ニ舉ク十一月同志ノ十五餘人澤卿ヲ奉シテ但馬ニ入ル先ツ播磨國神西郡森垣村ノ延應寺ニ次シ(生野ヲ距ル凡拾町)夜ニ乘シテ生野代官所ヲ襲フ時ニ代官川

上猪太郎出テ、備中倉敷ニ在リ直ニ占領シテ之ニ據リ運上藏ヲ開キ金穀ヲ出サシメテ軍資ニ供シ法令ヲ布キテ民心ヲ安シ疎放ノ舉ヲ戒メ部署ヲ定メテ要衝ヲ守ラシム更ニ檄ヲ傳ヘテ有志ヲ募ル其檄文ニ曰ク

先年開港以來 御國體を汚奉り小民共困窮致候を 御憂被遊度々關東へ攘夷の 勅諭被下候得共終に不奉受 朝廷を蔑如し奉り度々毒藥等を獻し候處皇祖天神の保護により 玉體無恙被爲有然る處去八月十七日奸賊松平肥後守始以僞謀 禁門に亂入し關白を幽閉し公卿正義之御方之參 内を止め 御親兵を解放ち言路を隔絶し恐多くも 今上皇帝被爲在逆賊之圍中實に千秋一時之一大厄を恣に致處置候始末供に天を不戴之讐に候嗚呼率土之濱誰人か涕泣せさらんや男子膽を張り身を抛は此時に候但馬國は人民忠孝之志厚く南北の時節にも賊足利に與せず 皇威を掲げ國體を張り候條被 聞召上兼而頼母敷

奇特に 思召候早々走集り大義を承り 叡慮を奉奸賊を退け可奉安 宸襟候
事

亥十月

澤 主水正

但馬國舊家有志人々

是ニ於テ既ニ同盟加擔ノ志士ハ先ヲ爭フテ器械糧食ヲ輸シ亦檄ニ應シテ來リ會
シ生野ヨリ山口村附近ニ集マル者頗ル多ク軍氣大ニ振フ幕府姫路出石豊岡宮津
峯山柏原篠山等ノ諸藩ニ命シテ之ヲ討タシム十三日河上彌市戸原卯橘白石廉作
美玉三平等別隊トナリ出テ、山口村ニ至リ先ツ西念寺ニ陣シ尋テ妙見山ニ登リ
據リテ以テ北來ノ敵ヲ禦カントス太郎兵衛時ニ生野本陣ニ在リテ專ラ樞機ニ參
セリ此時大和ノ義兵ハ既ニ破レ生野志士ノ軍亦利アラス同日夜同志中生野本陣
ヲ脱シテ四散スルモノ少ナカラス（相傳フ十七日錦旗ヲ護シテ京都ヨリ丹波ヲ

經坂路來リ會セシ者アリシモ事敗後ニ屬シ遂ニ出石藩兵ノ取押フル所ト爲レリ
又十四日田中軍太郎等兵器ヲ送リテ丹波ヨリ矢名瀬町ニ來リ軍潰ユト聞キ之ヲ
捨テ、因幡ニ走リ又姫路兵ノ將河合惣兵衛出石兵一番手ノ將荒木賴母等内應ノ
約アリシカ如キモ事各發スルニ由ナク其他應援ニ赴カントシテ途ヨリ退キタル
モノアリ）是ニ於テ土兵背叛掌ヲ覆スカ如ク各藩兵ニ應援シテ銃ヲ反ヘシテ追
撃スルニ至レリ戸原卯橘河上彌市等別レテ山口村ニ在ルモノ皆進退維谷意ヲ決
シテ遂ニ自刃スル者十有餘人又途ニシテ敵兵ニ要撃セラレ戰死或ハ生擒セラル
、者少カラス初メ生野本營ノ遂ニ解散スルヤ太郎兵衛直ニ弟與一郎ヲシテ之ヲ
山口村ノ同志ニ報セシム戸原河上以下憤慨死ヲ決シテ動かサルヲ示ス美玉三平
乃チ與一郎ヲ從ヒテ太郎兵衛ニ會シ共ニ途ヲ播磨ニ取り澤卿ニ尾シテ長門ニ下
ラントス偶矣粟郡木ノ谷村ニ於テ土兵ノ要スル所トナリ各創ヲ被ル三平最モ甚

シク遂ニ民家ニ入りテ自刃ス太郎兵衛亦數傷ヲ被リ自ラ起ツ能ハサルヲ知り與
一郎ヲ顧ミテ曰ク我今死ス汝宜シク命ヲ全フシテ澤公ノ最後ヲ視敢テ再舉ヲ圖
レト傍ナル楠樹ノ洞ヲ指シ之ニ首級ヲ埋匿セシム從容自ラ從者ニ命シテ首ヲ刎
ネシム實ニ文久三年十月十四日ナリ時ニ年二十九太郎兵衛ノ首級ハ後幕府ヨリ
生野へ護送シ河上彌市等首級ト共ニ陣屋獄庭ニ埋メタリシカ明治維新ノ際郷里
高田村ノ家ニ中受ケ先塋ノ次ニ葬ル義舉ノ翌年即チ元治元年出石藩目付役來リ
太郎兵衛ノ兩親即チ重憲夫妻ヲ庭前ニ引出シ訊鞠甚々嚴ナリ尋テ慶應元年正月
京都目付役戸川鉦三郎來リ太郎兵衛一家並ニ國內同盟者數十餘人ヲ生野役所へ
呼出シ各訊鞠スル所アリ他ノ同盟者ハ直ニ謹慎ヲ命シ或ハ放免シタレトモ太郎
兵衛ノ一家ハ首謀者タルノ故ヲ以テ歸宅ヲ許サレス三月下旬ニ至リ漸ク歸ルコ
トヲ得タリ太郎兵衛ノ住家素茅屋ノ一大厦ナリ當時志士ノ寄寓或ハ出入スルモ

ノ勝ケテ數フヘカラス銀山義舉ノ敗後平野美玉其他志士ノ筆蹟書類多ク之ヲ藏
セリト雖トモ後幕府ノ爲メ沒收セラレシモノ多ク加フルニ回祿ノ災ニ罹ランコ
トヲ恐レ之ヲ近隣ノ土藏ニ納メタルモノアリシモ高田村大火ノ際遂ニ烏有二歸
シ僅ニ同志ノ筆ニ係ル斷篇片紙ヲ保存スルノミ始メ平野次郎ノ但馬ヨリ長門ニ
下ラントスルヤ曾テ福岡ノ獄中ニ於テ紙捻ヲ以テ塵紙ニ文字ヲ貼付シ以テ筆硯
ニ代ヘ鬱勃ノ意氣溢レテ神武必勝論(紙數四拾枚)ヲ作り之ヲ太郎兵衛父重憲ニ
贈ル幸ニ之ヲ珍藏セシカ維新後同志西村庄兵衛ノ懇請ニ依リ中卷一冊ヲ分與シ
上下二冊ヲ殘セリ其後明治二十年一月孝明天皇御式年祭ニ付 聖上皇后兩陛下
京都へ行幸啓ノ御途次同月二十六日神戸通御之節西村ノ藏セル中卷一冊ヲ合セ
西村庄兵衛中島太郎兵衛吉川増太郎(太田仁右衛門ノ孫)ノ三名ヨリ内海兵庫縣
知事ノ手ヲ經テ献上ス同年八月宮内省ニ於テ之レカ摸形ヲ調製シ各關係者へ下

賜セラル明治二十四年十一月五日太郎兵衛ヲ東京靖國神社ニ合祀セラル太郎兵衛ノ甥勇治養父郡大藏村ノ内高田村ニ住シ現ニ其家ヲ繼ク
太郎兵衛曾テ伊勢ノ足代弘訓翁ニ就テ和歌ヲ學フ當時翁ノ親シク雌黃ヲ加ヘタル弘化三年ノ詠草一冊今尙現存ス左ニ數首ヲ撰出ス

○春雪似花

花を待つ庭の梢にふる雪を

ふきなちらしそ春の山風

○夕鶯

梅か枝を宿とやすらむ鶯の

夕くれかけて聲しきるなり

○鶯聲和琴

端居してつま音高くひく琴に

われをとらしと鶯のなく

○霞中瀧

おもしろし霞のよそに白玉を

をりく見せて落つる瀧つせ

○花の歌

ゆきかひの誰か言の葉も梓弓

はるは櫻の花にかゝれり

○山家花

みやひたる色にもあるかな櫻花

かく山さどにさける物から

○蝶

折かさす花のかをりや惜むらん

わか來るかたに胡蝶飛ふなり

○河山吹

駒とめて見し人こひし玉川の

岸の山吹さけるこのころ

○春田

すみれさく春の荒田を賤の男か

心なけにもかへしつるかな

○幽居有餘樂

奥山にうき世のかれて永き日に

わかenasu業は花見なりけり

(附 録)

○官祭招魂社

但馬國朝來郡
山口村字上之山

文久三年十月十三日生野義舉ノ同志戸原卯橘南八郎美玉三平等別隊トナリ生野
ヨリ出テ、朝來郡山口村ニ至リ西念寺ニ陣シ尋テ妙見山ニ據ル當時同志ノ姓名
ヲ妙見堂ニ題スル者左ノ如シ

戸原卯橘	南八郎	長野清助
下瀬猛彦	小田村信一	伊藤三郎
白石廉作	井關英太郎	久留惣兵衛
和田小傳次	西村清太郎	三玉三平
氷田左衛門	長曾我部太七郎	大川藤藏
中條右京	草我部 某	

翌十四日朝衆寡敵セス軍遂ニ利アラヌ妙見山ノ麓宇山伏岩ト稱スル巨巖ノ下ニ於テ自双スル者戸原卯橋、南八郎、長野清助、下瀬猛彦、小田村信一、伊藤三郎、白石廉作、氷田左衛門、井關英太郎、久留惣兵衛、和田小傳次、西村清太郎、草我部某ノ十三名ニシテ中條右京長曾我部太七郎ノ兩名ハ播州神西郡猪篠村ニ於テ大川藤藏ハ朝來郡納座村ニ於テ美玉三平ハ中島太郎兵衛ト共ニ宍粟郡木ノ谷村ニ於テ自双若クハ戰死セリ而シテ以上十七士ノ首級ハ中島太郎兵衛ノ首級ト共ニ出石藩仙石讚岐守之ヲ收メ一旦和田山村ノ陣所ニ引上ケタルカ翌十五日生野代官川上猪太郎ノ陣中ニ送リ爾來假ニ生野獄庭ニ埋メ置クコト五年有餘明治元辰年二月八日ニ至リ山口村有志山口九郎三郎山口權之助外七名相謀リ官ニ請ヒ山伏岩自双ノ地ヲトシ該首級ヲ葬リ（中島太郎兵衛ノ首級ハ當時遺族ノ請ニ依リ高田村ノ先塋ニ埋葬ス）碑ヲ建テ拜殿ヲ設ケ以テ祭典ヲ執行ス山陰道鎮撫總督西

園寺公望之レカ碑表ヲ書シ同參謀折田年秀其碑文ヲ撰ス

慶應四年歲次戊辰二月

殉節忠士之墓

正三位中將藤原公望書

殉節忠士之墓誌銘

忠孝者國家之正氣也效忠盡孝而天下治焉不忠不孝而天下亂矣自古人在治亂興廢之際效忠盡孝而死難者不可勝數也夫忠孝之人死難而國亡家敗者何哉實其正氣也嘉永弘化中德川氏失其職輕蔑天朝凌虐下民暴殺忠臣孝士而進用奸人酷吏醜毒決疽禍延京畿兵連與羽其罪天地之所不容鬼神之所共討也當時義士烈夫勃然憤激欲生食彼肉鞭撻彼屍然而其志不成斃而已矣豈不傷哉癸亥歲冬十月舉事於但馬國山口村力竭絕援慷慨奮戰或死敵或自及者十有七人可謂烈矣是皆剛大之氣忠貞之節屹然獨峙百撼不搖而終至此願十七人之氣節炳如日星而姓名不可悉可惜哉是歲戊辰春二月村民拾遺骸改葬於山口村戰沒之地年秀謹請鎮撫總督西園寺三位

中將公望卿表以真抵慰其忠魂云銘曰

一人義膽

萬世風標

勇急先務

節知後凋

冤魄可雪

精魂可招

山口靈壤

京神非遙

慶應四年歲次戊辰夏六月

山陰道鎮撫總督參謀折田主税年秀謹撰

明治二十年四月前記山口村有志者官祭招魂社へ編入之義ヲ出願シ二十一年七月二十五日内務大臣ヨリ河上彌一以下十七名ハ官祭招魂社へ編入シ平野次郎以下十三名ハ私祭トナスヘキ旨ヲ達セラル

河上 彌一

(南八郎長州萩)

戸原 卯橘

(筑前秋月)

長野 熊之允

(長野藩助長州萩)

下瀬 熊之進

(下瀬藩彦長州萩)

小田村 信之進

(小田村信一周防三田尻)

伊藤 百合五郎

(伊藤三郎周防三田尻)

白石 廉作

(長州下ノ関)

井關 英太郎

(周防國吉敷郡壺道村)

久富 豊

(久留惣兵衛周防佐波郡田島村)

和田 小傳次

(長州萩)

氷田 左衛門

(實名是松樹右衛門薩摩縣山形郡松崎町)

西村 清太郎

(長州萩)

草我部 某

小河 吉三郎

(大川藩藏水戸藩大番組小河與十郎弟)

中條 右京

長曾我部 太七郎

美玉 三平

(實名高橋祐次郎薩摩)

以上十七名官祭

平野 次郎

(筑前福岡)

横田 友次郎

(四州)

右兩名ハ生野義舉敗レ十月十四日但馬國養父郡網場村ニ於テ京極飛彈守ノ手ニ捕ヘシレ後京極ニ檻致セラレ斬ニ處セラル

川俣左一郎 (水戸)

大村辰之助 (長州)

右二名ハ但馬國朝來郡納座村ニ於テ仙石讃岐守ノ手ニ捕ヘラル左一郎ハ出石ノ獄中ニ自殺シ辰之助ハ京都ニ送り斬ニ處セラル

木村愛之助 (片山九市ノ變名後ニ出ツ)

伊藤良太郎 (伊藤龍太郎後ニ出ツ)

本田小太郎 (近江盛所)

右小太郎ハ生野義舉敗レテ播磨國神西郡福崎新村ニ至リ酒井雅樂頭ノ手ニ被捕京都ニ送り斬ニ處セラル

太田六右衛門 (後ニ出ツ)

中島太郎兵衛

黒田與一郎 (後ニ出ツ)

多田彌太郎 (但馬出石)

右彌太郎ハ生野ノ舉敗レ澤卿ニ從ヒ長門ニ走り後征長ノ役戦死ス

西村哲次郎

但馬國養父郡八鹿村ノ人太田次郎ト稱シ生野義舉ニ與シ朝來郡矢名瀬町ニテ事敗ルヲ聞キ因州ニ脱走シ後周防富田建築院ニ於テ自刃ス

小山六左衛門

但馬國朝來郡大月村ノ人小山六郎ト稱シ生野義舉ニ與シ事敗レ讃岐ニ走り高杉晋作等ノ志士ト謀リ長門ニ往キ遊撃隊ニ入り從軍中明ヲ失シ後郷里ニ歸リ家ニ入ラスシテ自刃ス

以上十三名私祭

二十二年十月十八日更ニ左ノ二名私祭合祀ノ件許可セラレ毎年十月十四日ヲ以テ祭祀ヲ施行シ以テ今ニ至ル

高橋甲太郎

但馬國出石藩ノ人生野義舉ニ與シ事敗ル、ニ當リ澤卿ニ從ヒ長門ニ走リ征長ノ役斥候トナリ
銃丸ニ中リ創ヲ蒙リ遂ニ戰死ス

三 牧 庄 藏

尾張海西郡西條村ノ人三牧謙助ト稱ス生野義舉ニ與シ事敗レ病テ逆旅ニ在リ姫路藩ノ手ニ捕
ハレ平野次郎等ト共ニ京都ニ檻致セラレ遂ニ斬ニ處セラレ

○溪間日乗抄録

美玉三平實名ヲ高橋祐次郎ト稱シ薩摩國鹿兒島郡元西田村ノ人舊關山紉ノ家來ナリ文久二戊
年四月伏見寺田屋ノ擧アリ二十三日夜薩摩邸ヲ脱走シ同五月下旬但馬國城崎郡湯島ニ至リ旅
宿鯨江傳左衛門方ニ寄寓シ自ラ佐土原藩泰安磨ト稱ス同七月上旬一旦湯島ヲ去リ翌三亥年八
月下旬ニ至リ再ヒ湯島ニ來ル今同人ノ自記ニ係ル溪間日乗ナルモノヲ見ルニ管ニ生野義舉當
時ノ狀況ヲ知ルノミナラス併セテ中島太郎兵衛ニ關スル事蹟ヲ詳ニスルヲ得ルヲ以テ左ニ之
ヲ抄録ス

○五日朝五ツ時ヨリ養父明神山別當所ニ會合ノ人數追々登山セリ安磨ハ同志連席ノ上登山スヘキトノ
事ニテ相待タルニ四ツスキニヤ袴着セシ壯夫來リ登山セシニ廿四五輩連坐セリ上坐ニハ銀山地役人小
川愛之助木村松三郎素行ナトセリ其人數ニハ太田仁右衛門太田六右衛門太田悟一郎宮本近江下村次右
衛門中島太郎兵衛田路彦右衛門大橋又右衛門大橋助左衛門兒島郁三郎西村庄兵衛西村十右衛門西村五
兵衛吉井定七吉井彌兵衛田地目吉左衛門藤井三郎右衛門日下安左衛門小山六左衛門足立與三衛門大橋
惣右衛門善右衛門北村平藏ナト三十四五輩明神山別當廣間ニ居並ヒテ各挨拶ニ及ヒヤリ安磨上坐ニ別
席ス可キトノ事ニテ讓ラス上坐ニ着ク其廣間ニハ小川木村左ノ横ニハ素行伊東良太郎順々長ク間坐セ
リ各神酒ヲ吃シテ心膽ヲ言ハシメン爲メ鹿物ニテ酒肴出ス中回ニシテ論判激發竹ヲ破ルノ勢ヒアリテ

夕前ニ各旅館或ハ歸宅セリ安曆ハ其夕ヨリ素行出張ニ來リ談合シ大塚屋ニ歸ル其明曉ヨリ湯島ニ至ラ
シ事ヲ欲シテ止ム北村平藏ノ話ニ云ク平野國臣ナル人ニテハナキヤ去ル二日北垣晉太郎ヲ御尋アツテ
一宿シ玉ヘリ從士一人僕一人ニテ三日早天ニ湯島ニ行レタリト云フ又高田村中宿ニ來リ人足ヲ取シ話
シテ聞クニ白アバヲ惣髮ハ似タレトモ年齢二十八九ト見エタルヲ聞クニ必ズ二郎ナラスト相談スル内
ニ湯島ヨリ鯨江傳左衛門着セリ頃ハ夜ニ入ル頃ナリ鯨江懷中ヨリ短冊ヲ出シ安曆ニ示ス其短冊ヲ觀ル
ニ「サヒシサナクサムヤトテイテ來シカミヤコノアキハワスレサリタリ」國臣トアリソハ今ニ批判
セシ事ナリトテ始メテ安堵セリ國臣來リシレタルモイカサマ神事ニヤト喜フ中ノ愛ニ久美濱甚々安曆
ヲ怪ム中ニ國臣悠々湯島ニ居ルハアフナシトサラサト返事ヲ書記シ奧ニ返シノ心ヲヨソルハ「待ワ
ヒル人ノ心モ白雲ノカ、ル山ヲモアタニ越ケン」ト書テ明後早天ニ湯島ヲ打立高田村中島太郎兵衛方
マテ早々來ル可キ旨ヲ記シテ鯨江ヲ明曉ヨリ出立セタリ其夜ハ大塚屋ニ宿ス是ヨリ先キ養父明神山ニ
盟ヒニ臨ミシ人数ハ大凡諸郡ニテ名アル者ノミナル處聞付々々會盟ニ臨ミシ者アレドモ最早神酒モ盡
キ又不意ニ來リシ人達ナレハ十三日ノ會合ニ來リ玉ヒトテ各返シタルトノ事ヲ白スソレハ後ヨリナリ
トモ盟議ヲ告テ加ヘタルカヨシトテ旅館ニテ大概ノ事ヲ示ス事ニ成リタルナリ満足シテ歸レリ六日朝
飯膳シ素行諸人ニ別レテ中島ニ來ル老人至テ正義ノ人ニテ懇切ニ門内ニ迎ヒ入タリ其人朴實ニシテ膽
氣動カサル事石ノ如シ勸王ノ談深キニ至レハ双涙交至ル其人ノ子ナレハコソ太郎兵衛モアリシヤト感

ニ堪ヘタリ妻ニモ又風韻アリテ人ヲ待スルニ必ス飾ラス實ヲ以テス安曆人ノ内ニ至レハ長クツ、カサ
ル飾禮ヲ用ヒル人ヲ厭フ心アリテ屢人ヲ示シムルノ僻アリ中島ニ來リ太々快カリシ中ニホシイマ、ニ
我カ氣儘モ云テ日ヲ過スモヨシ太郎兵衛モ膽氣アル士ニテ太々互ニ懇ロナリ中島氏ハ原ト黒田氏ト云
亦具足吉光ノ刀ナト古ク傳ヘテ家柄ノモノ、農民ニナレリト云事ナリ由テ安曆云フニハ今ヨリ即改テ
黒田ヲ名乗ヘシ系譜ハ追テシラヘ申サンヲ言ヒハ最モナリトテ黒田ヲ名乗レリ七日ニハ國臣モ來ルナ
ル可シトテ田路彦右衛門ヲ從ヒテ養父市場ニ來リナンバマテ遊ヒ頃ハ七ツ時ナリ旅店ニアカリ待シ
ニ川原ニ鮎ヲ取ルニ投網スルヲ見物ス七ツ半マテ待タレトモ來ラスイカサマ鯨江ノ歸リ遅カリシヤト
云フテ暮方ニ黒田ニ歸レリ五ツ前マテハ待タレトモ終ニ至ラス太々案ス明八日ニハ銀山役人ノ宿リニ
ナルトテ彦右衛門方ニ一宿致シクレトノ事ニテ兩掛御用物モ皆トリマトメナケリ

○八日周旋ノ人追々尋來リ種々談合ス晝飯モ過キタルニ彦右衛門迎ヒニ參レリ兩掛御用物槍ナト先キ
ニツカハシ跡ヨリ彦右衛門方ニ移レリ夜入前美肴ヲ出シタルハ餘リコ、ロヨカラス以後右ノ如クナル
ヲ示ム飯ヲ吃シ過キタルニ國臣至レリ又酒肴ヲ出シ安曆モ又吃ス夜半マテ談シ國臣モ大ヒニ欣ヒタリ
サレハ明後日ヨリ湯島ノ方ヲ奮起ヲ托シケレハ國臣モ諾シテ既ニ明後日ヲ相待ケル大塚大和五條ノ談
チキケリ

九日四ツ時ヨリ黒田ニ移ル晝飯過テ但州一定ノ陣列ヲ談合ス安曆云フニハ何レ天智天皇ノ令ニ復スル

ナ善ト云又國臣モ大ヒニ然ラントテ大寶ノ令ヲ求ント段々ト探スニ宮本近江ハ神職ニテ博文ナレハ令
義解ナトハ必ス所持アル可シトテ早々一人ノ使ヲ立テケレハ令ヲモテ來リ又宮本モ祭禮ノ齋畢レハ來
ル可シト云ヒ送レリ折角待テ但馬家柄ノ農民且ツ俵米親王ノ事并平民或ハ門脇伊賀平内左衛門ノ跡ナ
トツハラニ糺シモラワシテ思フテ宮本ヲ待ツ事シキリナリ令義解モ持テ來リ其夜ニハ結澤山獲リ得
來リ味噌ヲツケ炙リツクリミナトニシテ酒ヲ飲リ結一尺ヨリ六寸マテノ結ナリ此國ノ珍物ナリ此晚ニ
ハ伊東龍太郎訪ヒ來リ一杯ヲサシケル内ニ川原ニ矢ニ中レル鹿ノ倒レ居レリト知ラスル者アリ夫レハ
ト其儘龍太郎外ニ兩三輩ツレテ至リ見レハ水涯ニ大ナル鹿矢ニ中リ倒レ居レリシカシ四五日モ日數タ
チシニヤ矢目少シ臭氣アリ首ヲ放チ或ハ肩先ハ鮮肉ナリ前足二足ト首ヲ持シ歸リ炙リテ吃シ烹シテ吃
シ兩日スルト少シ臭氣出テ捨タリ老人兼テ鹿猪ヲ吃スルヲ諱ム老母モ然リ此節ハ天子様ノ御人達ナレ
ハ諱ム事更ニナシト言フテ歌ナトヨミテ安應ニ與ヘテ泣テ欣フモ誠ニ奇妙正實ノ人ナリ折ニ觸レ天子
様ノ事ニ及ヘハ泣テ其實ヲ云誠ニ有難キ志操ノ老人ナリ

十日早飯スキテ太郎兵衛近郷四里ハカリノ處ニ俗事ニテ出タリ四ツ過ヨリ軍防令ニヨリ農兵ノ組立古
ヘニ基キ今ニ用ユ可キトテ國臣大畧ヲ圖シタレトモ切ナラスシテ止ミ安應伍隊ヲツクリ多々益辨スル
ノ方ヲ立タレトモ其法未タ一定セス七ツ前ニナリタル處湯島武谷回助ヨリ飛檄來リ何事ヤラント手帖
ヲ披キ見ルニ國臣捕ヘ方ノ者湯島ニ至リ宿美木屋ナトニテ種々聞合セテ歸リタレハ高田銀山ナトニテ

モ安心ナリ難キトノ知ラセノ手帖ナリ由テ國臣ハ國事掛ヨリ三平ニ助力スヘキトノ事且國臣ハ國事掛
ヨリ御用ヲ承知致シ去ル九月十七日ヨリ大和五條ノ暴舉ヲ止ムヘキ爲メ日夜倍行セシ所既ニ跡ニナリ
據ナク其マ、上京致シ但馬ニ來リシナレハサナ心配ナサレシヤト言テツカハシ又實ハ荒卷半三郎ト同
行シテ上京シ木屋町ノ鴻ノ池隱居ノ宅ニ入り夜ニ入り祇園町ニ登樓シ歸レハ其晚ニハ壬生浪士六十余
人裏表ヨリ白刃ヲ拔槍ニテ瓦ヲマクリ壁ヲ破リ押入タレハ兩人ナシ空シク歸リタリト云事國臣ヨリ聞
ク登樓ニ益アル事始テナリ大ニ笑ヘリ國臣モ湯島ニ行ク事モ先止ムヘシトテ先ハ安心ニ思ヒシ處田路
彦右衛門云ニハ先素行ニ知ラセ銀山ヘモ内トトケニスル方ヨカラント云ニ山テ銀山小川愛之助木村松
三郎アテニ國臣大和ニ入シ旨趣且安應ヲ訪ヒ來リシ事トモ細々ト書認メ其夜四ツ過ニ養父市場素行出
張マテ圍封ニテ遣シタレハ素行返事ニ明早天ニ來ルヘシト返事アリテ先ツ太郎兵衛ハ留主ナリ其儘サ
シ置ク彦右衛門殊ノ外心配ナリ

十一日六ツ半時來リ云ニハ昨宵ヨリ御心配ナリサレト銀山支配所ノ事ハ此素行ニ任ス可シトノ事ニテ
素行ニ届ケナシニ手ヲ下スヘキ筋モナシ必ス一旦ハト、クヘキナレハ先ハ止ル方ヨカラントヨシ又届ケ
タレハアチコチト持アルキ却テヨロシカルマシ止ム方ヨカラントテ手帖ヲ破リシ

此日ハ養父市場ノ明神山内ニテ角力アリ國臣安應參詣且見物スヘキトノ事ニテ九ツ時ヨリ國臣素行安
應外兩三人携ヘテ明神ニ參詣ス本ヨリ祭禮ニテ詣ル人至テ多シ養父市場ヨリ大橋又右衛門大橋寛藏大

橋助左衛門兒島友次郎ナト袴ヲ着シ迎ヒニ出テ明神山ニ登ルニ未ダ角力ハ首マラス安歴等ノ場所ナリトテ細チ張り一段高キ處ニナシマキテ敷テ屹度設ケタリ八ツ過ヨリ角力モ始マリ夕前ニスミ歸リカケニ又右衛門宅ニテ一杯サシ出シタキトテ頻リニ請フニ由テ至リ見レハ何歎ニ設ケ半甜ニテ書畫ナト始リ國臣モ安歴モ氣マ、ノ酒キケンニテ歌ヤ詩ナトヲ亂筆シテ夜半マテ大杯ニテ飲ツメタリ安歴例ノ酒癖オコリテ人モ迷惑シタリ後ニハ椽先ヨリ庭上ニ落タリ又右衛門家内ナト心配シタリト云今朝キクニ國臣素行大笑シテ云椽ヨリ落タルトテ内ニテ騒ク故直ニ書院ニ來リ見レハ庭上ノ月甚ダ皎々タリトテ更ニ酒ニ醉ハカル体ニテ庭上ヲ徘徊シテ吟聲悠々タルハ誠ニチカシカリキト一同大笑スルヲ聞ク安歴ハ尙腹チカ、エテ笑ヘリ醉人ノ様マコトニ雅ナルモノナリ其晩ハ初更頃ヨリ晋太郎早ヤ歸郷アリモセナンヤトテ旭武次驚馬ニ鞭チ加ヘテ又右衛門宅マテ來レリ八鹿マテ至ルト雖トモ先談モアレハ來ルヘシトテ武次モ席ニツケリ武次ハ安歴國臣等ニ似ス慎ミヨキ人物ニテ酒チ飲マス滲泊チ極メタル中ニ安歴ノ酒癖ニハサソ困リタルナルヘシ余程アシラヒ介抱シクシタリト覺ユヤサシキワサナリ○十二日早天ヨリ一杯チ起シハシメテ又茶碗ニテ國臣トタ、カハシ午後ヨリ安歴ハ倒レ臥シタリヤ、モスレハ國臣素行ニ引起サレテ亂醉セリ國臣ハ酒量甚ダ強シ素行ハ原ヨリナリ暮方ヨリ高田ニ歸レリ老人甚ダ喜ヒイッモ門邊マテ出テ待ツ其晩マ、ニテ茶チノミテ休メリ明日ハ早天ヨリ鰻チ進シタキトテシキリニ高瀬足立與三右衛門ヨリ度々ノ請待ニテ止チ得ス四ツ時ヨリ至ルヘキ約束チナセリ粟鹿明神參詣モ

蒙古勅願所ナレハ其約モアリカラハ高瀬ヨリ一宿ニテ粟鹿ニ至ルカヨカルヘシトテ其十三日忌日ナレハ安歴朝天愼メリ午前マテハ酒肴鰻ナトハ愼ミケレトモ盡スキヨリ酒チ飲リ鰻モ至極ノ請待ナレトモ安歴ハヤスカラス吃スタ前ヨリ干物ナトニテ酒チ飲テ吟聲トモ致セリ此夜ハ滿坐ノ者沈醉シテ坐席モ大ニ振ヘリ安歴亂舞坐頭躍ナトセヨ滿坐倒サマニナリテ笑ヘリ國臣虛空僧ノ被布チ倒サマニ着テ唐人オドリチシタルモオカシ

贈正五位黑田與一郎小傳

元... 梅乃... 正... 黒田...
於京六角... 三...
武... 梅乃...

中島勇治所藏

贈正五位黑田與一郎小傳

黑田與一郎名ハ重清中島重憲ノ子ニシテ贈從四位中島太郎兵衛ノ實弟ナリ天保五年十一月二十日ヲ以テ生ル黑田ハ蓋シ家姓ナルヲ以テ中途自ラ之ヲ稱ス性英邁幼ヨリ農耕ヲ脣シトセス毎ニ武技ヲ嗜ム長シテ江戸ニ遊ヒ築地贊善右衛門ニ從テ鎗術ヲ學フコト數年遂ニ其奧義ヲ極ム既ニシテ奥州ヲ遊歴シ大ニ得ル處アリ文久二年秋丹波ノ人伊藤龍太郎ト共ニ國ニ歸ル曾テ兄太郎兵衛ト共ニ企畫スル所アリ居ルコト凡ソ四十日去テ大阪ニ赴ク時ニ平野次郎美玉三平等其家ニ寓ス與一郎ノ出ルニ方リ三平自ラ携フル所ノ手鎗ヲ鑑シテ之ヲ勵マス遂ニ播州明石藩攝州高槻藩ニ顧聘セラレ交替往來シテ術ヲ子弟ニ授ク同三年十月銀山ノ事起ルニ及ヒテ兄太郎兵衛使ヲ遣シテ之ヲ招ク馳セテ之ニ加ハル既ニシテ軍敗レ衆潰ユ與一郎乃チ兄及三平等ト途チ播州尖粟郡ニ執リ澤卿ニ尾シテ長州ニ至ラ

ント欲シ木ノ谷村ヲ過ク土寇四方ニ起リ銃ヲ以テ之ヲ狙撃ス太郎兵衛三平等皆
倒ル與一郎亦數傷ヲ蒙リ其免ル可ラサルヲ知リ從容自ラ縛ニ就ク遂ニ京獄ニ檻
送セラレ平野等ト同囚タリ元治元年七月平野等ト共ニ斬ニ處セラルヘキノ處最
ニ奥州巡遊中會津ノ藩士ニシテ其門下タリシ者二名之ヲ庇護シ偶其慘毒ヲ免レ
タルモ遂ニ病ヲ獄中ニ卒ス時ニ慶應二年十二月十九日享年三十三左ニ同人ノ書
翰一通ヲ載録ス

養父市場明開寺出張
靜 觀 様 從 江戸
貴 下 黒 田 與 一 郎

一簡拜呈仕候暖利之節御座候處彌御安全可被爲成御座珍重御儀奉賀候然者

小子義無爲消日仕候乍憚御休意可被成下候然者當秋は奥州地へ趣可申所存
に御座候得共此段高田は御舎被下必々御口外御無用に奉願上候誠に遠國
へ罷出居候へは折々故郷の事想像貴君様方定て御心勞も可有之と今更感心
仕候兎角時節相待拜顔も致し候はゞ諸事緩々御咄申上度奉存候先は右之段
爲可申上以愚毫如斯御座候恐惶謹言

二月廿七日

黒田與一郎拜

靜 觀 様

尙々折角時候御厭御養生專一に奉存上候

此書狀宛名靜觀ナルモノハ中島太郎兵衛小傳中載スル所ノ本田素行即チ是レナ
リ與一郎江戸ヨリ歸國セシハ實ニ文化二年秋ニシテ此書狀ハ同人歸國以前江戸
ヨリ送りシモノニ係ル又同人京都六角ノ獄中ヨリ絹片ニ歌ヲ認メテ郷里ニ送り

モノ今尙之ヲ存ス左ニ之ヲ掲ク

元よりも君に捧けしこの身なれば

いまさらおしむことなかりけり

玉銚の道ある國の益荒雄の

ほみしを拂ふ先魁のたひ

たとひ身は劍のしたに望ども

こゝろは君の馬の御前に

敷島の大和こゝろを盡せしを

とふくもきけよ四方のほひすら

元治二乙丑正月

但州高田

於京六角獄舎書

黒田與一郎

重清花押

三玉三平安麿の追悼

武士の名はいつまでも木の谷の

そのかんはしき楠の本

贈正五位古東領左衛門小傳

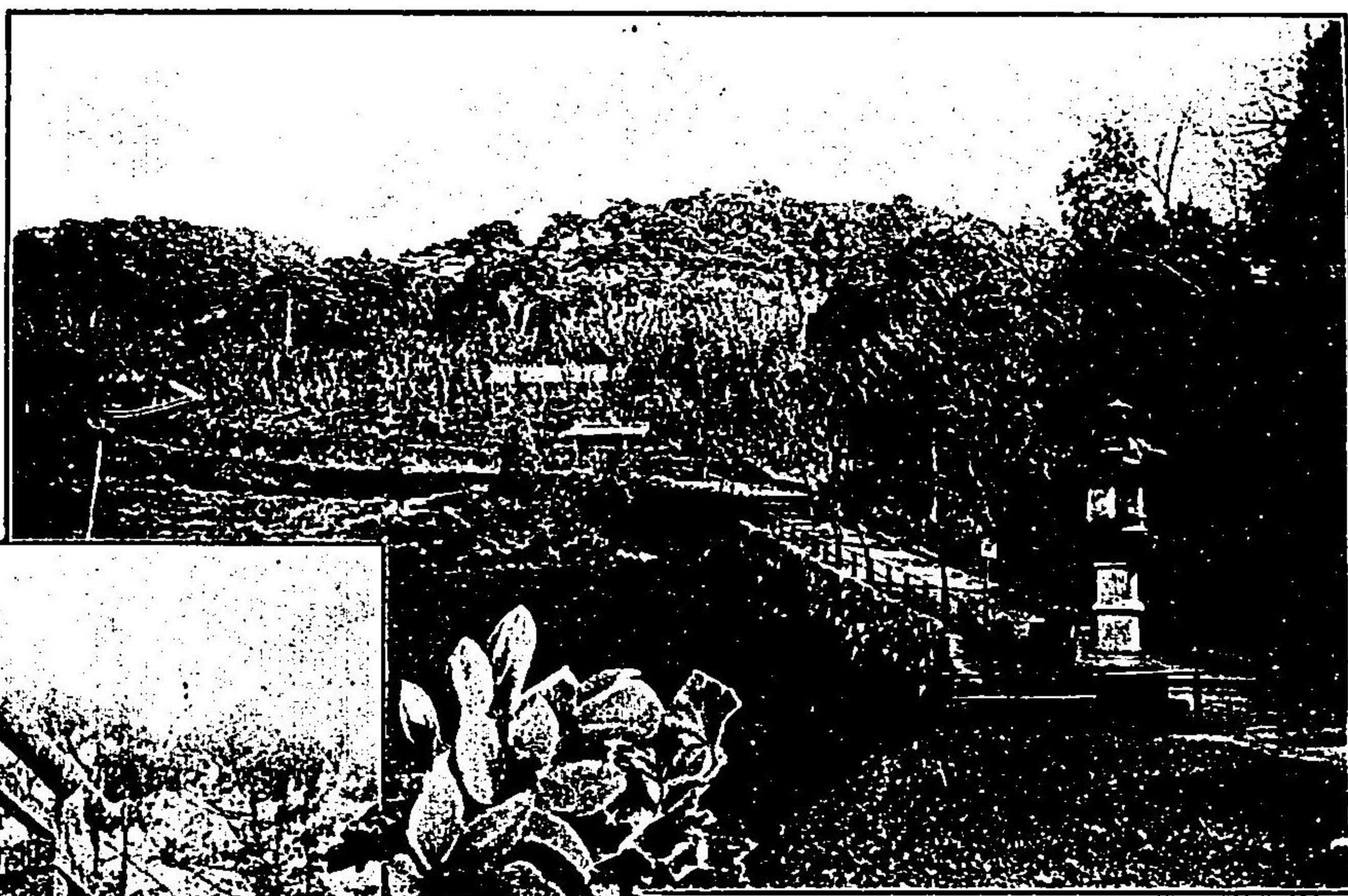
好意書

多陸身賜手書書別
計白...
日...
計...
以言也...
久...

ラリ...
...
...
...

古東又五郎所藏

靈山招魂社境內
古東領左衛門等之墓



京都東山靈山招魂社

贈正五位古東領左衛門小傳

古東領左衛門名ハ需字ハ高鷹衝山ト號ス幼名ヲ震太郎ト云ヒ文政二年四月十八日淡路國三原郡津井村ニ生ル父ヲ萬次郎ト云ヒ十二代世襲ノ庄屋ニシテ田島四拾町歩山林七拾餘町歩ヲ有シ富豪郡内ノ屈指タリ母ハ菊川氏ニシテ兄弟男女八人アリ領左衛門ハ其長子也

領左衛門人ト爲リ度量寛宏儕輩ヲ拔ンス漢學ヲ岡田鴨里林滄浪等ニ學ヒ天保十二年三月年二十三歳ニシテ庄屋職ヲ襲ク性亦施與ヲ好ム天保八年天下大ニ飢ユ窮民道途ニ餓死スル者多シ領左衛門父萬次郎ト謀リ其貯ル所ノ金穀ヲ散シ大ニ貧民ヲ救助セリ萬延元年文久元年ノ二ケ年間凶歲打續キタル時復大ニ金穀ヲ散シタリ又土木治水ノ事ニ通シ常ニ淡路西岸ニ大船ヲ舶スヘキ良港ヲキテ憂ヒ安政二年四月津井港ヲ改築シ港内ヲ浚渫シ同四年八月ニ至リ功竣ヘ大ニ礎繫ノ便

ヲ得セシメタルカ如キ安政六年ヨリ文久元年ニ至ル間本阿万村ノ廢池美女池ヲ
改築シテ六拾餘町歩ノ耕地ヲシテ灌漑ノ洪利ヲ與ヘタルカ如キ就中津名郡岩屋
ノ港灣ヲ開鑿セルカ如キハ其功ノ最モ著大ナル者ナリ如斯敏達ニシテ能ク事ヲ
遂クルヲ以テ凡郡治ニ關ル事ハ概ネ藩廳ヨリ諮問セラレ藩廳之ヲ賞スルニ支配
外(士族待遇)ヲ以テセリ時ニ嘉永癸丑以來外船頻リニ至リ通商互市ヲ要求シ德
川幕府二百有餘年間昇平ノ久シキ忽チ天下騷擾ノ端ヲ開キ勤王攘夷ノ説起ル領
左衛門竊カニ慨スル所アリ萬延元年二月阿波國猪ノ尻ノ劍客梶浦四方之助ヲ聘
シ擊劍鎗術ヲ學ヒ親戚ノ若年者ヲ獎勵シ時期ノ至ルヲ俟ツ

文久元年備前人藤本鐵石(字眞金)江戸人安積五郎庄内人清川八郎等志士ヲ糾合
シ國家ノ奸黨ヲ除キ外夷ヲ攘ヒ大義名分ヲ明ニセンコトヲ期シ分テ各藩ノ志士
ヲ訪フ淡路ハ海門咽喉ノ地ニシテ攘夷ニ樞要ナルヲ以テ同年六月藤本來リテ同

志ヲ求メタリシモ藩主ハ幕府ト因アリ闔藩佐幕主義ニシテ事ヲ謀ルヘキモノナ
シ會領左衛門ノ義氣アルヲ聞キ家ニ來リ談ス大ニ其意氣相投合スルヲ喜ヒ情交
日ニ密ナリ於是書畫ニ託シテ藤本ヲ家ニ止メ密カニ計議スル所アリ諸藩脱籍ノ
士モ亦頻リニ書畫ニ託シ相往來シ村山秀一郎(荷汀ト号ス)等モ亦來リテ謀議ス
ル所アリ同年十二月事ヲ爲スノ準備トシテ弟一太夫ヲ丹波國地方ニ遣シ地利ヲ
視セシム時ニ藩廳ヨリ領左衛門ノ行爲ヲ怪ムト告クルモノアリ乃チ酒色ニ耽ル
ノ狀ヲ裝ヒ故ヲニ別莊ヲ營ミ妾ヲ蓄ヘ藤本ト謀リ先ツ藤本ヲシテ上京セシム去
ルニ臨ミ藤本誓書ヲ留ム領左衛門亦誓書ヲ認メテ取替シタリト云フ

誓書

我雖貧賤所從事則神皇之大道也苟違此言則神人當立誅之甘而受焉人若違
之且害我所爲則背神皇者而爲朝敵不避恩親友愛斬焉我雖微弱誓天地神祇

而不變此言也時在

文久二年歲次壬戌正月上元日

草莽吉備 藤 本 眞 金

藤本ノ京師ニ至ルヤ諸藩ノ浪士ヲ救護スル爲メ許多ノ金錢ヲ要シ屢領左衛門ノ家ニ求メテ之ヲ辨シタリ其詳細ハ書類ノ存在セサルヲ以テ詳ニスルヲ得ス僅カニ左ノ一書アリ(書中貞介トアルハ領左衛門ノ弟一太夫ニシテ當時貞介ト稱セリ)

奉拜披候如命春色相加候處益御清適奉遠賀候僕無事消光居中候先日者貞介様御入京御座候處御匆匆ニ而殘意不少奉存候緒愚意聊御咄申上候處御承知ニ而早速金百兩御差向被下慥ニ收手仕御芳情奉感佩候追々正義家之爲ニ相用可申喜入候尊家之御事御國之御事如何様にも御所置も可有之事如何御座

候哉僕等只々必死と存候迄然も餘處より御覽被下候より存外水火中に御座候御憐察可被下候餘後次寛々可申上候草々御答迄如此御座候以上

二月朔日當賀

眞 金

衝 山 老 兄

尙御家弟様御家内様方へも宜奉頼候以上

是ヨリ先キ平野次郎安積五郎等九州各藩ノ志士ヲ遊説シ薩摩ニ入り島津三郎ヲ要シ上京ヲ促シ其決意スル所アルヲ見テ次郎先ツ大阪ニ還リ五郎等ヨリ島津三郎上京ノ事及九州ノ模様ヲ報シ來ル乃チ領左衛門三月下旬ヲ以テ京見物ト稱シ福良元吉義之助ノ二僕ヲ携へ大阪ニ至リ南堀江二丁目播磨屋文藏ノ家ニ止宿シ屢京攝ノ間ニ奔走シ志士ト相謀ル所アリ文藏ハ領左衛門先代ノ分家ニシテ當時大阪ニ於テ古物商ヲ營ミ相應ノ産ヲ有シタルモノ領左衛門阪地ニ到レハ此家ニ

宿スルコト多シ四月九日島津三郎大阪ニ着ス物情騷然タリ次郎等策ヲ立テ密ニ
京都ニ入り三郎滯阪中綸命ヲ下シ大阪城ヲ拔キ彦根城ヲ火キ聖輝ヲ大阪城ニ遷
シ奉リ大ニ幕府ノ罪ヲ正サントシ書ヲ大原左衛門督ニ上ル浪士等モ亦三郎ヲ擁
シテ事ヲ舉ケントシテ潛ニ伏見ニ至リ寺田屋某ノ家ニ密議セントス三郎之ヲ聞
キ過激ニ事ヲ發センコトヲ憂ヒ人ヲ遣リ之ヲ遮ラシメ其服セサル者ハ捕ヘテ京
都ノ薩邸ニ送ル於是志士大ニ其氣ヲ阻碍セラレ迹ヲ晦ス者多シ此時五郎モ亦領
左衛門ノ家ニ來ル同年五月領左衛門ハ凡ソ田島ハ自作スルヲ利ナリト陽言シ名
ヲ作小屋ニ假リ津井村字内原ト稱スル地ニ兵舎ニ供スヘキ家屋四棟即チ五間ニ
十五間ノモノ三棟付屬家屋一棟ヲ建築シ又自己ノ居宅ハ海岸ニ接近セルヲ以テ
戰時ニ利ナラストシ同村字谷子ト稱スル地ニ廣莊ナル家屋一棟ヲ造築セリ而シ
テ領左衛門カ弟一太夫ニ告ケン所ニ據レハ擁戴スヘキ公卿ノ假殿ニ供セントノ

意ナリシト云フ

文久三年ニ至リ天下ノ志士畿内ニ聚リ時期益熟ス三月領左衛門大阪ニ至ル六月
ニ至リ京都ニ入り寓居ヲ構ヘ朝野ノ間ニ奔走シ軍需ノ用ヲ辨シ僕義之助ヲ國ニ
歸シ自家ノ日用什器ニ至ル迄悉ク之ヲ典賣セシム此時既ニ家産ノ大部ヲ蕩盡ス
ルニ至レリ

播磨屋文藏筆記 六月ニ至リ領左衛門殿京都三條通り豊後屋友七ト申旅宿ニ止宿被致候折柄尾州御
家老上京右豊後屋ヲ旅館ニ被致候故木屋町三條上ル榎屋藤十郎坐敷借請ラレ候此時藤本鐵石殿ハ東
山双林寺前ニ寓居セラル領左衛門殿ト互ニ往來被致候事攝津伊丹ノ酒造家伴善左衛門ト申人モ時々
被參候云々 六月末頃領左衛門殿下阪被致文藏宅ニテ火藥三百斤買入又ハ制札一枚被相拵候得共文
藏ハ何事ニ用フルヤ相心得不申處云々

此時ニ當テ長藩ノ士桂小五郎土州ノ人吉村寅太郎參州ノ人松本謙三郎等モ亦緒
紳ノ門ニ出入シ三條實美公等ト屢密會シテ相周旋スル所アリ一日領左衛門洛東

圓山ニ會セシ時實美公懷紙ニ和歌ヲ書シ領左衛門ニ與ヘラレシト云フ同七月十三日 天皇勅ヲ下シ大和ニ行幸シ畝傍山ノ御陵ヲ拜シ親征ノ大舉ヲ議セント仕給フ由聞エケレハ吉村松本藤本等相議シテ攘夷親征ノ先鋒ヲラントシ中山侍從ヲ擁戴シ十四日淀舟ニテ大阪ニ進發ス十六日領左衛門モ亦大阪ヲ經テ大和ニ入り十七日遂ニ兵ヲ舉ケ五條ヲ襲ヒ代官鈴木源内ヲ斬リ櫻井寺ニ陣ス時ニ平野次郎京都ニ在リ鎮撫ノ命ヲ帶ヒテ大和ニ來ル既ニ舉兵ノ後ナルヲ以テ其義舉ヲ阻ムヲ得ス更ニ相議シテ次郎モ亦兵ヲ但馬ニ舉ケ東西相合シテ京都ニ攻上ラントヲ約シテ京都ニ還ル十八日中外ヲ離間スルモノアリ京都ノ議俄カニ變シ急ニ諸藩ニ命シテ大和兵ヲ討タシメ三條實美公以下七卿長州ニ走り京師ニ在ルノ志士四方ニ散匿ス次郎大ニ驚キ人ヲ大和ニ遣リ京中ノ變ヲ報シ已レモ亦但馬ニ赴クノ由ヲ告ケ來ル松本藤本等事遂ニ爲ス可ラサルヲ度リ高取城ヲ攻メ天ノ川辻

ニ據リ前後奮戰シテ死シ餘黨盡ク捕ハル領左衛門ノ僕元吉モ亦戰死セリ是ヨリ先キ(二十日)領左衛門京師ノ事情ヲ探ラントシテ密カニ大阪ヲ經テ京都ニ入り三條木屋町ノ借宅ニ在リ次郎亦來リ寓ス二十四日捕吏至ル領左衛門急ニ次郎ヲシテ脱セシメ而シテ後自カラ捕ニ就キ京都六角ノ獄内ニ繋カル

播磨屋文藏筆記 八月十六日朝五ツ時藤本鐵石殿一人僕一人召連立寄候其出立ニハ具足一領ヲ持セ自分ハ手鎗ヲ携ヘ居候何レハ御立越被成候哉ト尋テ候處此度ハ和州ヘ立越ルナリト被申候其節大和案内記ハ無之哉ト尋テ候ニ付幸ヒ手元有合セノ案内記一枚差進候其夜ハ泉州界ニテ一泊シ外人數ハ船ニテ十七日朝左海波止ヨリ上リ大小路ヲ東ヘ河内藤井寺ニテ休息此處ニテ人數集メ武器馬具等調ヘ夫々甲冑ヲ服シ中山侍從始メ銘々列ヲ成シ土民共大變起リ軍カ初マリ候哉ト上テ下ヘト老若男女騒キ立候事夫ヨリ村々土民召集メ狭山城ヘ押寄武器等ヲ分取シ和州五條代官所ヘ押寄代官鈴木源内ノ首打取制札ヲ上ケ獄門ニ致シ夫ヨリ高取城ヘ押寄兵糧武器等ヲ分取リ吉野十津川ヘ立籠リ候 同月二十日七ツ時領左衛門殿立寄ニ相成其出立ニハ衣服立派ニ野袴着シ供一人召連レタリ此供ハ五條代官鈴木源内ノ下部ノ者ナリ折筋文藏并梓清兵衛不在ナリシ故家内ノ者何レヨリ御越ニ相成候ト尋候處今日ハ和州ヨリ歸阪セリ留守中ナレハ兩三日ノ内ニハ京都ヨリ下阪致シ又々立寄ルヘシトテ同

夜舟ニテ上京被致候 同月二十三日淡路義之助殿鐵石殿ノ家内ニその様同道被參候私方ハ間狭ニ付
四ッ橋小泉屋ト申旅宿屋ヘ案内致シ爰ニ逗留ス此處色々話有之トモ畧ス云々 同月二十五日八ッ時
京都豊後屋友七ヨリ店走リニテ書而來リ委細不相認急ニ登ラレ度トノ事故夜舟ニテ上京二十六日朝
三條木屋町ノ借宅ヲ伺ヘハ家根瓦ヲ取拂表裏口等所々破リ甚見苦敷シキ休ナリ是ハ何事ナリヤト驚
キ早々豊友ヘ驛付ケ委細承リ大ニ當惑致シ云々 二十八日朝歸阪ス義之助殿ト相談ニその様此處ニ
置キテハ不都合故備前ヘ送ルヘシトテ義之助殿ニその様向人兵庫マテ參リ舟ニ乘込ミ云々

翌年即チ元治元年二月十六日幕府大和義舉ノ徒安積五郎澁谷伊豫作等十數人ヲ
京師獄内ニ斬ル同七月十九日長藩ノ士來島又兵衛久阪義助等諸藩ノ兵ト中立賣
蛤門應司邸ノ各所ニ激戰シ終ニ敗走シ洛中ハ大半兵燹ニ罹リ人心恟々タリ幕府
ハ之ヲ機トシ獄内ニ繋キ置ケル志士等悉ク斬殺スルコト、ナリ翌二十日平野次
郎及ヒ領左衛門等三十餘人ヲ獄中ニ斬首セリ領左衛門年四十六歳ナリ辭世ノ歌
アリ

君の爲め盡しし事も水の上の

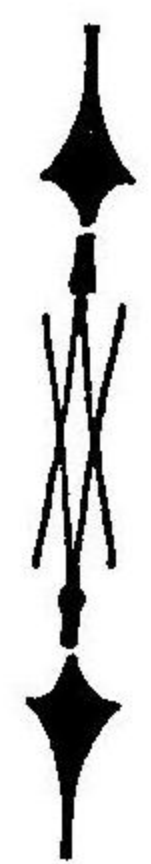
泡と消はゆく淡路しよ人

國の爲め八重の潮路を登り來て

今日九重の土になるとは

明治二年勅ヲ下シ嘉永癸丑以降命ヲ國事ニ隕セシモノノ爲メ地ヲ京都靈山ニ賜
ヒ歲時招魂祭ヲ修メシム是ニ於テ京都府屬西野義上村上快誠同志ト謀リ其首級
ヲ搜索シテ靈山ニ合葬シ碑ヲ建テ從五位山中獻之ニ繋クルニ銘ヲ以テス二十四
年十一月五日東京靖國神社ニ合祀セラレ
領左衛門ノ國事ニ盡スヤ其家族ニスラ其事實ヲ告ケス機密ニ關スルノ書類信書
ノ如キハ親カラ之ヲ燒棄シ領左衛門歿後尙ホ存在シタルモノハ罪累ノ延テ闔家
ニ及ハンコトヲ畏レ親戚相集リ悉ク之ヲ燒棄シタルヲ以テ詳述ニ由ナシ元治元

年藩廳ノ内命アリ姓字ヲ變ヘテ興津ト稱ス明治十二年ニ至リ古東ト復姓ス領左
 衛門子ナシ弟一太夫ヲ養フテ子トス一太夫初貞介ト稱シ後復々泰作ト改ム領左
 衛門妻ハ岡田嶋里ノ二女ニシテ今尙生存ス泰作男子ナシ親戚岡田又五郎ヲ養フ
 テ嗣トス
 領左衛門ノ僕元吉ナル者ハ淡路國三原福良浦ノ人ナリ人ト爲リ豪氣ニシテ劍術
 ナ能クス領左衛門之ヲ愛シ京攝往復ノ間毎ニ之ヲ從フ世ニ元吉ヲ以テ藤本鐵石
 ノ家來トセルハ謬レリ



京都東山靈山招魂社境内墓碑之面

江安積五郎	和左市	河長野一郎	長大村辰之助
水岡見留次郎	深瀬繁理	島保母建	丹伊藤龍太郎
下澁谷伊豫作	同勝將藏	同船田彦次郎	馬黑田與市
尾崎太郎	高野山本實之助	津辻郁之助	三牧謙助
尾崎濤五郎	淡路古東良左衛門	同田中樟之助	丹木村愛之助
津岡見鐵藏	同乾十郎	同森本傳兵衛	鶴松
同尾仲要藏	同山彦嚴瑤房	同橋本若狹	常助
同林兵次郎	同教觀坊	同伊澤宜菴	元次郎
同關爲之進	同河内水郡小隼人	同横田友次郎	忠右衛門
			朝七

墓

贈正五位秋元正一郎小傳

陰 碑 同

文久三年癸亥八月中山侍從始諸士義舉於大和國五條將欲
 除國家之奸黨正天下之名分以恢復神州之元氣卽幕府
 命諸藩大舉攻之烏合之陣乏兵食遂取敗戰死就縛數十人同
 年十月同志士義舉於但馬國生野以應五條而五條敗生野亦
 敗戰死就縛數十人兩處首級檢之京都幕府聽其就縛者同四
 焉慶應三年丁卯十二月幕府奉辭其職而皆理却於斷頭場傍
 聖業大興明治二年己巳二月有詔嘉永六年癸丑以來爲
 王事隕命者賜地於靈山修招魂之祭典則某藩々或親族知友
 請京都府搜索其首以葬於靈山同府權大屬西野義上同少屬
 郵上快誠與同志相謀搜索五條生野各名未葬之首請之府々
 能獎之則以合葬於靈山建此碑銘曰

先人憤起

善盡忠誠

事雖不遂

義氣猶生

自有此舉

奸黨恐驚

皇威愈熾

德化日明

天賜此地

萬古顯名

靈其能慰

爵々如城

明治四年辛未夏四月

從五位山中獻撰并書

九月九日 秋分の日
秋分の日 秋分の日
秋分の日 秋分の日

九月九日 秋分の日
秋分の日 秋分の日
秋分の日 秋分の日

九月九日 秋分の日
秋分の日 秋分の日
秋分の日 秋分の日

神戸田所千秋所藏

秋元安平所藏

Handwritten Japanese text in a vertical column, likely a letter or a record, written in cursive style.

昨日妙壽院様より御葉子拜領致し候
まゝ送り申候夫々御分け戴かせ申さ
るへ候以上
おゆきさの
とどへ
四月十八日 正一 耶
かしこ
此度はをかしな御用にてみやこの上
地に日を送り申居候 母上様は御無
事に候や御おんじ成されぬやう能々
御慰め被下たく候羽織はかひ申候齊
ものは萩原の方へでも御出しに候や
爰元へは届き申さず候單物はしく候
田舎さむらひかひたゞしき揃と相成
候へば若物の見苦しき事更にかまひ
なく候錢困り候はゞ五平様でも誰で
も御頼みにて其日を送り申さるべく
候此度は誠に忠義の人だらけ涙のこ
ぼれるはなしばかりに御坐候歸り候
はゞいきな芝居をはなし申べく候よ
もこの様になら候へば女にでもまこ
とに恐入る人だらけに候なかへ遊
ひいそをかしく申盡しかたく候由良
之助のひん相なご申程の事なりをち
様も御機嫌宜敷候候子供はいかゞ日本
理つよくなる様專一に御坐候目出度
かしこ

在京郷秋元正一耶ヨリ
同人妻ニ送りケル手翰

藏正所藏山庭路姬

Handwritten text in a rectangular frame, likely a calligraphic inscription or a page from a manuscript. The text is written in a cursive style and is partially obscured by a large, irregular tear or stain running vertically through the center of the page.